江戸名所図會

八

ル 4
5105
8

門ル4
號5105
巻8

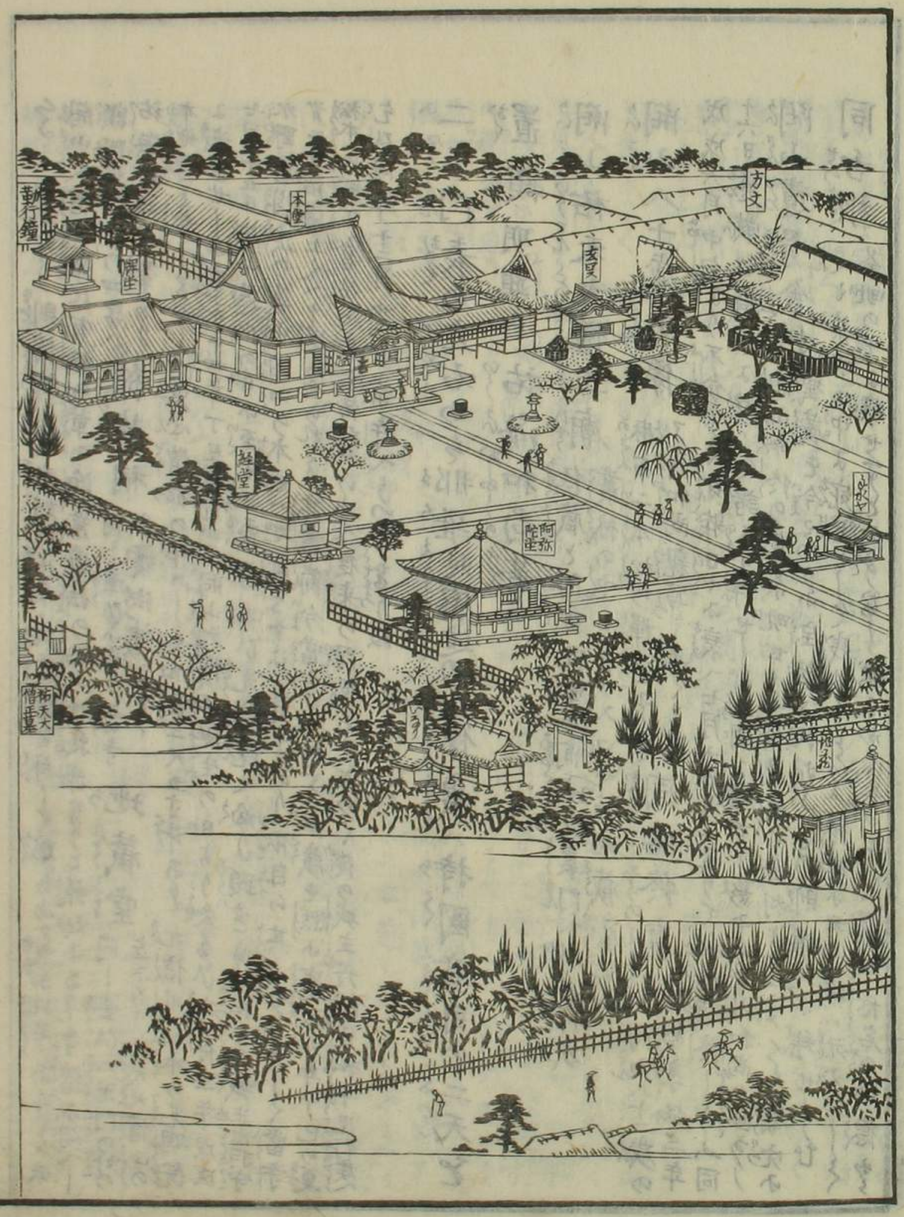
昭和41年12月20日寄贈
原安三郎氏

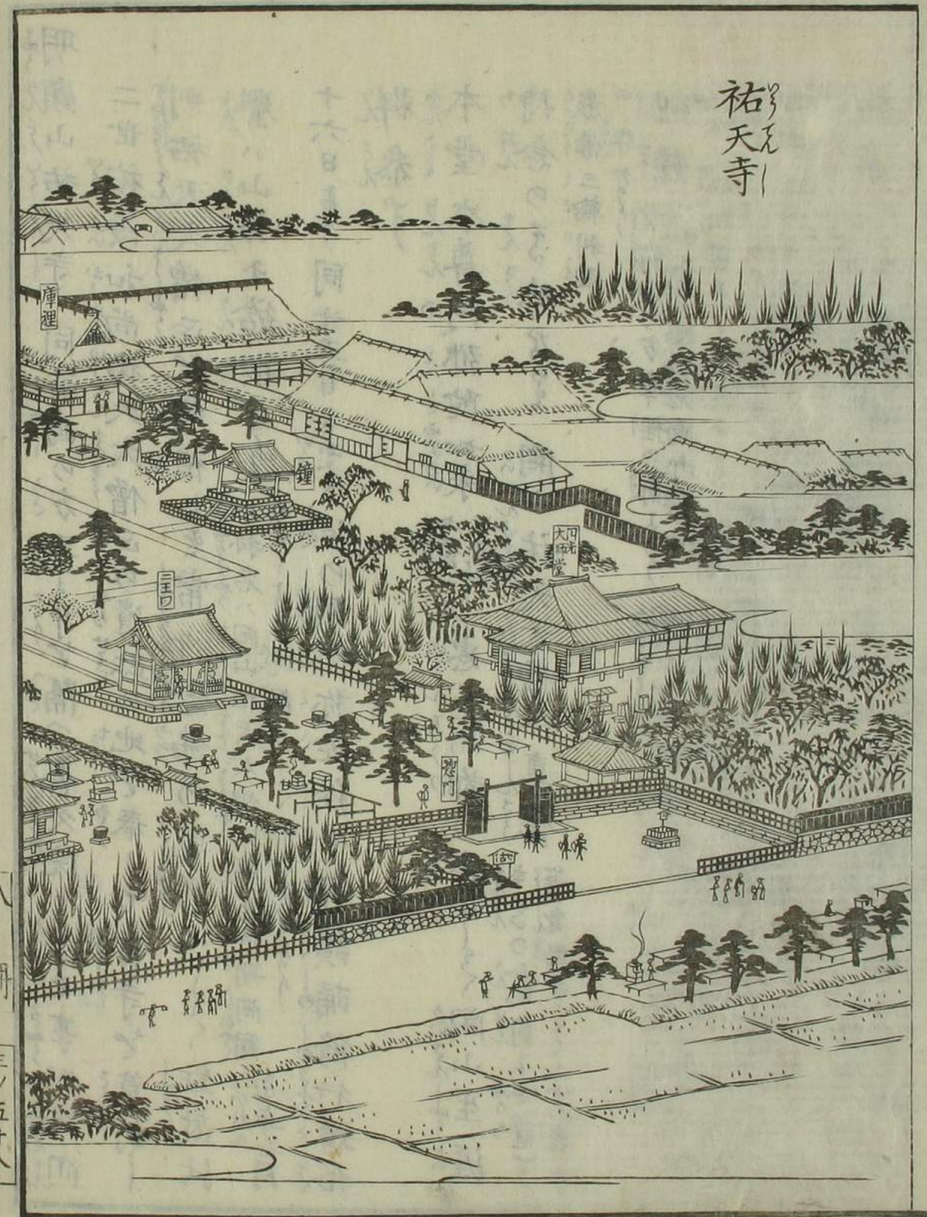
41 9553

明顯山祐天寺　同所西の方五丁斗を隔つ善久院と号し享保年間二世祐海和尚祐天大僧正の遺跡の地を奉して當寺を草創し則祐天大僧正を開祖とし常行念佛の道場やゝく鉦鼓法聲八山林ゆ徐餅せり　此称名ハ開山祐天大僧正臨終の期開闡より連綿として絶えずとなり　毎年七月十六日より同廿五日ゟ至る迄の間阿弥陀経千部讀誦修行道俗群参す

本堂　本尊阿弥陀如来　惠心僧都の作やゝく　開山生涯持念のる像なり　開山祐天大僧正真像　本尊の龕前ゟ安置す　等身佛やゝく八十二歳の影像三輪利鑑の作なり

鯨鐘　堂前右の方庫裡の前ゟあり　圓光大師堂　同一並ひ　法然上人四部と云　一位大夫人桂昌院殿御寄附　強盗あり　終ゆ上人の化導ゟ帰入し出家し教阿弥陀佛と号く　常ゆ上人の御ゆ随従し教化ゆ預り凌上人相模國川村と云へ下向の頃生涯の御記念ゆ自彫造し送りまるとの　當寺ゟ　ゆゆ　まるとの　堂前左の方　額経蔵　霊像なりとそ故あるく　経蔵　の二字ハ祐海和尚の孫へ　阿弥陀堂　同一左ゟ並ひ開山侍授佛ゆ来と称し　惠心僧都の彫刻佛と号く





八ノ冊

三ノ五十八

なるその題なり則僧都一代彫刻の如来ハ此等の像を拜して彫
開山大僧正常に有信の輩ハ浄業傳法の時の侍接佛かと稱ふあり寺僧ハ同へし
額阿弥陀堂の四字ハ稲荷の護法神とす
祐海和尚の筆なり
本地佛と称し
恵心僧都の作
地蔵堂
同一並ひ二王門の左ハ祐天大僧正の
元信州松本の光明院
長二尺五寸半あり
寛永十四年丁丑四月四日開山大僧正誕生の日より失ひ享保三年戊戌
七月十五日開山遷化の日に至て此霊像再ひ光明院へ帰り頭をあらはし
松本の城主出羽守
水野忠周侯の夢中開山の本地ハ地蔵菩薩なりし霊像自ら其すを
才二世祐海上人へ送られし其書簡今當寺に秘蔵を然に寛政九年丁巳の夏
松本の城下倉品七郎右衛門とかの人従来の因縁あるを以て後の城主丹波守松平光行侯へ
乞ひ同年十二月廿三日當寺へ帰し
四

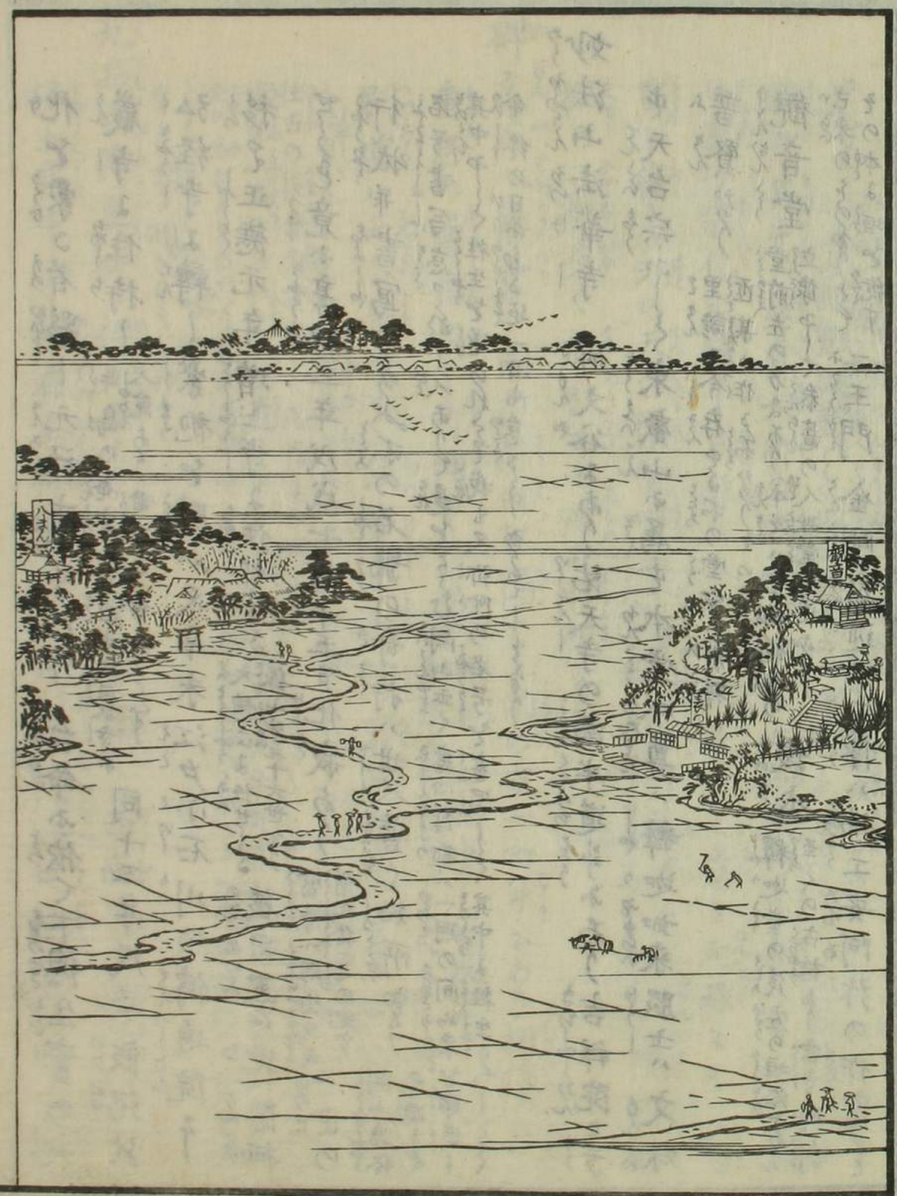
二王門表の左右の邪羅延密迹の二像裏ハ持國廣目の二天を
置額明顕山祐海和尚筆

開山祐天大僧正廟
往蔵と阿弥陀堂の間より裏門へ行左の方

開山八十歳影像
麻布一本松の禅室中に入口に石地蔵堂あり
叢林の中
了月和尚親写一画くと云
同臨終真影
開山八十二歳の時享保三年
戊戌六月中旬より不食しく身弊日に衰へ七月十五日に至りて称念臨終
十六日遺骸を倚子に移し諸人に拜せしむ期に写せし影中に了月和尚の画
開山遺骨舎利
開山命終の後茶毘せし全身悉く舎利となる多くの廟穴に同
埋蔵も今に宝塔へ収むる
同舌根
是も茶毘の中に壊せすと云
茶毘の中に焼せしと雖ども舌根ハ元火に焼しく
縁起に云
然に止るものハ累年称名の功徳

その化導に妄語なき
開山大僧正書写六字名号
中出現不焼名号寛寿守名号等の現益ハ普く世に
寺記にあり
其余の名号奇特尤多し
開山大僧正長悦像
大将軍家
開山石川の傳通院在住の頃元禄年中
瑞春院殿
御感賞のあり寺親鸞祭の前
鶴姫君様へ進せし
上意あり
上人へ
当寺
上覧ましし
三月當寺
雑祭の儀式執行あり
御法号を
時
累済度如法衣
二十五條なり
累ハ下総國岡田郡羽生村
顔形類少き
絹川と
川へ突落し殺して後死骸を八同村
悪女
親鸞を造りし
悪ミ情
浄家法蔵寺と
正保四年丁亥八月十日
開山大僧正の化益
寛文十二年壬子三月十日の夜に至て累ハ廿六年の怨執悉く散
して生死解脱の本懐を達せし
紙
蜀江錦九條袈裟
増上寺在住の頃開山上人
女院御所へ
血脈
妻あり
猶六人目の妻の娘
普く世に
委しくは解脱物語と云

開山明蓮社顯誉上人
愚心と号す
祐天大僧正ハ奥州岩城郡新妻邑の
産なり
西村善内と云ふ者の子にて寛永
十九年壬午正月元日生る幼名三之助と云
檀通和尚に従ひ縁山に修学
檀通師に従ひ北総飯沼に
其頃
八師の歳三十六
在住
解脱物語と云ふ
世に知る所の累の怨霊解脱
の誉ハ尤著し
後故あり武州牛島に潜居す道俗



碑文谷
法華寺

化を蒙る者夥し元禄十二年己卯　台命に依て下總生實の大
巖寺に住持し（牛島の庵室より直に大巖寺に入院あり世以て希有とす）同十三年戊辰飯沼弘
経寺に轉し紫袍を賜ふ又辛未江戸小石川の傳通院に
移る正德元年（大僧正に任せらるる　緣山第三十六世なり）後目黒の地へ隱栖
せらる竟に享保三年戊戌七月十五日化寂あり（當寺は則祐天大僧正終焉の地なり）一世の
行狀并書寫しめる所の名號の奇特は世人普く知所なり（開山臨終の頃まで
名号書写怠る事なし）人ありて是を求むれば（開山云く惠心僧都は一期の間如来を彫造し
其中に往生を遂られ我も又弥陀の名号を書写し其中に往生せしと
命終の日に臨る迄一日も怠る事なし）

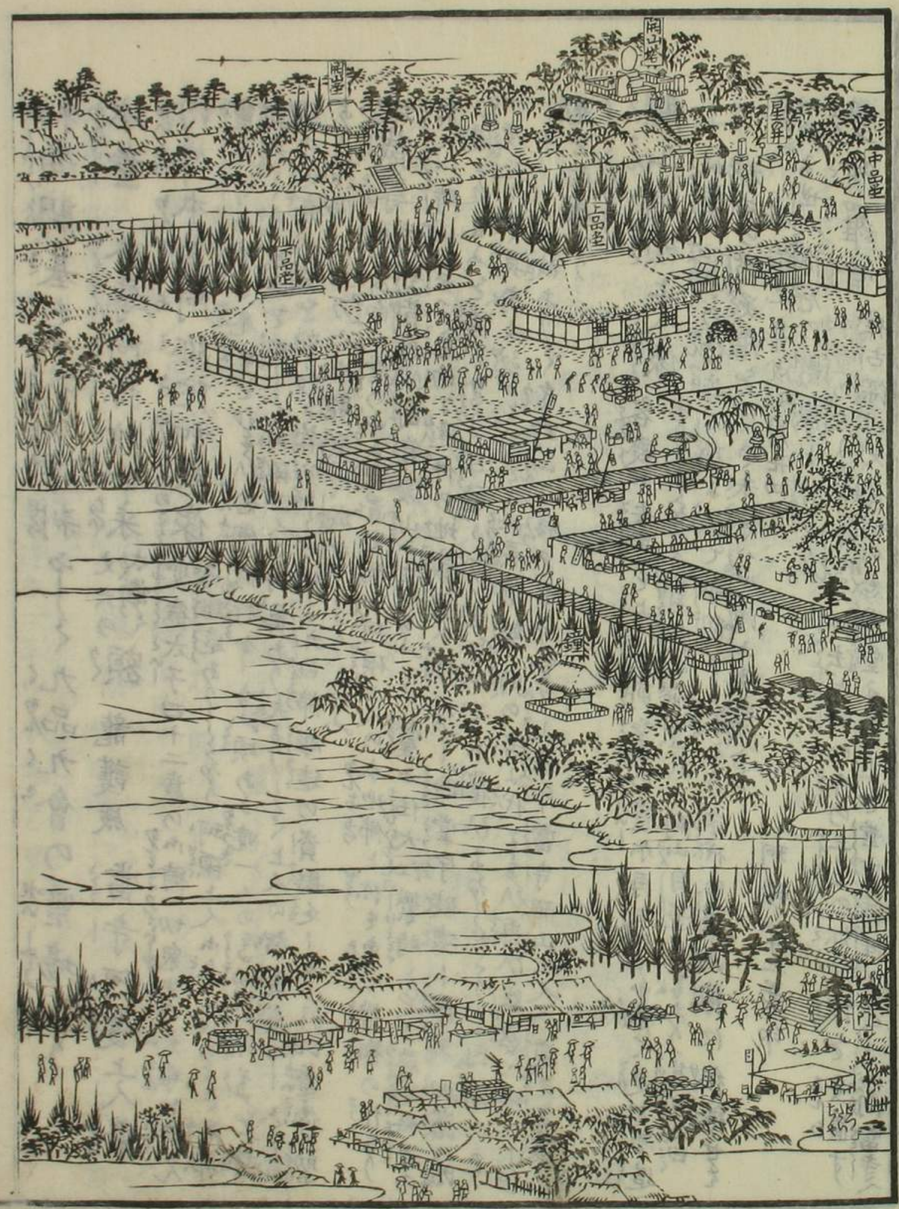
妙法山法華寺　碑文谷にあり祐天寺の南半道斗にあり吉祥院と号
也天台宗にして東叡山に属す本堂本尊は釋迦如来脇士は文殊
普賢なり（里諺に今存する所の堂宇は飛驒匠某の作なりと）

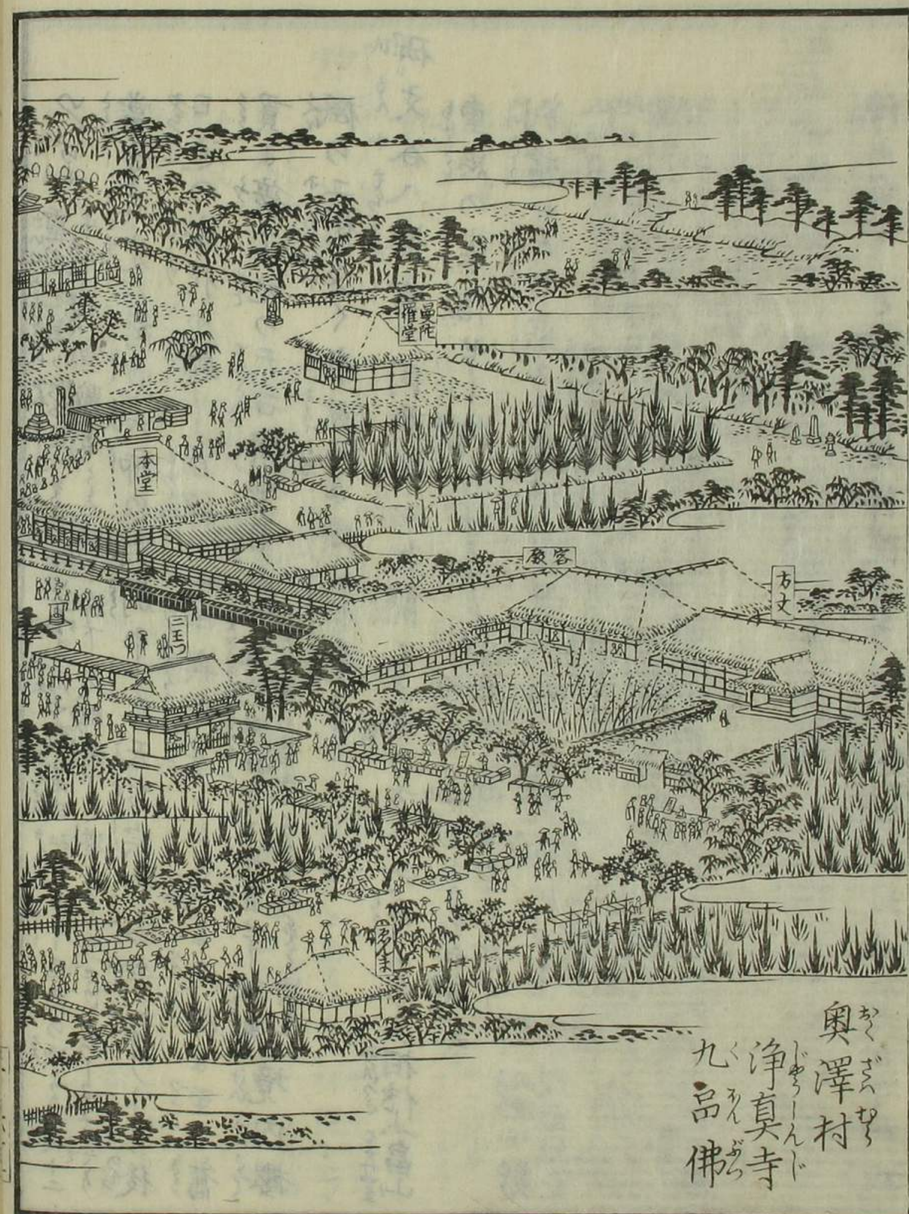
觀音堂（堂前左の方にあり本尊は十一面觀音の立像にして絲竜の人此堂に通交す）　榎木（釋迦堂の後左の垣添にあり至て古樹なり當寺開創
已来のものなりと）
その本に垣を繞す　二王門　金剛密迹の二像は佛工安阿弥の作なりと

霊威尤著し流布世に信仰す寛政紀元の年己酉の頃より後十二
年斗の間霊驗著し頻に都下の人群参して遊もさりあへさしとなり
当寺其先は慈覚大師の開創にして天台宗の古刹なり後
日蓮の宗化に帰し日源上人中興開基なり竟に元禄に至て舊
貫に復し元の天台宗を唱ふ（今堀内妙法寺に安置せし日蓮大士の像は當寺より移せしなり）　境内櫻
楓の二樹多く春秋に顧る壮觀なり

碑文谷八幡宮　同所耕田を隔て南の方一町斗にあり相傳ふ畠山
重忠の崇信せし所神（神躰は秘物なりと云或は云東帶の銅像なりと）
別當は天台宗にして法華寺末　神宮院奉祀なり（昔は此地の農人社司なりし
往古の頃倉街道にして此宮氏は重忠の家臣の遠裔なりしかと或人云八幡宮の西に接する地は
鎮守八幡宮の社地へ埋蔵しなりと或は路傍に古碑ありしを此地の土民
なる名なりともいふ又江戸鹿子に草帝は忠義なりしを門卒都婆一基を建
て共に詳を知らず唱ふるなり）

九品山淨真寺　碑文谷より一里あまりを隔て西南の方奥澤村にあり
淨土宗にして唯在念佛院と号す（京師知恩院に属せり）延宝六年戊午珂碩





奥澤村
浄真寺
九品佛

和尚開基なる不の浄刹中一く九品九會の霊場

本堂　本尊阿弥陀如来　丈六の木像　額　龍護殿　當寺珂慶上人筆

内佛本尊阿弥陀如来像　聖徳太子四十二歳の時一切衆生の災難を除く

霊岸寺の傍に庵室をむすび念佛修行の頃ある時一人の僧此寺に来り上人に

賤の道俗利益をかうむる者少なからず珂碩上人の附属あり夫れ

より諸佛天三万六千躰悉く成就し九品佛彫造の資財を一一此霊像の胎

地蔵尊　本堂の向小堂の中に安置を開山珂碩上人の本地佛と称す惠心僧都の作なり

此寺なる背丹波國箕濃の山に立せ給ふ繁時とゝなる悪逆無道の

狩人一時山に至て急雨に逢件の地蔵堂に休らひ一時堂宇破壊し佛躰雨露の為

一度死しく冥府に入て自冠の笠を覆ひまゝ再び娑婆へ帰り因縁ありて

故あり〻る野山に移る此尊像繁時の苦を代て再び娑婆へ帰り

是を附属し了山法印當寺開山上人の道光を慕ひ

開山珂碩上人像　容殿に安置を上人生前常の霊に再三ゝ依て是を彫造

あり此肖像に添置れ開山自筆の書あり其文に曰

此像は如来の像に告三度に依て相刻す末代の輩此像に結縁せ

現生の諸災難を除き未来は必浄土に導へし

曼陀羅堂　治元年戊午七月廿四日　珂碩四十二歳印

此故に世人除厄の影像と称す

本堂の左に古深川大島村の念佛堂にあり〻を堂宇浄性といふる門當寺へ

移し奉る其餘五智如来あり〻て他の像に異なり

中品堂　同右三品の阿弥陀如来の像を安置せり

上品堂　本堂に向て上品中生上品上生上品下生以上三品の阿弥陀如来を安す

下品堂　同左に並ぶ下品中生下品上生下品下生以上三品の阿弥陀如来を安す

以上九品の阿弥陀如来九體を安置も各座像にて一丈六尺あるも佛像一躰毎に圓光あり

光あり〻て附属の小佛一千一軀に九躰共に開山珂碩上人の彫造

常に一日三銭を貯へ造佛の費に充寛文四年に同七年に至て其間

四年竟に九品の弥陀像全く成就

洪波の為に破られる後延宝六年戊午に此地に移る初は霊岸寺の地に

上人諸堂不成しく化せる後才珂憶上人河州玉手山安福寺より来り建立

九品堂の額は珂憶上人の筆なり

開山堂　上品堂の後古城跡堤の上にあり

開山珂碩上人七十二歳の影像

奥澤九品佛縁起に椅子に腰掛て

躰相あり

開山珂碩上人廟　開山堂の右の方に石の離を造り

唱人近頃

星の井　開山廟の前

小坂の上にあり

有信の人偏に称名せれば白日にても

水底に衆星の光を見る

鐘楼　本堂の右にあり九品の阿弥陀如来の

像を鋳上

寛永五年に造る所の

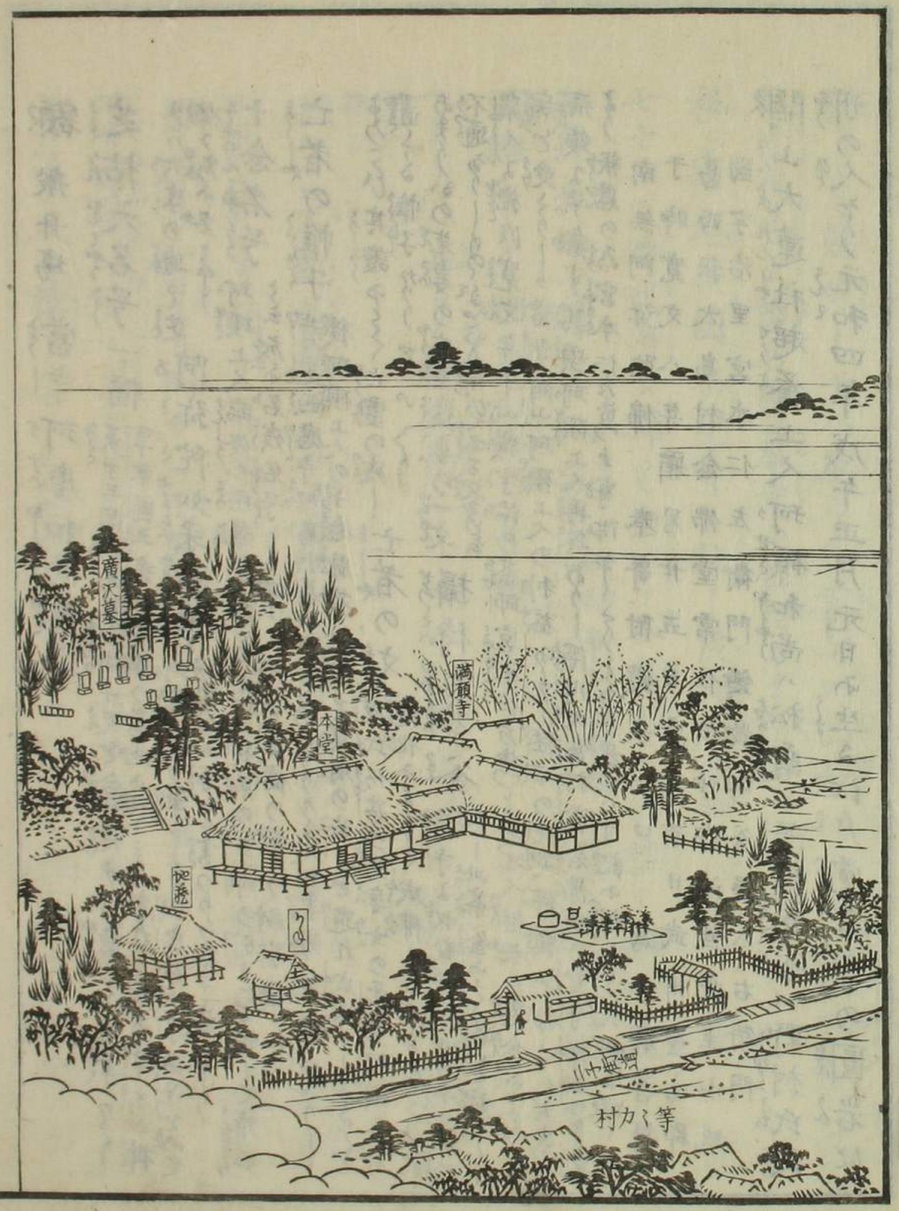
鯨鐘

楼門　同し所にあり

楼下に金剛密迹の二王の木像を置り

二十五菩薩の像を安置す

満願寺
くまの
目まる


庵ヤ墓
満願寺
本堂
祝殿
小城湾
村カ〻等

額　般舟場　當寺珂慶和尚筆

芝枯大名号一幅　長十三間中九尺白布十反を合せ用ゆ珂憶上人の筆なり草木國土悉皆成佛の意地に住し書れ一方に草木に掛枯るを八字の通て芝と名とす　阿弥陀如来画像　珂憶上人の筆やゝ細字の六字名号をかゝれ像なり

十念名号　珂碩上人臨終の頃筆せられしとも号く其余る徳の筆の名号多し

亡者の帷子　背芝西應寺町鳥羽屋三郎右衛門なる人の妻難産して死しを後珂碩上人の十念脉符を授け冥府の苦を道れ成佛しるよろこひに堪氏伊某の先妻女の死霊珂碩上人の徳化ふかくして成佛しるよろこひに此帷子なり亡霊の残し置くる帷子なり

亡者の文　攝待大茶釜　當寺より収む毎年四月千部の時此茶釜にて茶を煎しあまりかの先妻の亡霊後妻の一文不通なりしかの文を用ひ茶を施し寛文年中山城宇治の茶師宮本仁左衛門なる人継母の怨念ふかくして病と受て病頓て平愈す其頃珂碩上人の利益継母の死霊佛願を仰く仁左衛門より報恩のため宮本仁左衛門より寄附す　深川大島村常念佛堂の堂守浄正の記ふ詳なり其銘ふ曰く

南無阿弥陀佛　奉寄附鑵子一口　為二親菩提

于時寛文八年霜月廿五日當九百日　武州豊島郡葛西荘大島村念佛堂常住物沙弥浄性施主山城國宇治里宮本仁左衛門鑄物師釜屋八右衛門

開山大蓮社起誉上人珂碩和尚ハ松露と号し俗姓ハ野村氏武州の人なり元和四年戊午正月元日ふ生る江戸覚真寺の圓岩に

投しく薙染し十八歳ゆく業を珂山和尚ふ受珂山和尚を下總生実大巌寺ふ住せ和尚後年武陵の霊巌寺ふ住持せる頃師も亦從つゝかしこに移る初越後國泰叟寺ふ住し後此地の郷民の招ふ應し歳七十七の時武州ふ帰て世田ヶ谷奥澤ふ幽棲せ當寺題し遂ふ元禄七年甲戌十月七日化寂せ本朝浄土高僧傳ふ元禄八年報壽八十許やゝ入寂せとあるハ誤なり師の姿貌温雅やゝく慈恩尤浚く奇験孔多し凡在世の感應ハ勝数せへゝし其ゝ最煥灼とゝく人ゝ是を仰ゝ意を換る

當寺ハ不断念佛の道場やゝく閑寂玄隠の浄舎なり毎年四月三日より同十二日ふ至る迄十日の間阿弥陀経千部讀誦修行七月十六日より同十八日迄虫拂やゝく當寺什宝を出し諸人ふ拝せしむ此寺境内ハ昔小田原北条家の屬将吉良家の老臣大平左馬或岩羽守とい人の構へゝし塁隍の旧跡なりとゝく今も北より西南の方へ

繞く堤の形空堀の跡を存す後門の方ハ大沼ゆくゆくしとあり今ハ耕田となるなり

大平山　奥澤　新田村ゆゆしく大平出羽守の砦の跡ありとなり

按ずるに等々カ村満願寺所蔵の天文弘治の古文書ハ大平清九郎とゝる名往々見えた大平左馬と云も此人の孫

致航山満願寺　二子街道等々カ村道より右ハあり新義の真言宗ゆゆしく山城醍醐報恩院に属し開創の時世詳ならず中興開基を定栄法印と号し慶安年間寺領ハ寄附の朱章をもつて本尊ハ大日如来なり當寺ハ世田谷の吉良左兵衛佐源頼康の祈願所ゆゆしく其頃ハ頗る盛大の寺院なりしとあり

世田谷私記追加ハ云當時往古政忠の男経舜住職ゑ豪徳寺所蔵の吉良系図に政忠の子経舜満願寺ゑとあり當寺ハ天文弘治天正等の年号ある吉良頼康東北條氏康氏政等の證状或ハ書簡ゑ〆十八通半あり其文中ハ世田谷深澤村の満願寺とあるハ其故を志るし背等々カハ深澤ゑ属し中一通ゆゑ医王山満願寺より等々カへ移し今ゆゑ又雷古文書の小名ゆゑ医王山満願寺ハ後世致航山ゑ更ゆゑんゑ往可参の

ゆゆしく廣澤先生の筆又本堂の向拝ゑ掲く満願寺と書せしハ

息男九皐の書なり

大蔵村年貢之内十貫文者納　石井戸新開五貫文　満願寺へ一貫分
文淺之七百五十文之外　○定之二百五十文　姉君之
芝村十一貫文者納　弓田分二十貫文者納
坂戸河東十二貫文者納　無沢分五貫文　者納
弘治二年丙辰十二月十八日

吉良家朱印

世田谷之内満願寺之事者為山居寺同前に候分之田相任為其上連々役寺家
再興有之所務以下勤行之事修之者也　并細於末被守之事分候
恐々敬白

天文廿一年壬子二月大吉日　左兵衛佐判
誓音寺

世田谷之内淡沢村満願寺分於当年諸役免除一向不可有之候
為後日證状如件

天文二十三年甲寅卯月大吉日　右兵衛佐頼康判
満願寺

於当山満願寺再興之為永代諸役不入者也両家之不可有相違候
仍為後日證状如件

甲寅二月吉日　右兵衛佐頼康判
満願寺

此古文書満願寺并び農家等に散在して全かるをとれり

廣澤先生之墓　同境内堂より後の方岳の上にあり

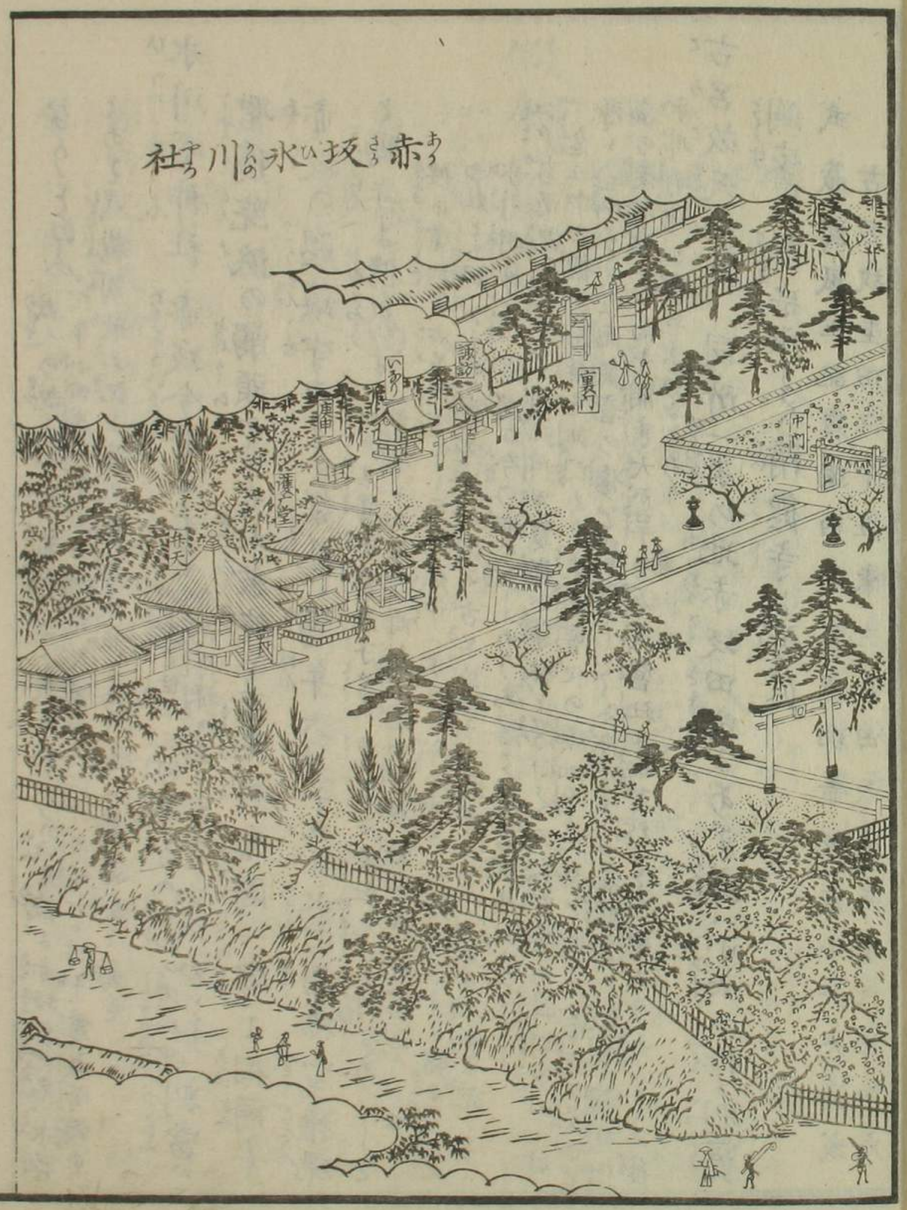
廣澤先生は細井氏通称を次郎太夫と唱へり或は思貽庵蕉林庵等の号あり江戸に遊んで書法を雪山にまなび名冠にしく城西青山に隠る紫微字様観鵞百譚撥鐙真詮篆體異同歌奇文不載酒字林長歌等の著述あり碑面左のごとし

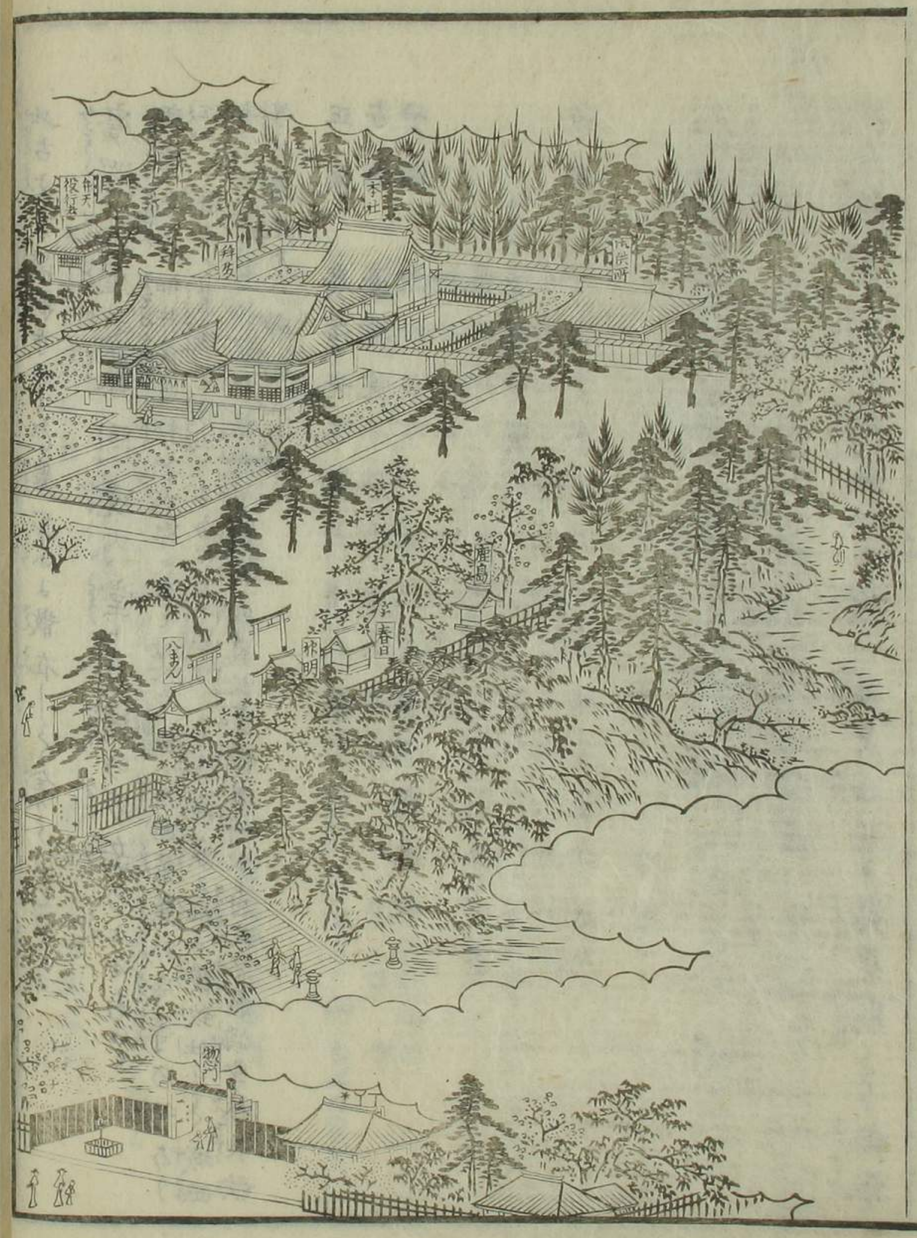
正面　廣澤先生細井君之墓
左面　豪徳院不孤有鄰大居士
背面　諱知慎字公謹號廣澤姓藤原氏
細井父知治母山本氏
萬治元年戊戌十月乙亥八日壬申
生遠州懸川
享保二十年乙卯十二月廿三
日戊子卒于江戸城西于寝享年七
十八
右面　孝子知文建

其余先生の父母及び息男九皐等まで悉く細井一家の塋域と地ならしく垣をめぐらしゐる中にことごとく同姓の人の墓碑あり孝子知文とは則九皐のことをいへり

赤坂御門　糀町の方より青山へ行道赤坂への出口なり此御門は北斗形とて江戸御城の外構へ多きが中にも殊更勝れる縄張

赤坂氷川社





なりとかゝ　或人の説は赤坂は菖山の辺の坂なれハかく云と按ふ赤坂の地名ハ永禄二年小田原北条家の所領役帳ゆゑ江戸赤坂六ヶ村千葉氏所領也
とあり武蔵國風土記ふ荏原郡赤坂庄とあり今ハ豊島郡ふ属也

氷川明神社　赤坂今井ゆあり　世ふ三河堂とゝゆ天和の頃松平参河守様ゆ屋しきなりしかゆ名とす　別當ハ
聖護院流の觸頭ゆ〜て大乗院と云祭神當國一宮ふ相同し
赤坂の總鎮守ゆ〜く祭礼ハ隔年六月十五日永田馬場山王権現
と隔年ふ修ゆす

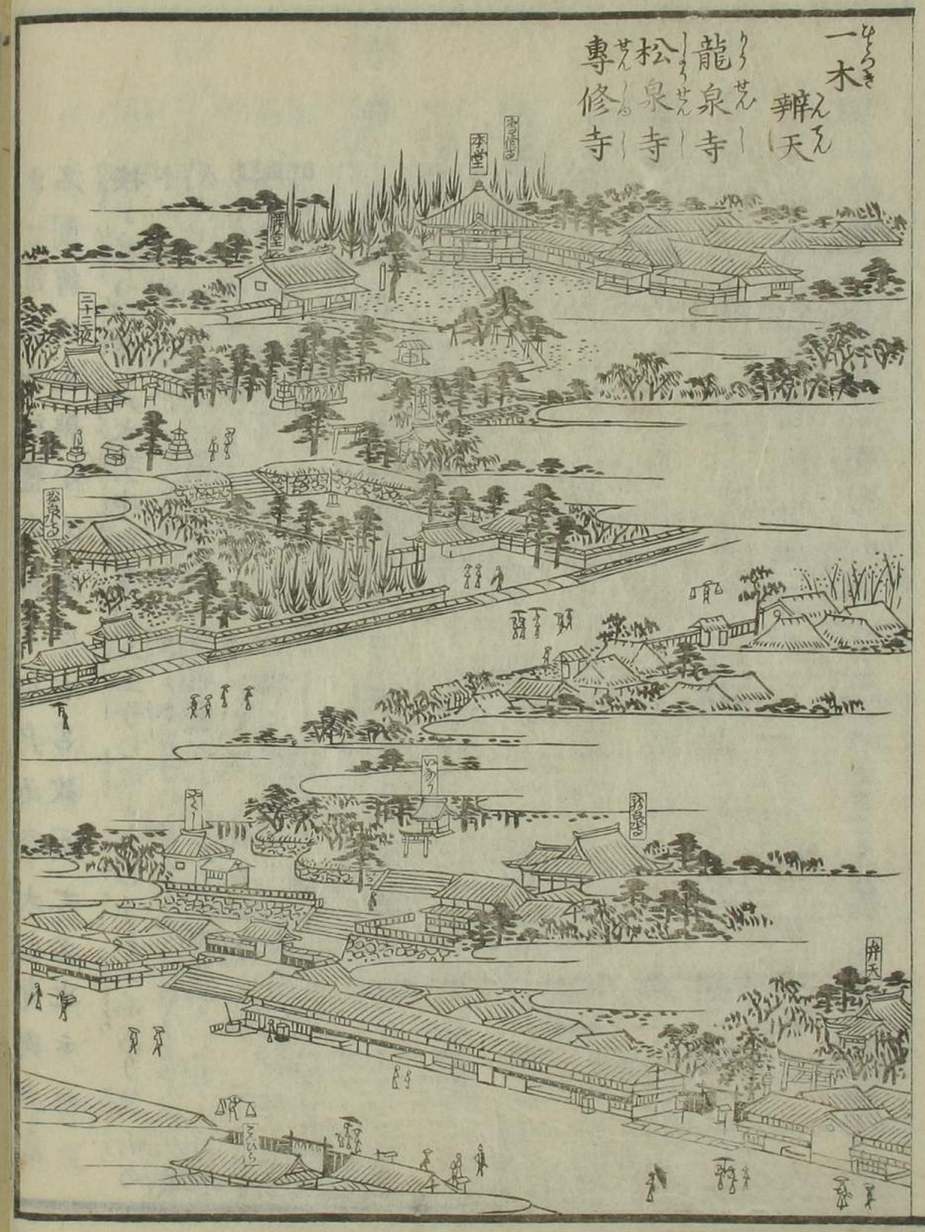
按ゆ當社を古呂故宮とし又享保中一ゆより今の地ふうつ〜諸書ふ見ゆれとも詳ならす　寛文江戸名勝志惣鹿子等の草帝ゆ當社元一木村ふありしを享保十五年己酉今の地ゆ遷座社を造営ありと云
古呂故宮と称せるこの所今の一ゆふ記しく
永川明神ハ同縁岡ゆ今の地ゆ記しあり名別の社なるへし
名所記ふ天暦年間江州甲賀郡ゆ蓮林と号け天台四明の法門を
一念三千の観行を凝せ洲ふ夜を明し夢中ふ蓮林化
得く土中より十一面観音の像を感得し安置ゆ一ゆ観音と称す
窟の後尚暦二年丙午開東大ゆ早せ万民當社ふ雨を祈ゆ驗あり夫ゆ後
永川明神と崇めまつるとあり

古呂故天神社　同所一ゆの地赤坂田町ふあり或ハ小六ゆ作る別當ハ
洞家の禅宗ゆ〜く清德寺と号ス

武蔵國風土記殘編曰　荏原郡赤坂庄小六天神或
古呂故圭田三十五束三毛田天或天皇三年甲戌
十一月始行神禮有神戸巫戸所祭大巳貴與少彦
名園韓神也號小六者以古呂故岡之名也云云

按ふ紫の一本ふ此大明神元當國八王子の辺ふ水呂子と云ゆあり其所の
永川明神を此ゆへうつを道灌の書ふ水呂子の某ゆと云ゆあり又同書
及ひ江戸名所括ゆの書ふ慶長の頃開東の小六として美貌の人ゆある馬追
あり〜く此赤坂ふ住せ常ふ永川明神をる信し後其家冨ゆ依て社の破壊を
再修す故ふ後ふ小六の宮とあり小六明神を
時ふ本武蔵の垂跡あり〜とあり諸説紛々〜く詳ならす姑く風土記の説を用也
按ゆ可考ゆ

信康山龍泉寺　同所一ッ木町道より右側ふあり　浄土宗ゆ〜く花洛
知恩院ふ属せ開山を隨流和尚と号ス寛永十一年の開創〜り
當寺佛元和尚ハ扶宗の志厚く曾て字信録千巻を著し刊行
して普く学徒ふ示せ尾州の産ゆ當寺ふ子安観世音を安
置せ聖観音ゆ〜て傳教大師の作あり又同し相殿ふ茉師佛
ゆ〜く安せり同作ありと云世ふ一ゆ観音一ゆ茉師と号本ゆハ立
像浄丈三尺餘の弥陀ゆ来行基の作あり照士観音勢至ゆ両
像ハ作者ゆ〜く又境内天満宮の宮あり〜く稲荷を相殿ふ



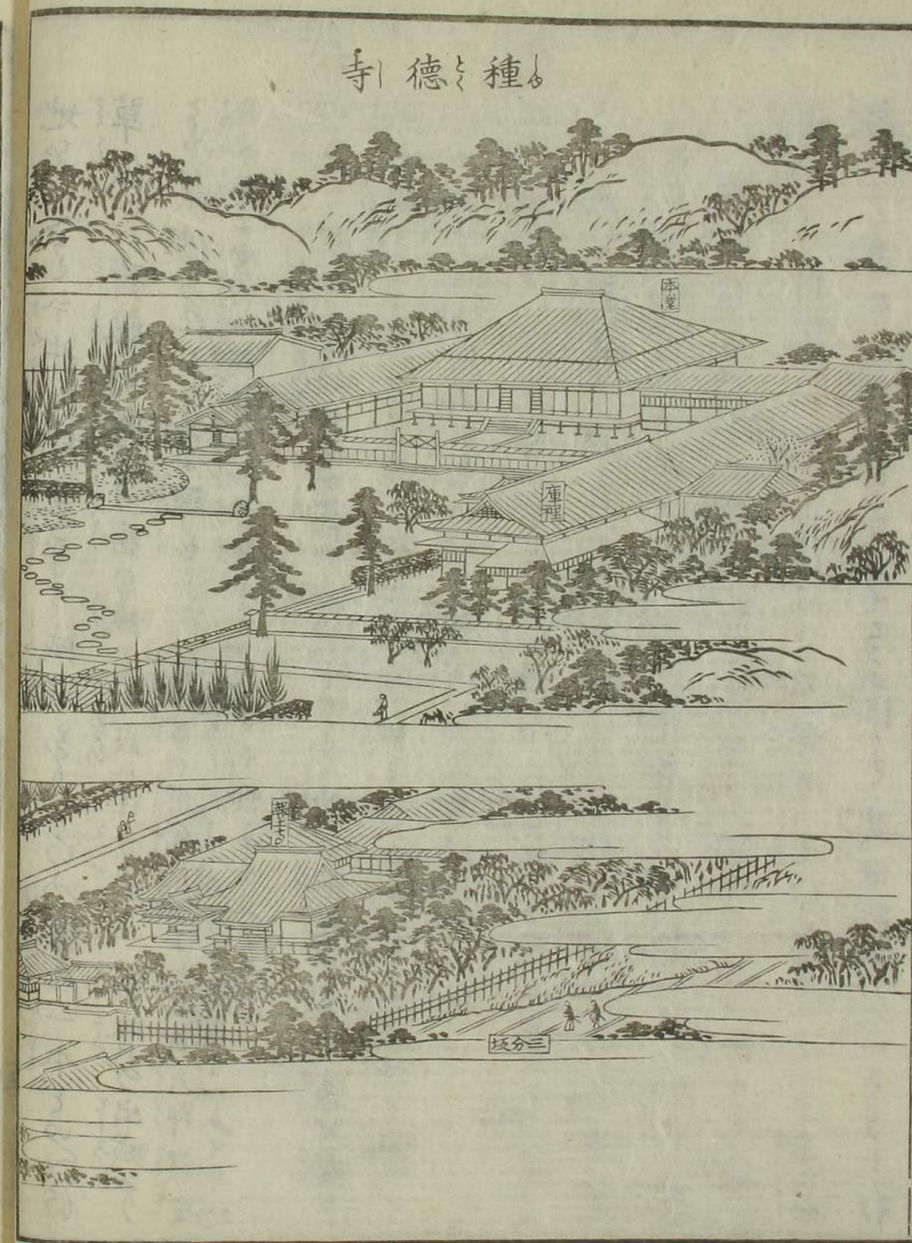
天満神の神像ハ東叡山慈眼大師作らせらるゝ所なりと
云伝へ

平河山浄土寺　源照院と号し同所龍泉寺より半町程南の方
同一側にあり浄土宗にして縁山に属す本尊阿弥陀如来ハ座像
四尺餘作者詳かなし開山ハ教誉聖公上人と号す中興ハ源蓮
社本誉利覚一故と号けるも當寺昔ハ市城内平河口の辺に
あるを元亀三年今の地に移されしと云

一行山専修寺　同所寺町にあり當寺も縁山に属する所の浄刹
にして本尊阿弥陀如来ハ恵心僧都の作丈三尺開山ハ寂蓮社
墨誉上人と号し昔ハ青山にありて勢至菩薩を安置し草堂
なりしを永禄年間開山上人一宇の梵宇とし其後赤坂水川
明神の辺に移るを又寛永に至て同寺町に地をかへられ遂に
元禄に至て今の地に移る往古安置の勢至菩薩の霊像ハ今も當
寺に存せり金銅にて甚古佛なり

一木原　今赤坂傳馬町の裏通僅より一木町の名を残せり昔ハ此辺
なゝゝ一木原とのひ矢盛荘七郷の中わく古き名ありと云中古より
上下と二つよりあり上一木ハ四谷鮫ヶ橋の辺をいふ今四谷ゝゝ坂ハ禅閤業
王寺といふ薬師ゝ業の霊場あり昔ハ境内より大木の榎あるを是を一木と云
又下一木ハ此赤坂わく同所清岸寺わも業師あるく業王寺の霊像と同作
わく共より一木業師の称あり大樹の榎あり
人次と書しを後大樹ふよりく北条五代記大永四年正月十三日北条氏綱
後一木と書改めると云傳ふ
上杉朝興より打勝敵の首とも実検一木原より鎮打揚作法のく
勝閑を執行ゝゝ北条家の所領役帳より大田大膳亮所領の
中に一木貝塚の地名を加へ貝塚を
糀町よりあり志れハ糀町の辺も一木の内なりと或人云此地町屋よりしハ
天正十九年の頃なりと
狩野興意墓　同所三分坂下霊鳳山種徳寺の境内にあり當寺を
大徳寺汎の禅園わく昔ハ相州小田原にありしを天正十九年
糀町より引き後又當所より移さる開山ハ東光知灯禅師と号ス
医王水も當寺の霊泉なり
今井古城址　氷川明神の西北の方松平藝州侯の中屋きの
地をいふ今井四郎兼平ら城址ありといふ紫の一本とい
草紙ハ齊藤別當實盛の城とし或ハ田子先生義賢の出城あり
もいひ伝へれも共に詳ならず北条家の所領役帳に大田新六郎渡辺丹後
氏家系より宮内少輔勝行北条家より此地を所領にかゝ又牛込
赤根山　紀州公邸中屋敷の地をいふ昔ハ此地ハ多く茜を産せ
故に茜山とよびしより今紀伊國坂と呼ぶ地昔ハ赤坂と称へし
となり赤根山の坂あれハかく赤坂とそ号けしと云
圓通寺舊跡　同所寺町にあり此地申の方より寅の方へ向ひく
下る坂を圓通寺坂と云も此故なり今此地に佛智山圓通寺
といふ日蓮宗の寺あるとも古の圓通寺とハ異なり往古廢
せし圓通寺の洪鐘ハ圓通坊といふる沙門建立せる所とそ銘ハ
深草元政法師の撰せる所あり其鐘今ハ亡ひくれといへも古きを
存せんかゝる草山集ふ出るを以てこゝに記しく其旧跡を失ハさるしむ

塔中
塔中


種々德寺
本堂
庫裏
三分坂

赤坂圓通寺鐘銘並序

武州赤坂圓通寺鑄千斤銅鐘備乎十二辰之候
按大集經菩薩應類悲願化作十二時獸在宝山中
修法縁慈而爲一切精魅之主制彼撓亂護持世界
圓通之舉其意在住持僧某介於人乞銘於余因
以十戯弁句勒爲十二韻贈焉客曰雖然如其
遊戯之余曰諸佛菩薩爲羣類示種々身現種々
設種々何法以至螺鼓鳴鐘悉是莫不遊戯
云土似此銘曰
鼠山流光人未驚牛王出世振梵聲
虎狼野千氣縱横兎角方便誘群情
龍宮高處擊華鯨蛇室睡破覺心生
馬腹忽寔聖胎成羊鹿牛車休復裏
猿啼霜降月色清雞人未唱客先行
狗不夜吠王舍城猪觸金山轉崢嶸
又諸世間如幻墨爲師如児戯余爲似窈學之人也宜
遊戯翰墨爲佛事其爲似窈學之人也宜
會作故

崑崙山玉窓寺　同所右側青山家の邸弟の間よあり　禪宗ゆゑ

開山ハ普光禪師開基ハ青山氏忠俊の女玉窓秀珍大姉なり故ゆ
寺号とせ本る観世音の像ハ中将姫香を以て是を製る所と
なり

青山ハ赤坂の西渋谷より北なり此地麻布の郷ゆ属せり天正の
後此地を青山因幡守忠俊よたまへり其頃ハ渋谷への街道も共よ備へ中

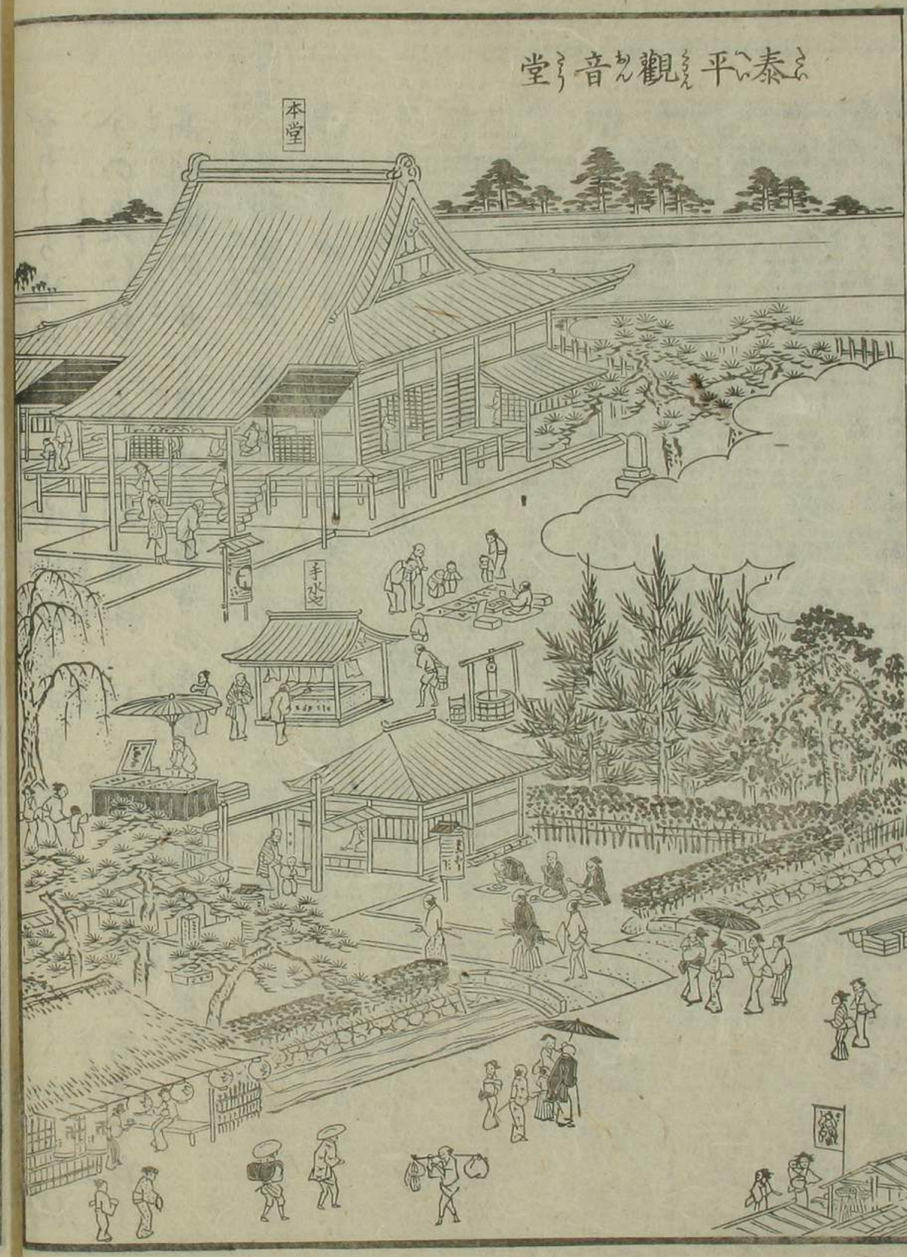
ふしく殊よ廣くふしく其中間ゆ路を開き兄弟路を隔て住居せれし
ゆり忠俊の寺ハ道より北ゆありて玉窓寺と則當寺是なり又道より南よあるを
幸成の寺と梅窓院是なり或人云此地ハ天正の頃山口重政の第宅なりしを
後聟の高木主水正正次よ地を割く与へらるゝとなり方ありて後此地を青山
家よ賜ふといふ其地の廣なりしより
いつしか青山と唱へ来まるなり

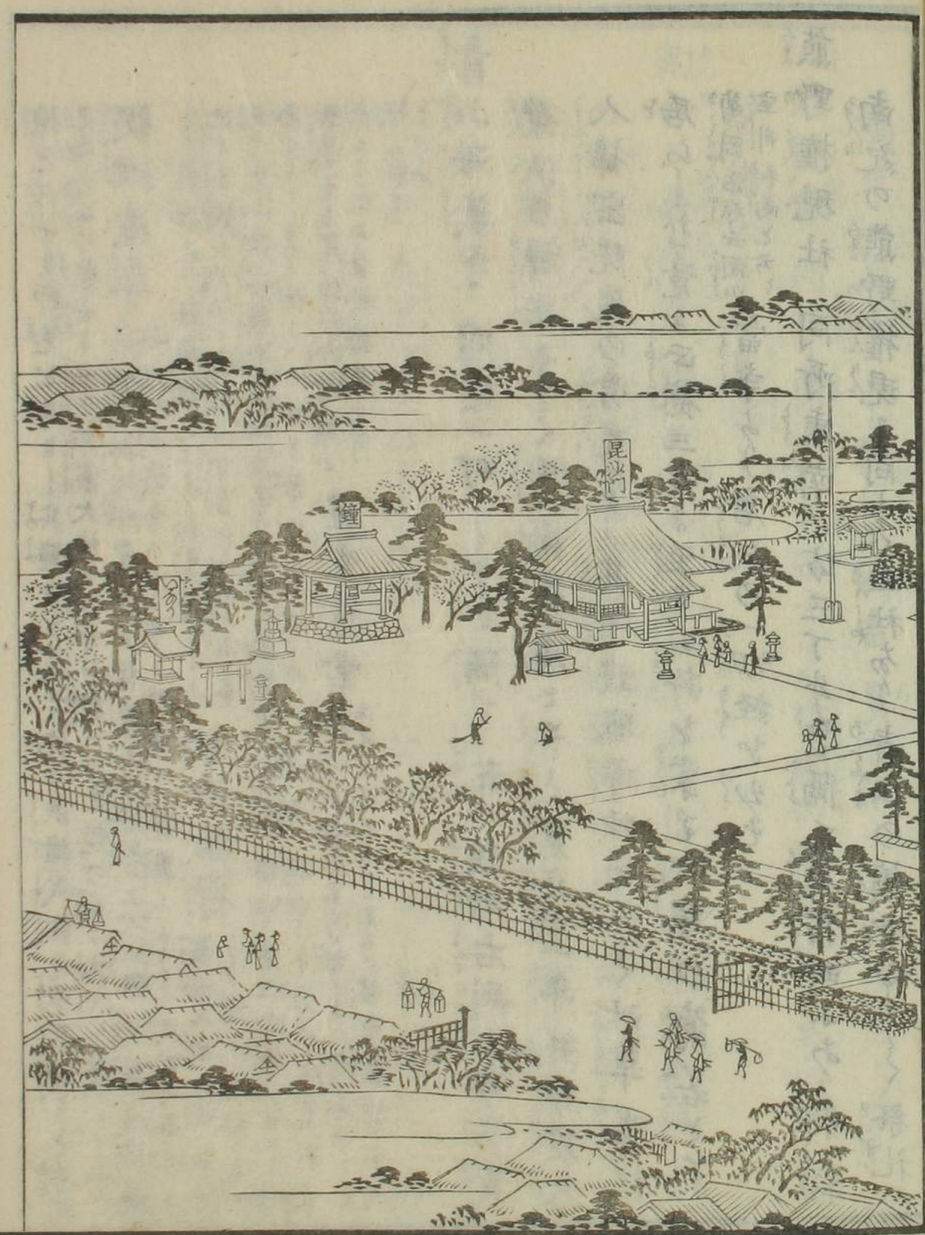
百螺山鳳閣密寺真言教院　當寺ハ醍醐の院室にして戒定慧院と
號し諸國咒驗末寺の總綱なり本坊ハ和州吉野郡鳥栖山よ在て
開基根本理源大師諱を聖寶僧正と號も光仁天皇乃皇子
葛聲王の令子なり弘法大師の肉弟真雅僧正ゆ投して剃度し
螢雪の功年を積南都の諸名公に叅して法相三論華嚴唯識を
學ひ慧業日々ゆ進ゆ給ひしかハ萬乘の聖主一時の公卿尊師
の德を仰慕しまつり淺うして時ゆ宇多天皇寛平元年己酉
尊師年五十八大和國金峯山よ毒龍栖とあり霖雨洪水五穀
登らず山中修歴の徒もこれをうれに廢絶をこに於て天皇宸襟
を惱し給ひ師に詔を下して毒龍を降伏せしむ師勅を奉り

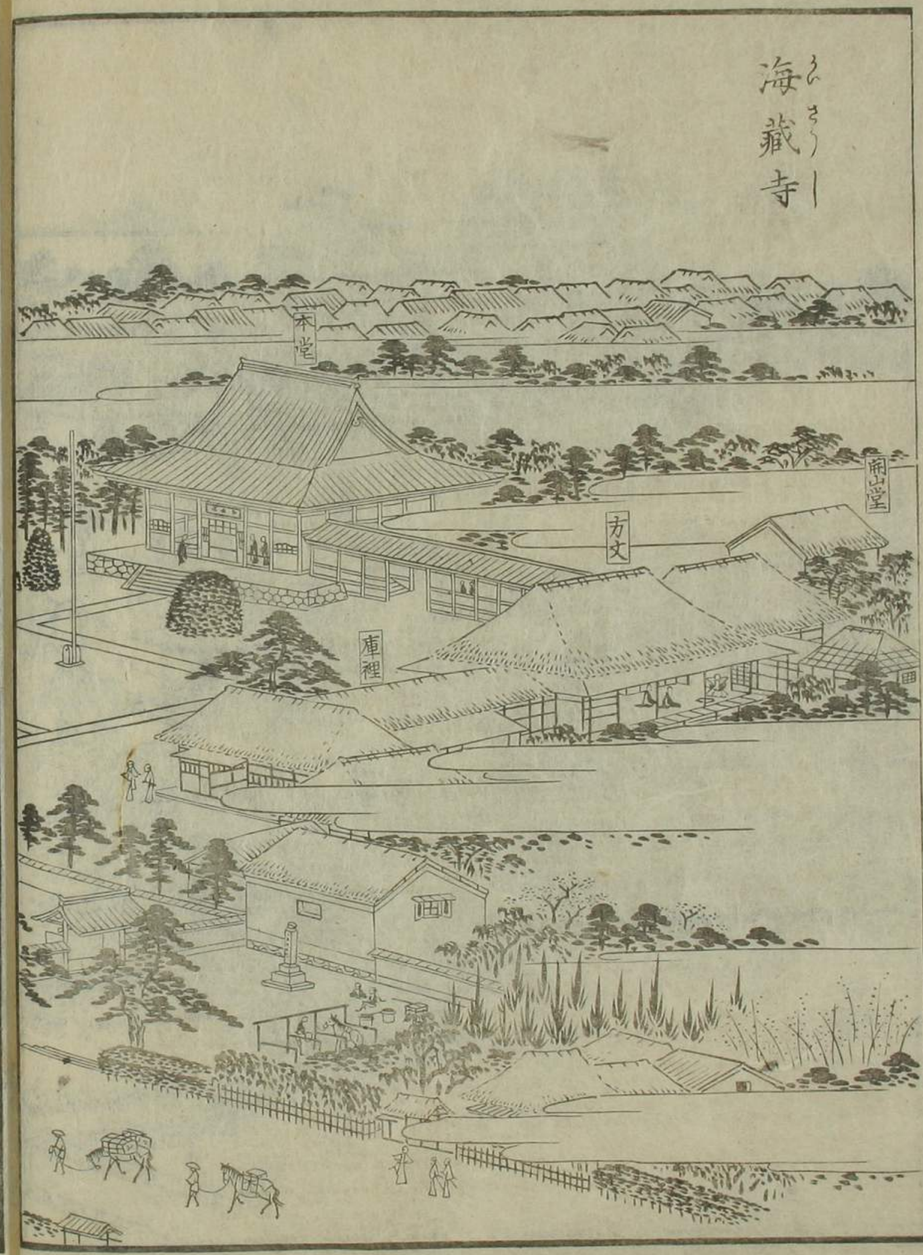
金峯に分入て法威を震ふて龍を伏し抖擻修行の道を再興し
次て奏聞を經て吉野郡に一寺を創建し給ふ鳳閣寺是なり即
尊師の上足貞崇僧正をもて第一世とし昌泰三年始て此處に
於て峯受灌頂の密法を興行し給ふ爾来七百餘年を經て元禄
年中中興俊尊僧都寺號を東都に移して一派總綱の役寺
たり　神祖御由緒の地遠州白山二諦坊康松院を兼領して
天下泰平國家利民の御祈願所とし毎年の四月八日七月十九日
ふハ順逆二峰の神事柴燈護摩の儀式なり此日諸人群参して
當寺本尊不動明王ハ霊驗の尊像にして里人出世不動尊と
称して常ふ詣人なり脇壇にハ神變菩薩理源大師の像と
安置せ寺内に三峯權現稲荷の小祠あり境内に櫻樹有暮春
の頃清賞なり此樹ハ當寺の一代俊賢僧都葛城山より種を
取しめて元と昌平坂の舊地に殖て高間櫻と名つけらる名木
なりしゆ寛政年中聖堂御造営の節替地を賜ひ當寺伐
今の處に移されし刻舊樹ハ枯て僅ふ蘖生乃若木を存し
高間櫻の名を遺せり當寺の西隣ハ即梅窓院なり

長青山梅窓院　寶樹寺と号せ青山久保町道より左側ゆあり
浄土宗ゆゑく京師知恩院ふ属せ　當寺ハ青山家累世本願の阿弥陀
如来の像ハ聖德太子の作なり當寺ハ寛永年間戴蓮社頂誉
冠中南龍和尚開基し観智國師を請しく開山祖なせ　國師ハ豫山
中興開山
惣門の額長青山の三大字ハ黄檗悦山の筆なり
泰平観世音　自然銅(此文三寸三厘の千手大悲の霊像なり)天竺佛と称しく
聖武帝より献り南都大佛殿の傍ゆあり(不空三蔵傳持し鑑真大師天平十五年来朝の項齎来し)
像を奉持しく陣中守護とせ　凱陣の時奥州伊達郡ゆ安置あり故あり
青山家ゆ伝り後又當寺ふ寄ふ　常ゆ紫銅の釋迦左右ハ
霊驗いちしるしく絶ず云　羅漢堂　中央ハ紫銅の釋迦左右ハ十六阿羅漢(二十五
菩薩なるの像を安置せ　鯨鐘　樓ふ掲る宝永七年十一月當寺第八世法蓮社壽
誉鐘的上人の時旧鐘を鑄改んとせしゆ域夜龍女
夢中ふ告て云く我今鯨身を解脱せんとす願ハくハ
是を加へしくひく世ふ佛果を得せしめ給へとなり夢覚て後枕上ふ一面の

泰平観音堂




昆沙門

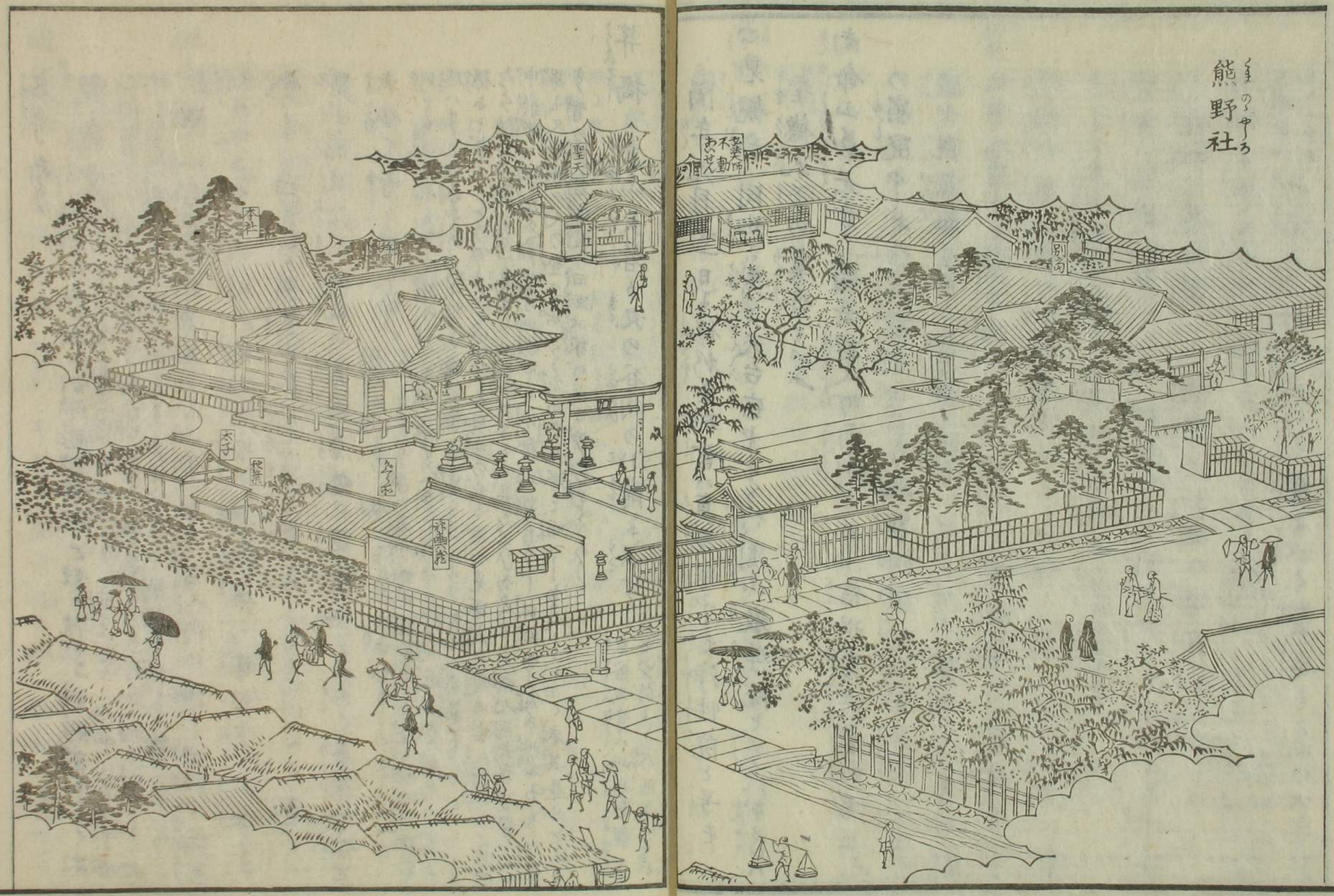

えさう
海藏寺
本堂
南山堂
方丈
庫裡

鏡を存せり師是を奇とし其鐘をも加へく終に洪鐘成就せ依其澄として愛ふ
又えしかの龍女は宝光祐龍大姉と法号を授へらるゝ鏡の面に其号を鐫まし
楔地蔵尊　慈覚大師の作なりと云ふ当寺九世順誉上人北徳彩徳の海濵
湊村の法傳寺にいませし頃夢中霊應によりて同国の海岸に
して感得あり海岸楔あり本る得てし百済稲荷　享保の始和州百済
始め其楔と思ひしは則此かまるあり名とも
記しく此梅窓着含は鎮座あり永く衆生を拾櫻　当寺第二世峰誉上人門
度せんとなり依て一社に奉すと云ふ
親裁らるとして今堂前に前やく苗木を植るひ
存せる所の垂枝櫻是なり　虚空蔵堂　卯塔の奥にあり本るは座像やく
作られし　丈尺二尺ありとあり当寺順誉上人

青山海蔵寺　同所一町ばかりを隔て乾の横町右側にあり黄
檗派の禅宗やく始は海蔵庵と号く寛文十一年井伊侯夫
人掃雲院殿の営建なり其頃銕眼禅師をしく此草庵に
居らむ竟に正徳三年に至て公許を蒙て一宇の蘭若とす
菊岡沾涼云開山室州和尚と云く　当寺より唐板の一切経を出す

熊野権現社　同所東南の方三丁斗を隔て原宿町にあり祭る所
南紀の熊野権現に同しく三社あり青山の鎮守やく祭礼は
隔年九月廿一日に修行も別当は真言宗にて浄性院と号す
心見観音　同北に隣る天台宗やく竹園山教学院と号し本るは
聖徳太子の真作とい

南命山善光寺　同所百人町右側にあり信州善光寺本願上人
の宿院やく浄土宗尼寺なり本尊阿弥陀如来は丈長一尺五寸
脇士観音勢至の二菩薩は共に一尺なり　稱徳天皇の景雲
元年八月十五夜法如尼和州当麻の紫雲庵にて念佛涌持の
頃信州善光寺の如来来現あるを拜しまつり直に一刀三礼
やく其此形を摸さる是則当寺の本尊なり
当寺は永禄元年戊午の創建なりく始は谷中にありしを中興
光蓮社心誉知善上人明観大和尚の時宝永二年
台命に依て此地へ迁されるとあり　今谷中に善光寺坂と号るは其旧地なるうかゝふして其旧跡は今の玉林寺の地なりと云
什宝に中将姫自の毛髪を以て製造せる所の六字孔


熊野社
聖天
本社
大子
不動尊
不動
あいぜん
別当

名号あり

観音堂　本堂の左に並ぶ堂内観音百躰を安置す聖観音ゆゑに其丈二尺ばかりあり恵心僧都の作なり當寺むかし谷中にありし頃火災ゆゑ一時自ら火中を道れ出たりしを故に字しるく火除とも又は火災の時榎に飛うつりしゆゑ榎観世音とも稱するとなり

斧候塚　一名を去我苦塚ともいふとあり百人町の通る田村下総矣邸の中にあり相傳ふ渋谷の金王磨斧候の塚なりと此塚に登りて四方を顧望すれば二三里の間は手にとるが如くして遠く富士筑波信甲相武の青嶽房總の翠壺画くがごとく憂悲苦悩を去依て号とすとなり　或人云此塚の下に府中むさしの国の府中野火留のあり近一向の原野なり大原とも旅人の道より迷はざるん為に所々に塚を築き置く其上より望めば道筋こゝかしこに見るなり秋の果もかの月の入べき山の稜ふ所々に塚あり古へ府中の北に冨士見塚或は佛の供八国山ありとかたるひ四五間所に存せり此塚申樂塚の誤なるべし昔此所に申樂與次郎といふ人ありしが旧跡なり又或人云去我苦塚と云ハ塚も又見物の人の登る居る所なり物見塚と唱へしと云く未其是非を考ず背の絶倉海道の旧跡此塚の下に例多くあり

笄橋　青山長者が丸の谷間の小溝に架せり　里俗云昔ハ此川を龍川と云ひしが大河なりと云

菊岡沾凉云往古六孫王経基卿刀の笄を此地の鎮守に与へらるとなり故に笄橋と号るとなり

或鵜が谷に作る鉤匙とす　故に笄橋とのひ又ハ経基橋とも号るとなり笄ハ和名抄加美左之と訓せり髪掻とかくべし其余髪掻に因むの諸説ハ繁きをいとひて

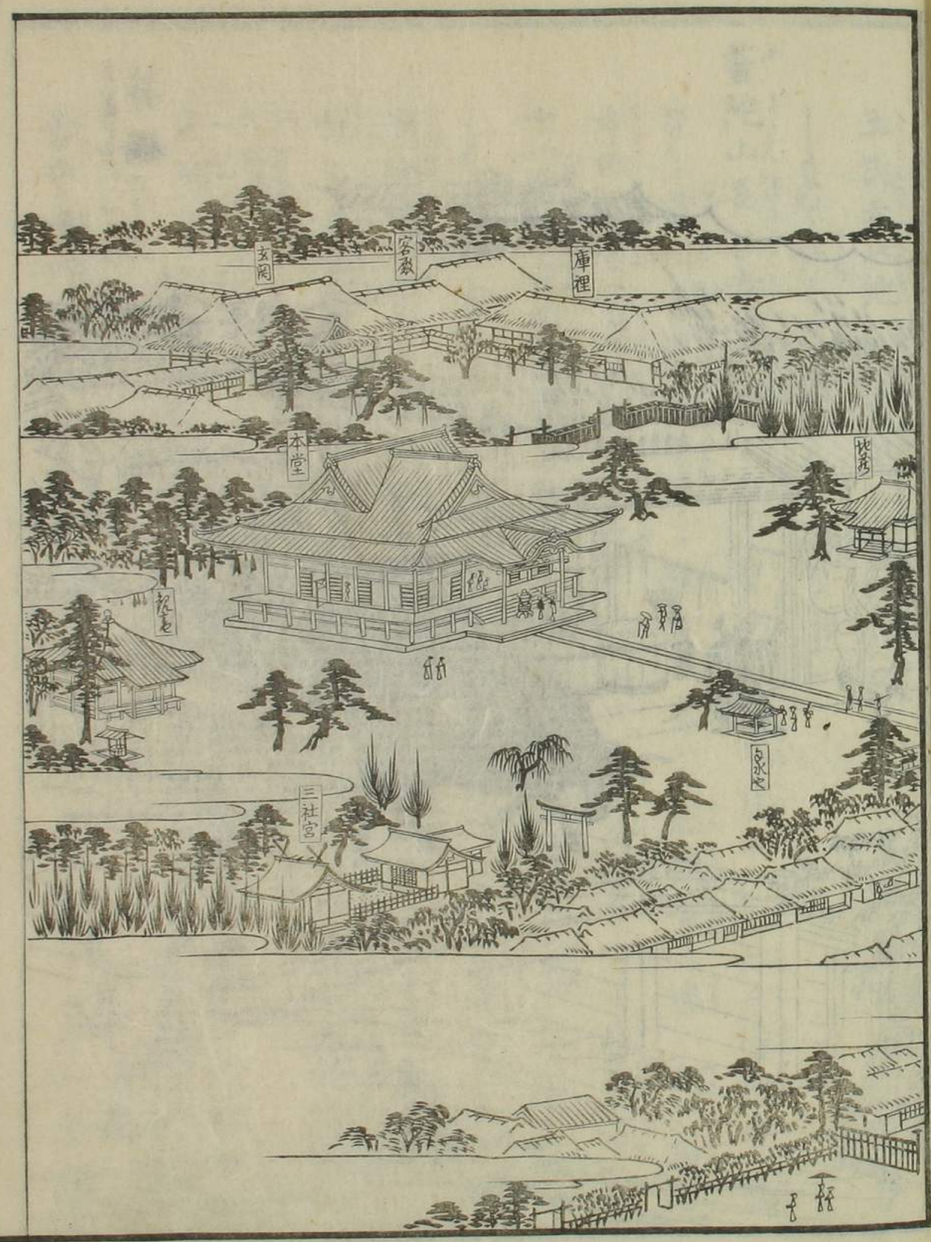
按ずに笄橋ハ國府が谷橋なるべし世に長孫年間の江戸の旧図と称するものに青山の辺に國府方と云る地名あり永孫二年北条家の所領役帳にも森弥三郎とかゝる人の江戸の所領の内に國府方と称せり是を合せ考るに此不審昔國府方と唱へしなるべし其谷合に架せし橋なれば國府が谷橋と唱へしなるべし

渋谷長者墳墓　同所松前家の弟宅の地にあり小高き塚なり

頂に松樹繁茂を相傳ふ應安の頃迄此地に冨農ありしが是を渋谷長者と称せしとなり　今同所百人町の南を長者が丸と唱へるも其宅地の旧跡なれば長者が子孫近き頃まで幽なる百姓なり

按ずに江戸砂子に渋谷百姓町岡部家の別荘の地ハ冨民慶福と云ひ者の宅地なりとあり又青山恩田の松平藝州侯の別荘に稲荷の叢祠あり其傍に古き石の燈籠あり其傍石に康暦二年十月日領主四郎太夫と刻ハ四郎太夫慶福と称せしゆゑなれと其姓氏を渋谷長者建立のものとも考ずるも考へず江戸砂子ゆゑ渋谷長者の名ハ宗順といひしなるとあり

通明観　渋谷岡部家別荘の号なり風景他に越四時共に美観なり


玄関
客殿
庫裡
本堂
鐘楼
祝屋
三社宮
客殿

あをやま
青山
せんくわうじ
善光寺
寮教堂
三王門

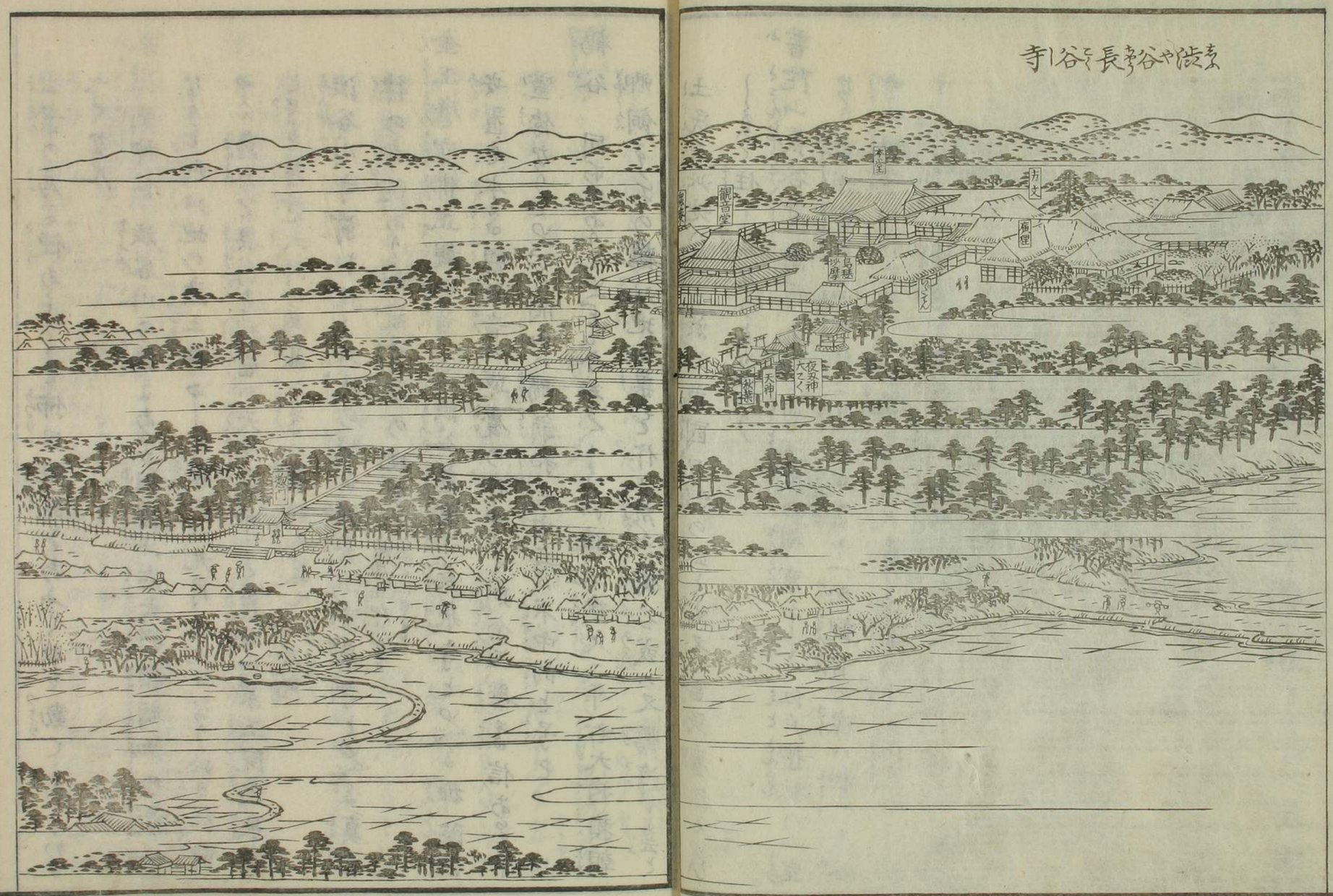
笄橋

土民云此地ハ往古渋谷重國旧舘の跡とも又ハ冨民慶福とい
しもの住し跡なりともいふ

普陀山長谷寺　同所よりあり曹洞派の禪窟ゆゑ江戸檀林の一室
なり野州冨田の大中寺より属せ本尊十一面観音の像ハ和州長谷
寺の観音の模形ゆゑ立像二丈六尺あり陸首の中ゆ法丈四寸ハ
十一面観音の霊像を安置せ則和州長谷寺の本尊と同木の樟ゆ
して同作ありといふ開山ハ門庵宗開和尚なり當寺昔ハ赤坂
溜池の上ゆありしを龍雲院といひしを天正十二年甲申此地へ
移し寺号をも改むるといふ

寺号とハ山口家の香花院　堂の右ハ山口氏の家の記録よりあるとそれと
古佛倉　地の住人鶴見内蔵助秀治とい人當寺へ納ゆ霊佛霊神の像を安置ゆ庫中に充満せり此
一躰ありと云世ゆ渋谷長者　或人云當寺昔ハ山口氏重政の開基ゆ
といふそ題なりしを　青山のやきの中ゆ建立し母堂龍雲院の
當寺境内ハ古杉老松翁鬱とし常ゆ寂々寥々としれハ座禪

東渋谷谷長谷寺



公案の為よ便あ〜〜も佛目祖風をあふくゆを勤てよろ〜かる
へくなん

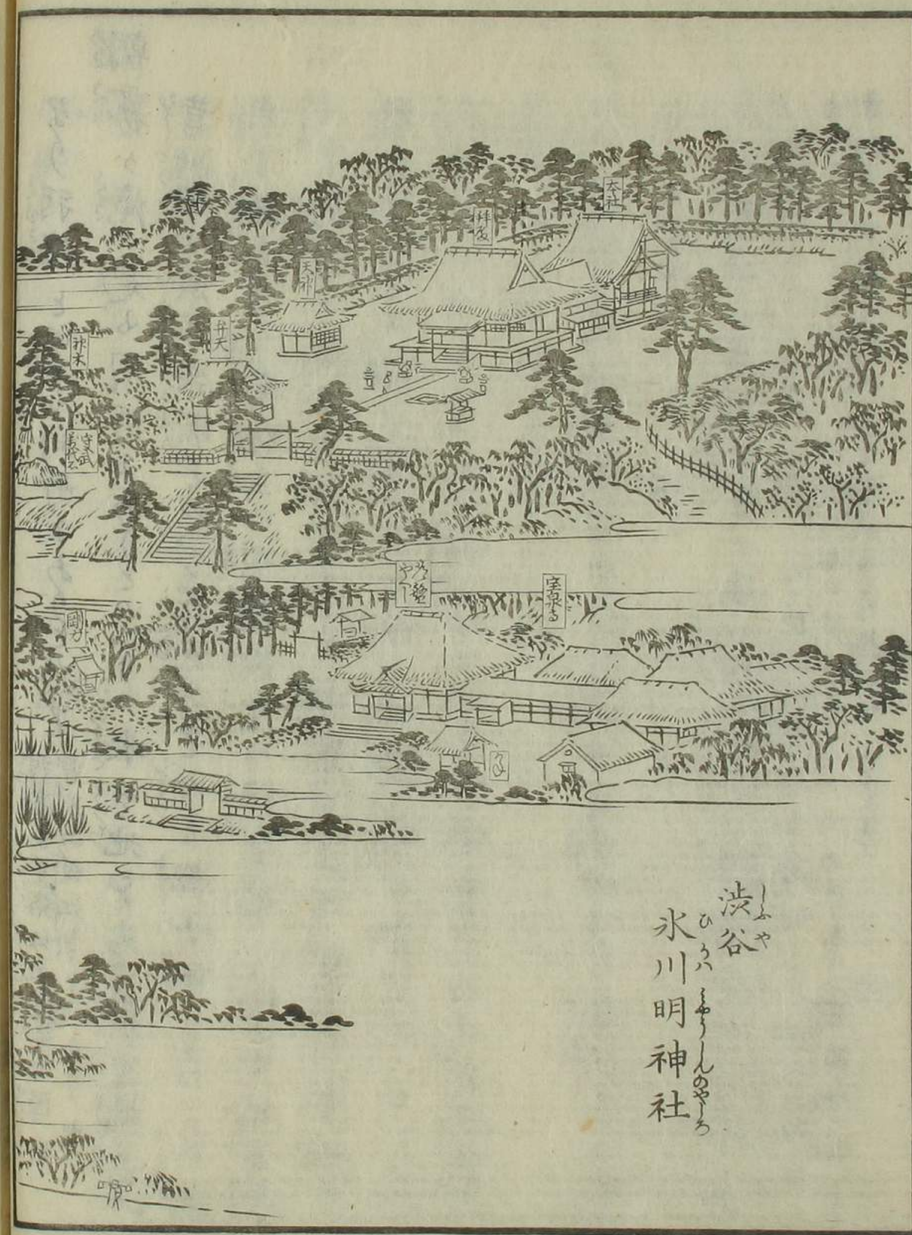
氷川明神社　渋谷川の端よあるを相傳ふ右大将頼朝卿の勧請
なりと則此地の産土神ゆ〜く祭礼ハ九月廿九日なり此日社前
ゆく角力を奥羽も別當ハ天台宗ゆ〜く恵日山菜王院宝泉寺
と号も慈覚大師の開基ヤ来るハ薬師ゆ来し作者詳
渋谷川寺前を流る此北の端よ源秀山室泉寺とゆる真言
律の寺院あり閑寂玄隠の地なり近頃法如比丘も住せる

金王麿守佛正観世音　上渋谷慈雲山長泉寺とゆる禅院に
安置も本る観世音ハ運慶の作ゆ〜く則金王麿る信あるし
霊像なりとゆる開山ハ瑞翁和尚中興ハ不中的と号も
鶴谷　同所ふあるとゆるも今もく〜る傳云建久二年右大将頼朝
卿飼るふの鶴此地よ巣を作るふ鶴谷或ハ又鶴澤とも云と

なり羽澤とゆるも同所よあるとゆる羽澤ハ花谷坂心寺流の禅宗普光山吸江寺と云あり也
朝霧ゥ滝　是も同所よあるとゆるも未も地を考る里後よゆ
昔此地よ渋谷宗順とゆる富民あるを女を撫子姫とゆる容貌
衆ゆ勝たり一年弥生の頃圓證寺の櫻を看んとく父母其
女を誘引く彼寺よ往くふ朝霧とゆる可髪あり姫を
意慕〜竟よ思を遂さるを恨を此滝の下よ身を沈うとゆる
其傍よ小さき岡あり願山とゆる其塚ありと云又東の傍よ
圓證寺の旧跡もあり

渋谷八幡宮　同所中渋谷ゆあり此所の産土神とも祭礼も八月
十五日なり

本社祭神　應神天皇一座社記ふ云此神像ハ上古弘法大師豊前國宇佐八幡宮の告あるふより渋谷次郎高重護持〜〜当社の神躰と
山城國鞍馬寺ふ安置〜〜を本地佛阿弥陀如来の像ハ慈覚大師の作あり圓證阿闍梨
東福寺創建の時彼脚の僧来りく授ふ〜〜とゆる



渋谷
氷川明神社

矢拾観世音　社前にあり慈覚大師の作ゆゑに金王磨る信の霊像なりと云ふ保元年間の戰ひに此かの敵の弓矢を多く拾ひあつめ味方の陣中へ入れしより名付まつると云ふ

子安薬師如来　同所にあり龍宮出現の生生の時も守護ゆゑに佛躰に念珠をとけるを世俗是を安産守護の念珠と唱へ大に崇信せり

金王櫻　一名憂忘櫻とも号たり谷の館に植られしを金王丸に給ふの後此地に移し氏神八幡宮の瑞籬にうゑしとかや或社記に云文治五年七月頼朝公奥州泰衡退治凱陣の項當社に詣ひ太刀一振を收めあひ又金王丸の影堂に立寄り其誠忠を感し鎌倉亀ヶ谷より櫻一株を載せ金王櫻と号られるともあり又一本とつる冊子に紀州亞相頼宜卿の御女堂養珠院殿此櫻の実を此地に植させられ中生立く花も開んとせし頃八幡の社内にありし元木の櫻既に枯しかは家臣岩谷善入と云人に金王丸の遠裔なる八他の人の植しんより八祖先への孝養ゆゑなりし件の実生の櫻を善入に下しゆゑ今の櫻是なりと云ふ

鎮座の松　境内水社の前左の方に茶しく是を拝受して其枯株の跡へ植迷々今の櫻是なりと云ふ

大永四年五月十三日北条氏綱と上杉朝興高揃の原に合戦の時氏綱の後陣大道寺八郎左衛門小杉と云ふ所に陣を張りそ渋谷へ攻入放火して其の餘煙當社に霧ふ此時神躰松樹の上に迯りしかの故に此名あり今八僅に古松五六株社地の辺に存せり

什寶　月輪御簾一流　社記に云ふ後一条帝の長元元年五月平忠常北總に兵乱を起し近國を掠む源頼信朝臣忠常追討の祈願として扶桑の峯に八流の旗を收め其内日月の二流八武基に給ふ大宮の見山に收め八幡宮とあるは其後河崎土佐守基家に白簾一流給ふ独り仙北金澤城を攻落せる依て義家朝臣基家を召れ此軍勝利ありしを金王丸八幡の加護なりとて月の御簾を示し寛治六年正月義家朝臣凱陣の時谷盛庄へ立寄らせ給ひ月の御簾を八當社に置て諸人に拝せしめ掛ける時に能證阿闍梨深く社檀に納め置く

獅子丸太刀　河崎土佐守仙北金澤の義家朝臣より給ふ重家公陣中奉持の霊佛なり後年基家に項勅賞とし金王丸長田の館野間の内海に遣ひ振ふ此薙刀の威德

毒蛇長刀　金王丸長田の館野間の内海に遣ひ振ふ此薙刀の威德

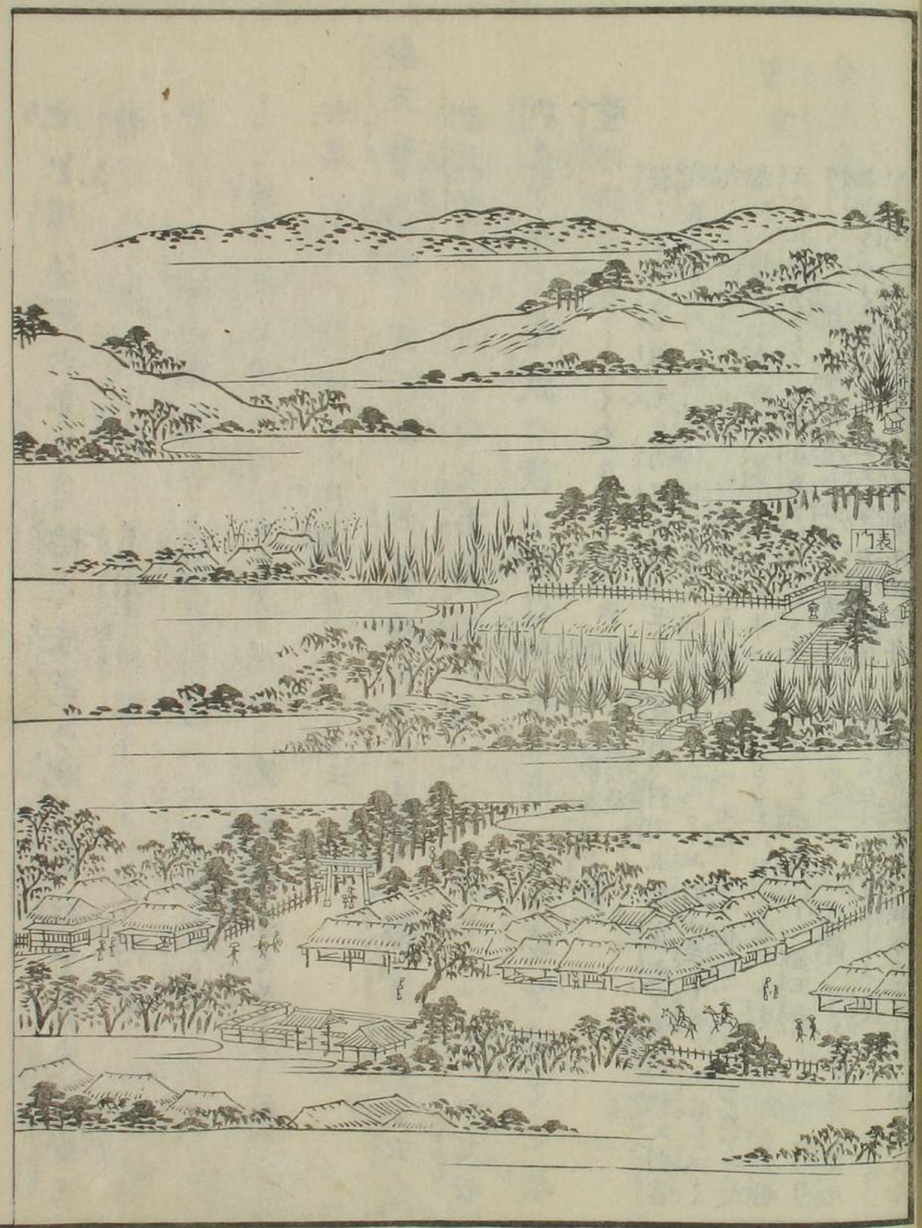
六孫王経基髪掻　経基より推守興世に給ふを義家朝臣當社へ納められしより笄掻是なり

社記曰當社八高望王より五代の後裔村岡五郎良文の曾孫秩父別當武基の一子ゆ同十郎武綱と云る英雄あり寛治三年六月清原武衡同家衡の猛威を摧き奥羽の間に勢を揮ひ名誉を天下に輝うぬ故に将軍義家朝臣是を感し勅賞とし其子六郎基家給ふ

谷盛一ゆ矢盛に作る此庄七郎赤坂代木麻布飯倉一ツ木今井等是なりと云

河崎土佐守と云ふ武蔵國谷盛荘を云田社記に云ふ

渋谷依基家勝



金王八幡社

地を擇ひ同六年正月始く采邑の地ゟ當社を營建し金王磨迄代〻氏神と称しまる重嚴なりしを別當ハ天台宗ゆゑ渋谷山東福寺と号し相傳ゟ六孫王経基の開創にして昔ハ親王院と呼しなり開山ハ圓鎮僧正と号す養和元年百十一歳ゆゑ化寂ありしと云云

金王磨影堂　同所向ゟ側叢林の中ゟあるを八幡宮社記ゟ云く

金王磨十七歳の時主君義朝の命により鎌倉ゟ赴く項其母別るを惜み悲歎の涙ゟ沈む依金王磨自ら姿を造りて母堂の許ゟ残しとめるると云云

按ゟ金王磨祖先ハ高望王より五代の後裔村岡五郎良文ゟ曾孫秩父別當武基の子同十郎武綱其子を六郎基家と云ふ時ゟ至て始て渋谷を以て氏とす同く一子重家河崎平三太夫後従五位下ゟ任し土佐守と云嗣あり当社ハ幡宮ゟ祈請し永治元年一子を儲ル八月十五日ゟ生る金剛夜叉明王の化身なり霊ゟ上下の文字を借用ひく金王磨とハ名付ル保元物語を以て考ふ金王磨ハ庄司重國の子なりと云ふ時代違へり似くり童わらべ度さるを一説ゟ金王磨ハ左馬頭源義朝ゟ仕へ頗る大功の者なり義朝平治元年ゟ大内言茂系信頼ふてしくむほんを

金王磨影堂

金王磨産湯水

起し待賢門の軍に打負尾張國野間の内海に逃れ家人長田庄司忠宗の
もとに落伸まひしを長田心ならずして浴室に義朝を討る金王磨うち
をしまひ走り出むかふ者共をきりあせ手後都に登り義朝の妾常盤う
ばひ其あり所をとらへ後義朝の跡をとむらひまゐらせんとの心ざし
諸國を修行し平終に重家寛治六年渋谷の姓をあらためとり金王丸より渋谷と唱ふれ縁起ふか
重家の子重國其子高重其子金王丸とあれども違へる系図をもつて重家の
祈願に投ぜられ金王丸より高重八金王丸より後ゆゑ文治年中頼朝時代の人
と違ふ

金王磨産湯水　同所一町ばかり西の方堀の内といふあり

誕生池とも号く八幡宮の社記に一度此霊泉に觸る者は
数千歳を保つと云伝へとあり此辺もとく渋谷氏居館の地
ゆゑ土人城跡と称せ馬場の形築地の跡あり古井
とかしこふあり

東鑑　治承四年庚子八月二十六日入夜定綱盛綱
高綱等出筥根深山之庵行逢醍醐禪師全成相伴
之到于重國渋谷之館重國作喜悦世上之聽招于
同　書庫倉之内密々羞膳勸下畧
高重　養和元年八月二十七日渋谷庄司重國次男
竭無貳忠節之上依令感心操之隠便給知行

渋谷下郷所済乃貢等所被免除也云云

河崎庄司次郎高重宅舊趾　同堀の内にあり土俗傳へ云此重國は違論のゆへあるく六郷の河崎へ引移もて其頃此地にあもしー山王の社をも彼地へ引うつしく其旧地に稲荷の叢祠を残し留めうつる

姉尾平次左衛門光景旧館地　是も同所にあり今も光景の馬を冷たりとゆうる小池あり旱魃ゆも涸うすあく霖雨にも溢うすうなしー常に岩間をとりめぐく清冷うつる傍に駒繋榎と称せるあり光景の愛せし安達栗毛とゆひし駿足を繋きうく水を飼ひしうつるあり

甘露水　同所にある里俗傳へ云天慶年間六孫王経基朝臣此地に旅宿ありし頃此水を掬くに味美ゆしく甘露のあくありと褒詞あもしより名とせりとそ

王池　同所にあり里人云く天文の頃天下大に旱魃し河水は流を絶し池沼は平地に異なる時此水涌出せるゆ常に倍せり此里に住る一女子水を掬んとして水器の中に鞠の如き一顆の宝珠を得うる玉精其女子に託しく云く是は吉れ八幡宮の神器なり大永の兵火をさけく此井中にあり直に神祠に収むへしとありし依里民大に恐れ謹く是を神祠に収むるとそ此宝珠今渋谷八幡宮に収むると云　此故に玉の井とも唱へうるしとゆる

神仙水　八幡の西にある相傳へ往古空鉢仙人此谷に入く不老長生の仙丹を煉うしー霊泉なり故に神仙谷とも云とゆうる鉢山とゆひも法道仙人の鉢此所に自ら飛来る故に号とも

富士見坂　渋谷宮益町より西へ向ひく下る坂を云鉢に芙蓉の峯に對ふ名とも相模街道の立場ゆしく茶店酒亭

ふじ坂
久ヶ原坂
本橋

富士見坂一名松本

あり麓の小川に架せる橋を冨士見橋と名つけ〻る　相州街道の中坂の数四十八あり〻とあり此冨士見坂ハ其首あり〻とあり

道玄坂　冨士見坂の下耕地を隔て向ふの方西へ登る坂を〻る此坂を登り〻く三丁程行ハ岐路あり直路ハ大山道ゆ〻く三間茶屋より登戸の渡まで二子の渡へ通す右へ行ハ駒場野の御用多摩の前通り北澤淡島へ〻く

世田ヶ谷へ行道あり　道玄或ハ里諺ふ云　道元ふ作

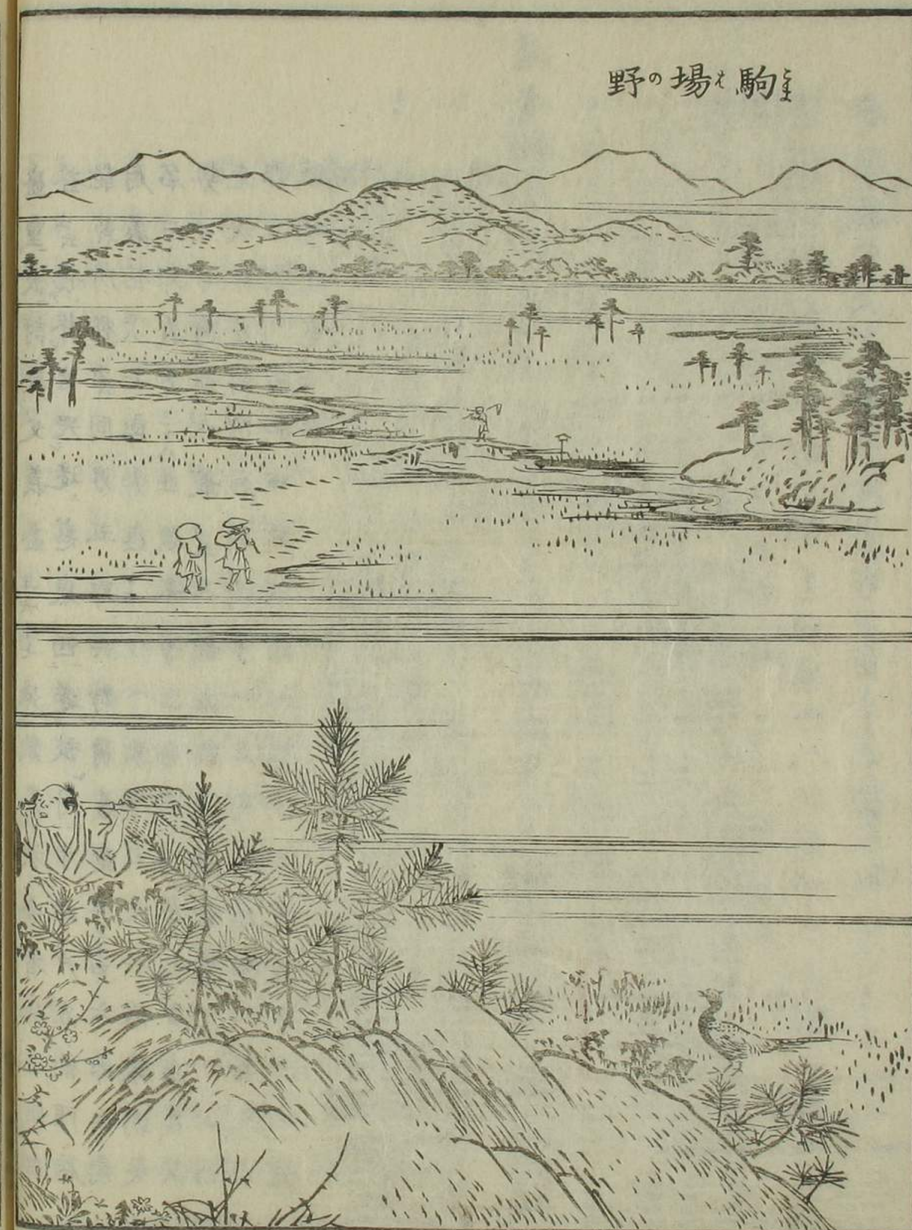
義盛ら一族なり建暦三年五月和田の一族滅亡に其残黨此所の窟中ふ隠れ住て山賊を業とせ故ふ道玄坂と〻り

東鑑廿一云　建暦三年癸酉五月二日壬寅和田左衛門尉義盛率伴黨忽襲将軍幕下謂仆與力衆右衛門尉常盛同子息新兵衛尉朝者嫡男和田新左衛門尉義盛入道三男朝夷名三郎義秀四男和田四郎左衛門尉義直五男同五郎兵衛尉義重六男同六郎兵衛尉義信七男同七郎秀盛此外土屋大学助義清古郡左衛門尉保忠渋谷次郎高重横山権守時重中山四郎重政同太郎行重土肥先次郎左衛門尉惟平岡崎義実田与二義忠子捉原六郎朝景同次郎景衛同左衛門尉実忠三郎景盛同七郎景氏大庭小次郎景兼深澤二郎景家大方五郎政直同太郎遠政塩屋三郎惟守以下中略和田四郎左衛門尉義直卒世七為伊具馬太郎盛重被討取父義盛年六十七殊勲息義盛云云揚聲悲哭迷惑東西遂被討于江戸左衛門尉能範所從云云同男五郎兵衛尉義信廿八七郎秀盛十五以下張本七人共伏誅朝夷名三郎義秀三十八並數率等出海濱掉船走安房國其勢五百騎船六艘云云又新左衛門尉常盛四十二山内先次郎左衛門尉横山馬允古郡左衛門尉和田新兵衛入道以上大将軍六人道戰場逐電云云

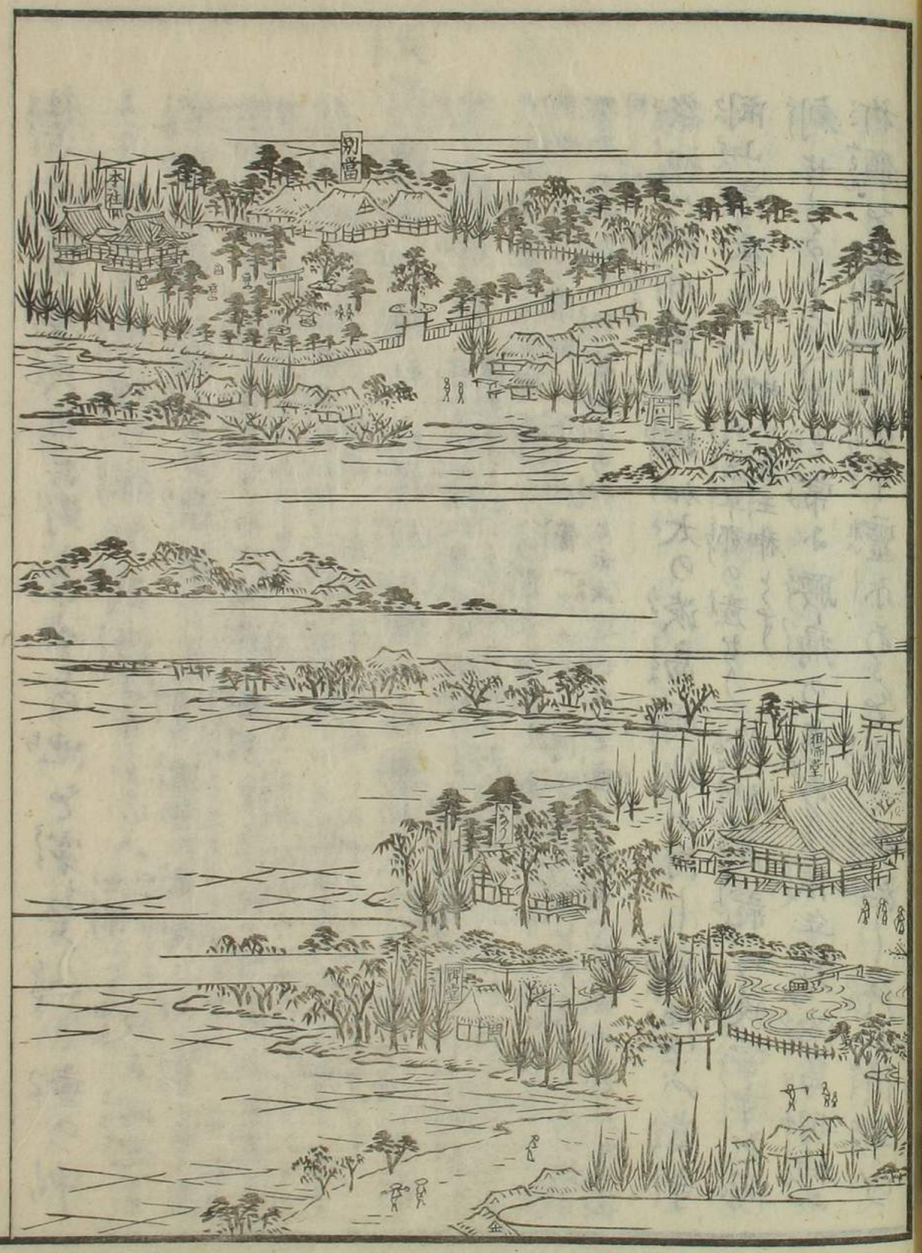
按ふ大和田ハ大多和ら〻ら三浦一族の中ふ大多和と号る〻あり東鑑了治承四年八月廿二日三浦次郎義澄同十郎義連大多和三郎義久子息義成和田太郎義盛同次郎義茂中略三浦を出く糸向を〻あり或人云道玄も沙門ゆ〻く此地ふ昔一宇の寺院あり〻く道玄寺と称し〻り故ふ坂の名ふ来まるとも〻ひ〻く一なり〻

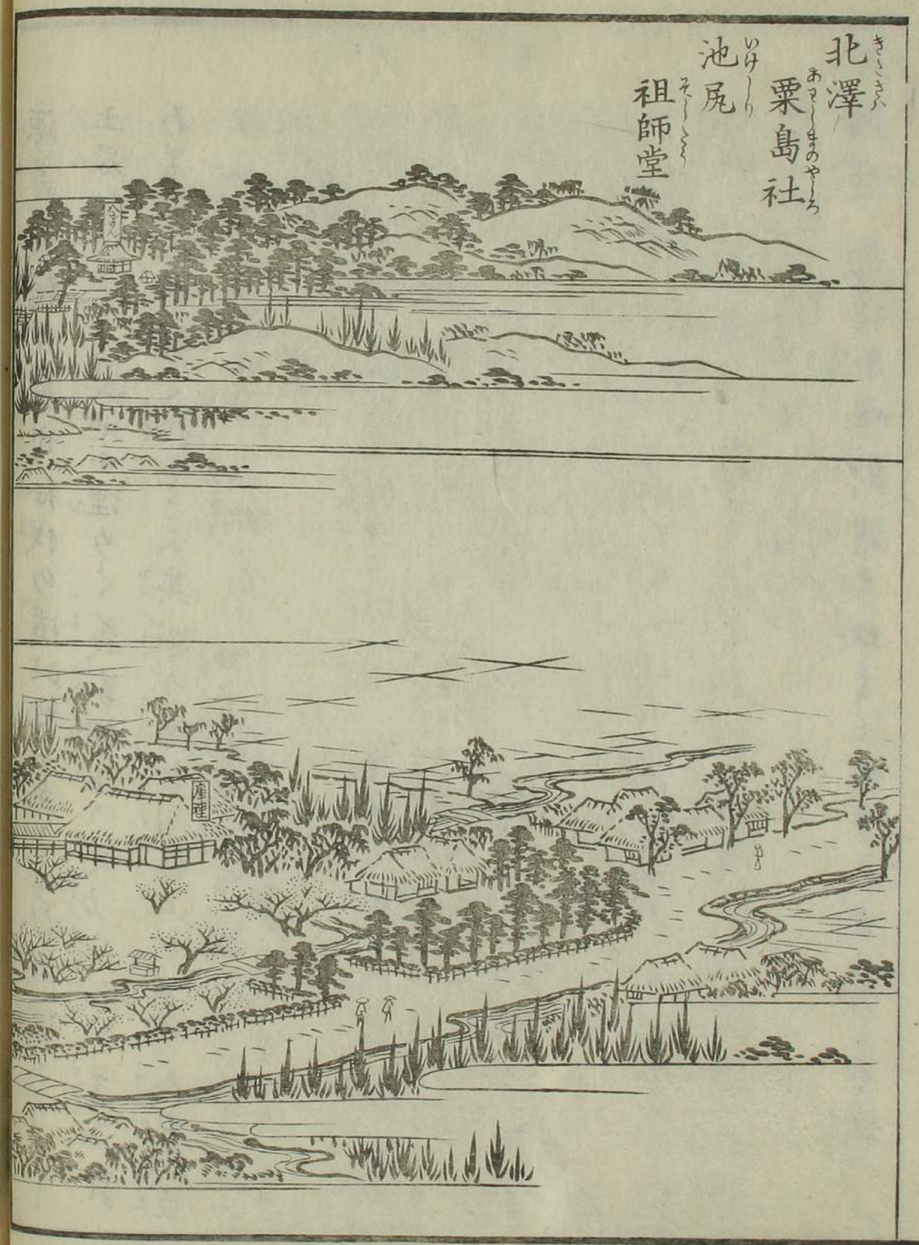
道玄物見松　道玄坂を登る〻く七町あり〻り西の方同し街道大坂と云より此方右側ふあり〻ゲ明和の頃枯〻り〻ハ伐〻る

木の圍五〻〻程あり〻根より三丈ら〻〻上あり〻く東西へ廿間ら〻〻南北へ十六七間ら〻〻程あり〻〻ら〻〻ら〻〻枝なり〻〻ら〻〻蒼くたり〻〻ゆ〻〻今駒場坂の下用水堀の傍ふ一株の古松あり〻下ゆ〻〻道玄松と称し〻れども一本松と称し〻くこの松と別し〻限り〻〻〻〻〻〻〻〻炎暑の頃ハ行人この里諺云道玄此松樹ふ登る往来の人を見下し小賊ら命し〻く衣服物の具を奪ひ採し〻め〻り〻〻〻〻


駒場の野

駒場野　道玄坂より乾の方十四五町斗を隔て代々木野より
續て廣原ゆへく上目黒村に属す雲雀鶉野雉兎
類多く御遊猟の地なり　此地の官林は享保の初御狩場と定られ
北条家の臣加藤丹後守と云る人の後裔ゆへく小田原落去の後此地に蟄居し給ふ農民
なりと云伝へ又此地の里正加藤氏某も小田原
以て蟄居し給ふ農民となりて丹後守は武州多摩郡箱根崎
対死せ〻く其一族の墳墓箱根崎圓福寺とゆふに存せりと
蛇池　官林の中にあり享保三年此地に御遊猟の地に定られし翌年
夏風雨暴しく此池中より柄うし蛇こを立去りとゆふ所に此名あり
鐘鋳塚　駒場野の中にあり云方九尺斗高サ七八尺斗なりとそ
ゆへく梵鐘を鋳る日跡なりと云伝へれとも何とこの寺の
冨士見坂の下の水流下渋谷の水掛口の地の名に道場の淵と云あり
此近辺に盛大の寺院ありしなるへし
去我苦塚　別所墓と云地ゆへ塚の高サ一丈あまりひり相伝ふ
昔渋谷長者某此辺の人民を語らひ時とゝく此塚の邊に
ゆへく酒宴を催し歓楽せしふより苦を去の所謂なりと云
此辺ゆへく古居舘佛堂の類あり地ゆへ近頃道路を作らんとゝく畑を堀
穿ちて土中布目の紋理ある古瓦数枚を得たりとゆふ
土器塚　駒場野の内なる里諺に云往古此地奥州街道なりしあるを
源義家朝臣奥州征伐の頃此地に至るゆひ酒宴ありし
土器を後土人多此地に埋めゆへく義家朝臣の武功英名をそゝゆ
あるゆへ土器塚と称せと云其塚の側を同塁山と唱ふ義家朝臣
供奉の輩の居たりし旧跡なりゆへ　按に此地に芦毛塚と称せるものあり疑ふ
往古は馬なるを埋めゆへ塚なるへし　らくも土器塚も駒塚を誤るものあ〻
足毛塚　宿山と小地名に称する地の里正金子氏構の内にあり頼朝卿
乗せる所の芦毛馬の斃るを埋蔵せし旧跡と云
氷川明神祠　駒場野官林より此方の岡にあり祭神素盞嗚
命一座天正年間甲州郡内上の原と云る地にあり〻を加藤
氏加藤氏の先は駒場野の条下に此地に移る住る頃産土神なるゆへこに
此神を勧請なしたるとゆふ祭礼は毎歳九月廿九日に執行
せり此神の氏子は古へより疫災の患なきとゆふ伝へ
天満宮　同所駒場野道玄坂より一町半斗東の方にあり相伝ふ


本社
別當
祖師堂


北澤
粟島社
池尻
祖師堂
庫理

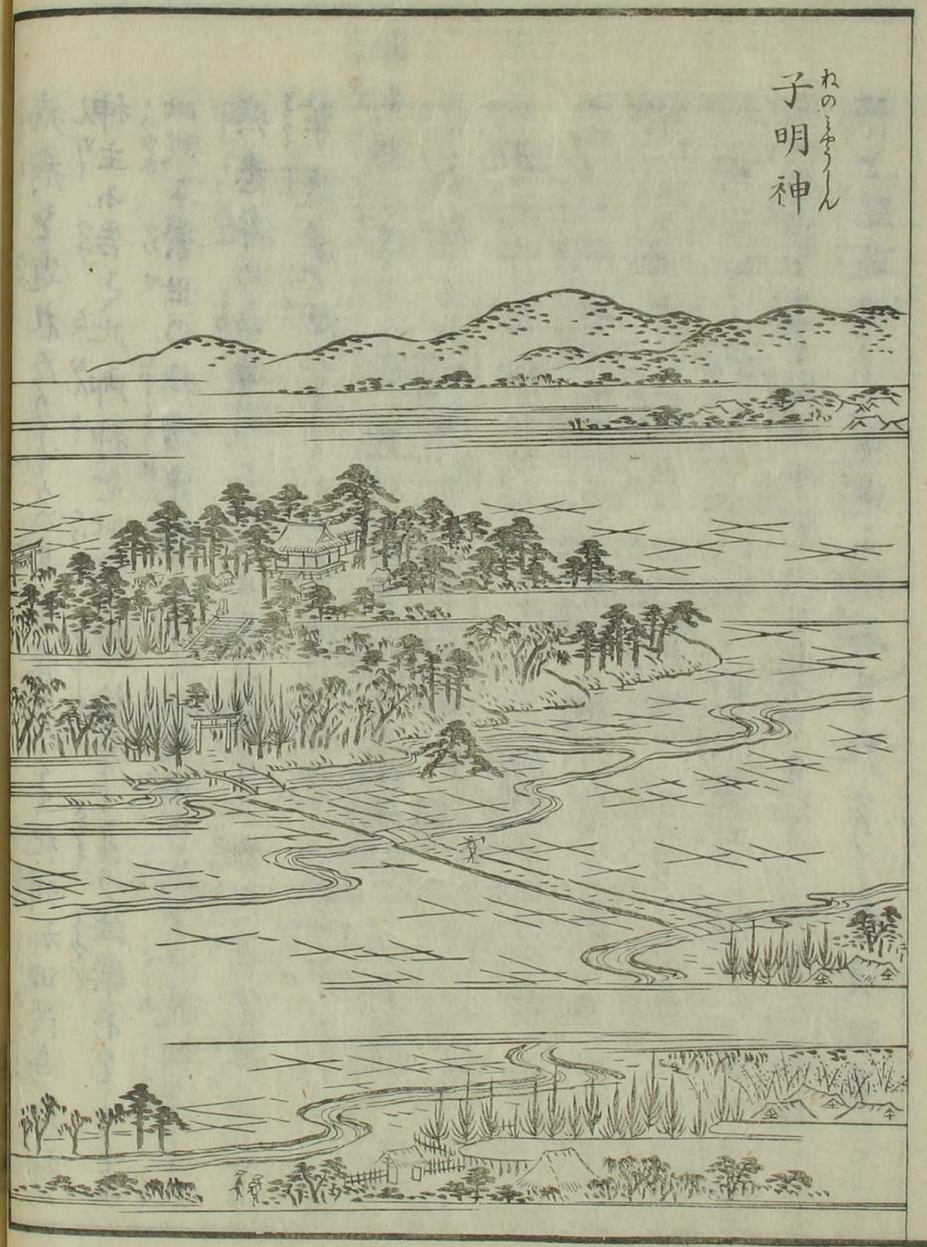
往古此地の農民市兵衛とゝの地を穿ちく小き壷の中
より印子の菅神の像を感得せりとゝ四五分坐像一寸故に此地に
宮居を営く鎮守に崇むると云 昔の菅神の像ハ賊の為に奪もとゝ今一尺もゝ小石を以て造れる
菅神の像を宮中に安置せ往古神躰を堀穿ちく地ハ封して松を栽く
験とす其松ハ宮居より半丁斗西の方ゝく今中川矣の山中にの中に入と云
石劔同し社地稲荷の小祠に祭む長二尺二寸斗圍本ゝく八九寸廻りなるとゝ
往古菅神の霊像を感得せ同し土中より出るとゝ

北澤淡島明神社 北澤村八幡山森巖寺とゝる浄土宗の寺
院に勧請す 当寺ハ此地八幡宮の別当なり又森巖寺ハ越州黄門秀康卿の法号を採く寺の号と
開創し惠心僧都の作の座像一尺五寸の阿弥陀仏を本尊とゝ股士観音
云清誉上人其所萬世上人の遺命を奉し慶長十二年丁未四月当寺を
男至の両像ハ行基大士の作と云此辺西瓜を産す上品とす世田ケ谷大丸の辺
同し西と称せり

祭神ハ紀州名草郡加太の淡島明神に同し相傳に当寺
開山清誉上人 紀州名草郡の産なり故に産土神とす 修行成就の後当寺を開
創せりとゝく常に腰痛の患あり依年月淡島明神に
祈願を篭まり夢中霊示あるを以て灸治し終に積年の

病病を遁れたりしハ其報賽とゝく紀州加田淡島明神の
神主に告く此御神を此地に勧請なり法樂あるとゝ云
此故に累世の住僧連綿とゝく此灸治の法を口授相傳し衆
病悉除の為毎月三八の日是を施せり依灸治を求むる
輩遠きを厭はゝして此地に至る者以ゝて祭礼ハ三月十九日と云

除劔難日蓮大士堂 同所八町斗南の方池尻村二子街道の右側
常光院とゝ日蓮宗の寺に安置せ 此寺ハ日義上人の開基にして往古ハ碑文谷法華寺の南坊なりと云
日蓮大士の木像ハ丈二寸二歩あるとゝ相傳に文永八年辛未九月
十二日相州龍口に於く大士殊に伏せんとせれ時刀尋段く
壊の奇瑞あるを以て北條時頼の赦免あり誅を遁るく
同國依智に移る本間六郎左衛門重連ゝく家に入に重連
大士の化を感ゝく大士手刻の自像をあゝんとを乞依自ら
像を彫造ありく重連に附属せれしを後故あるく



子明神

當寺ハ安置せるとの〻を霊験昭く〻るゆへ故ふ指人常ハ絶す

正一位子明神社　二子街道下馬牽澤邑道より左の方耕田を

開て丘の上ハあり別當ハ天台宗宿山村壽福寺より兼帶ス

馬牽澤舊跡　同所子明神の前今田畑とあれる地の旧名なりや

〻を今ハ上目黒世田ヶ谷へ跨る都て上中下と三ハ分れたる

邑名とあるゆへ里諺ハ云文治年間頼朝卿奥州征伐の時渋谷

八幡宮へ奉籠あり其時荏原野より東條芦毛の馬を撰

んで献せ〻れんとす　此地を牽れ〻ふ頭〻ふり是を

止られ〻ふ武云頼朝卿狩の時この所中く来の馬頭ハ驚き

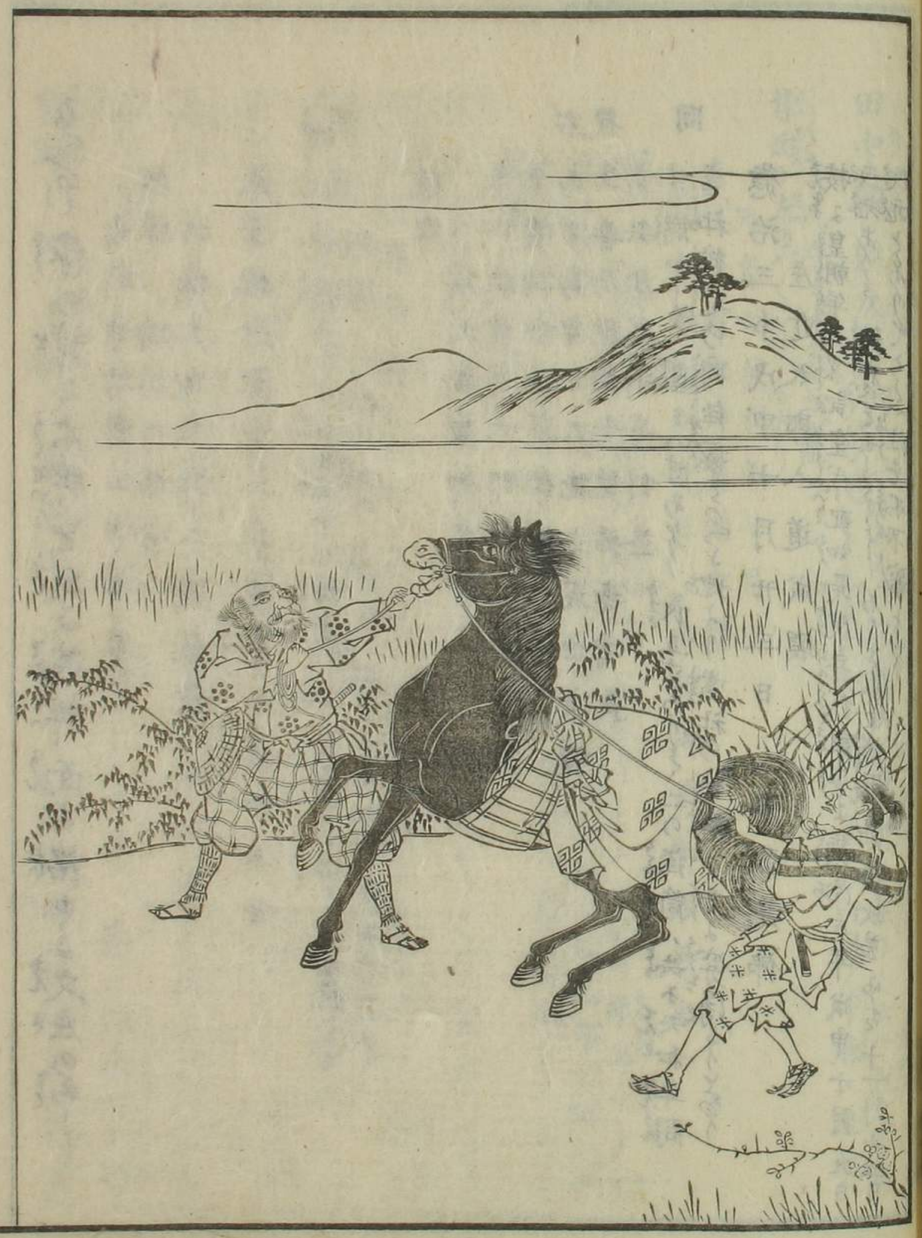
譯て澤ハ流へ死せり故ふ塚を築籠うとも八足毛塚の条

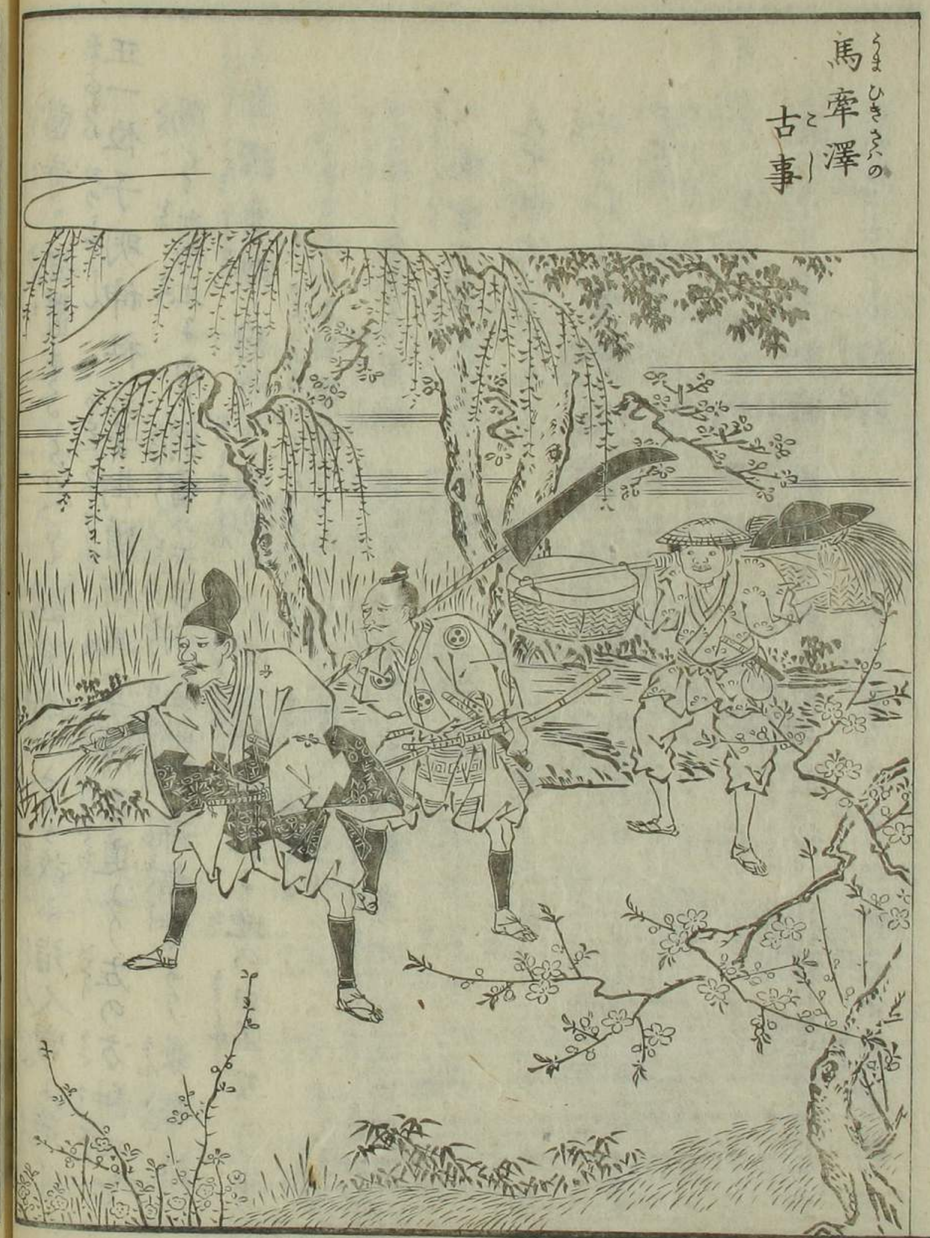
下を聚ー合せ〻ふ又云頼朝卿の馬を蓄ふ芦毛ハ今ハ此地ハ芦毛

若宮八幡宮　上馬牽澤村二子街道より右の方三丁ハ入る小き

森の中ハあり駒留八幡宮と称も北條相模守時頼朝臣崇そるの

霊像ハ〻く神躰ハ一寸五分ハあり〻く左の れるふ弓を持ー




馬牽澤と古事

像の背に木牌を建る其牌面に銘する文左の如し

最明寺時頼公守本尊
駒留八幡宮
経塚
北條左近太郎入道成願

奉安鎮所德治三戊申年十月廿三日

経筒 紫銅にて合せ目をハ鉄にて留る あとおくれとも
朽損して鉄の跡のみ存せり 圍に五寸六分長五寸あり

右 奉如法書寫六部妙法蓮華経
奉讀誦妙法蓮華経一千部
志者爲身心大施主現世安穩
後生善所親類安穩福壽增長
南無法界平等利益

同 紫銅にて圍八寸あり 長五寸あり 二の経筒ハ共に天和年間
當社修造の時経塚より地より當社の神躰と共に穿得たりとあり

敬白
八幡大菩薩御寶前

德治三年戊申十月廿三日 沙弥見佛

左近太郎入道成願

按に皇朝年代畧記皇代記如是院年代記等に德治三年戊申十月九日改元あり延慶と改元とあり注を不審とす

田中辨財天祠 同社地にあり 常盤御前此地に崇ると云一説に常盤御前没せるの後弁天に崇むるとあり 神躰ハ座像にして一尺五寸ばかり 背面に左の如く記してあり

天文四壬未年七月
香林院殿海岸寶樹大姉
田中辨天之施主 常盤御前御法号也

按に上馬牽澤村の澤村若林村に香林寺と云洞家の禪刹あり其寺に常盤御前の靈牌墳墓あり過去帳に香林寺殿海岸宝樹大姉天文四年未七月七日とあり香林寺ハ即常盤御前の剏創なりとも常盤御前と称するハ吉良家の令室なり

社記云當社八幡宮ハ何れの時世の創建なるやを詳ならず
社廟傾廃神躰も又あるべし然ふ天和二年此地孔領主
大久保矣藤原忠誠當社を修造せんとして其頃経塚と云
地を穿ち土中一の壺を得たり又其壺中小銅器あり 前に挙
德治三年戊申北条左近太夫入道成願沙弥見佛等の名を
銘し内に今存する所の神躰を篭る又其一筒ハ法華経六部を
書寫し又一千部を讀誦する由銘せり依忠誠當社孔修造

経営落成の日新に法華経六部を書写して銅壺に収め社の
礎下に埋蔵し駿州建穂寺の僧隆範をして迂宮の式を
執行せしむるとの
八幡山宗圓禪寺　同所二子街道の左品川上水の端にあり當寺ハ
若宮八幡の別當寺なり洞家の禪院なり江戸駒込の大圓
寺に属せ本尊座像の釋迦如来を安置せり當寺ハ北条
左近太郎入道成願の開創なり存應抹可和尚中興なり北条
左近太郎入道成願霊牌
文保元丁巳年十月廿三日寂
當寺開基　心覺宗圓菴主
北條家孫左近太郎入道成願
長立山常光寺　弦巻村世田谷上宿の南にあり日蓮宗身延の
末なり天正十三年乙酉八月草創せ開基ハ越後人泉蔵院
日禮と号日禮泉雲の頃此地青山氏の家に仕る此人嗣なき

愁ふ日禮妙経祕呪の奇特をあらゝ一子を生せしむ故ふ
此人宗教を学ぶ日禮より帰依し更ふ精舎を創立し日禮を
開山祖とし弟子の礼を儀く（青山氏後日林と号せ当寺の第二世）
本尊釋迦如来額ハ如松の二字やゝ廣澤の筆なり石水
盤ハ喜多見家寄附なり又浅野内匠頭長矩の寄附の
三方あり　黒漆を以て塗松より崔の描畫あり此器ハ馬牽澤大教寺よあり
常盤橋　二子街道中馬牽澤村世田ケ谷入口三軒茶屋の往還
角のわかり向へ三丁斗入る小溝ふ渡せ石橋を志ろ名付く
里諺ふ云く昔吉良頼康の妾常盤といへる婦人不義のふ
あるく此所ふ害せらる然ふ其霊里人ふ祟を依其霊を弁天ふ
祭め其腹ふ出生の男子を若宮八幡と崇まるとのふ何ことを
上馬牽澤村ふあり此常盤といへる女ハ大平出羽守ふ女なる
ふ世田ケ谷私記ふ

（按ふ此是を常盤の墓と云上ふ不動の石像あり又同し南の方ふも塚あり是かりとをへとのもと実なるへん）

大溪山豪徳禪寺　常盤橋より五丁斗西の方ふあり曹洞派の禪
刹やゝ江戸高輪の泉岳寺ふ属す当寺ハ文明年間吉良家
創建の精舎やゝ旧ハ弘徳庵と号其頃ハ浴家やゝ馬堂昌誉
禪師開山祖（其後門庵宗関禪師今の曹洞派ふあり）中興の開基ハ井伊掃部頭
直孝夫同中興開山ハ天極秀道和尚なり

佛殿　本尊釋迦弥勒弥陀等の三世佛の木像を安置す
額（佛殿の二重家根の軒ふ掲る月舟の筆あり）

選佛場（佛殿の右ふ並ふ當寺十勝の一なり額ハ二重家根の軒ふ掲る當寺十五世霊潭の筆なり）

選佛場

弐丈佛

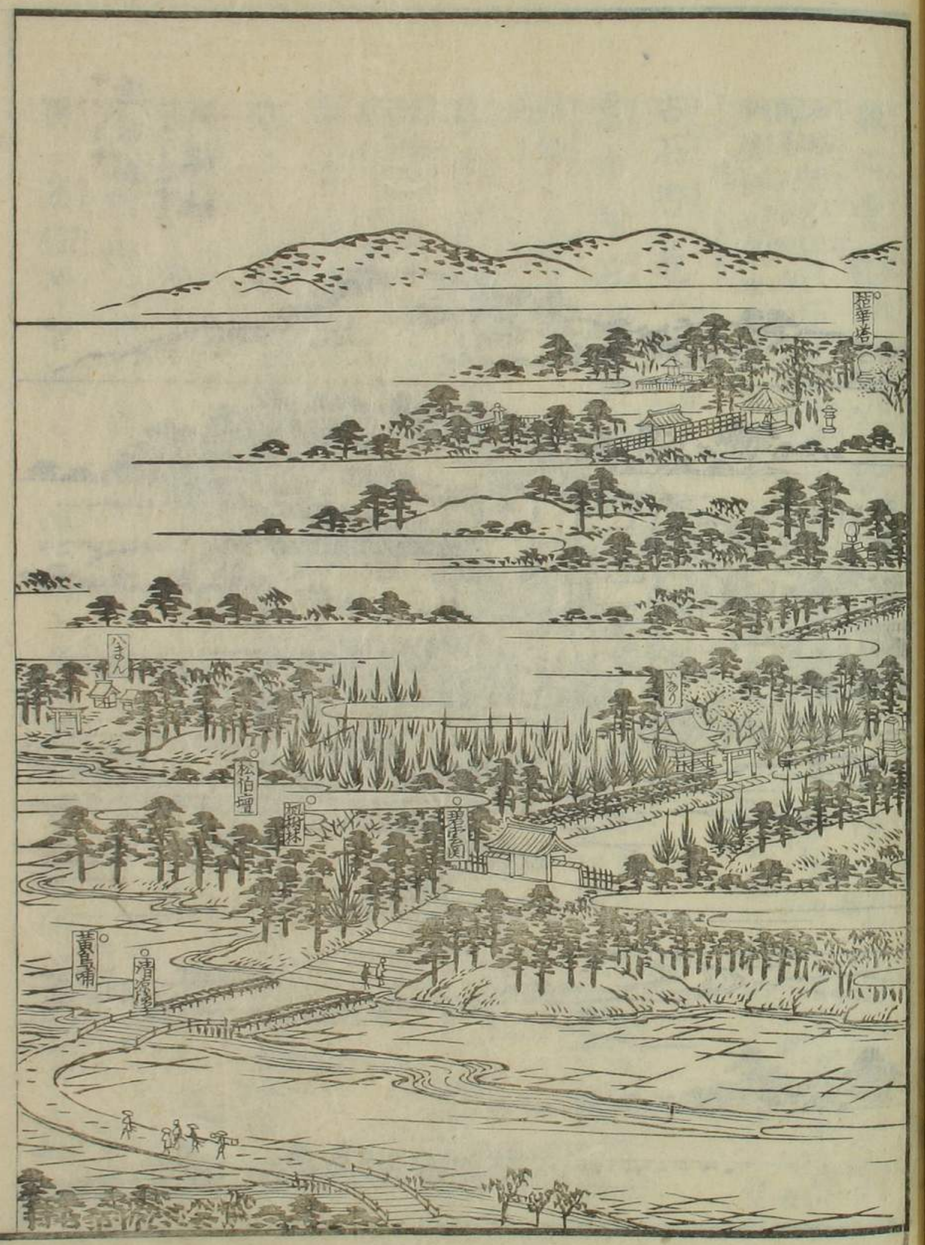
石燈籠（佛殿前左右ふ立つ延宝五年井伊家掃雲院殿の寄附なり）

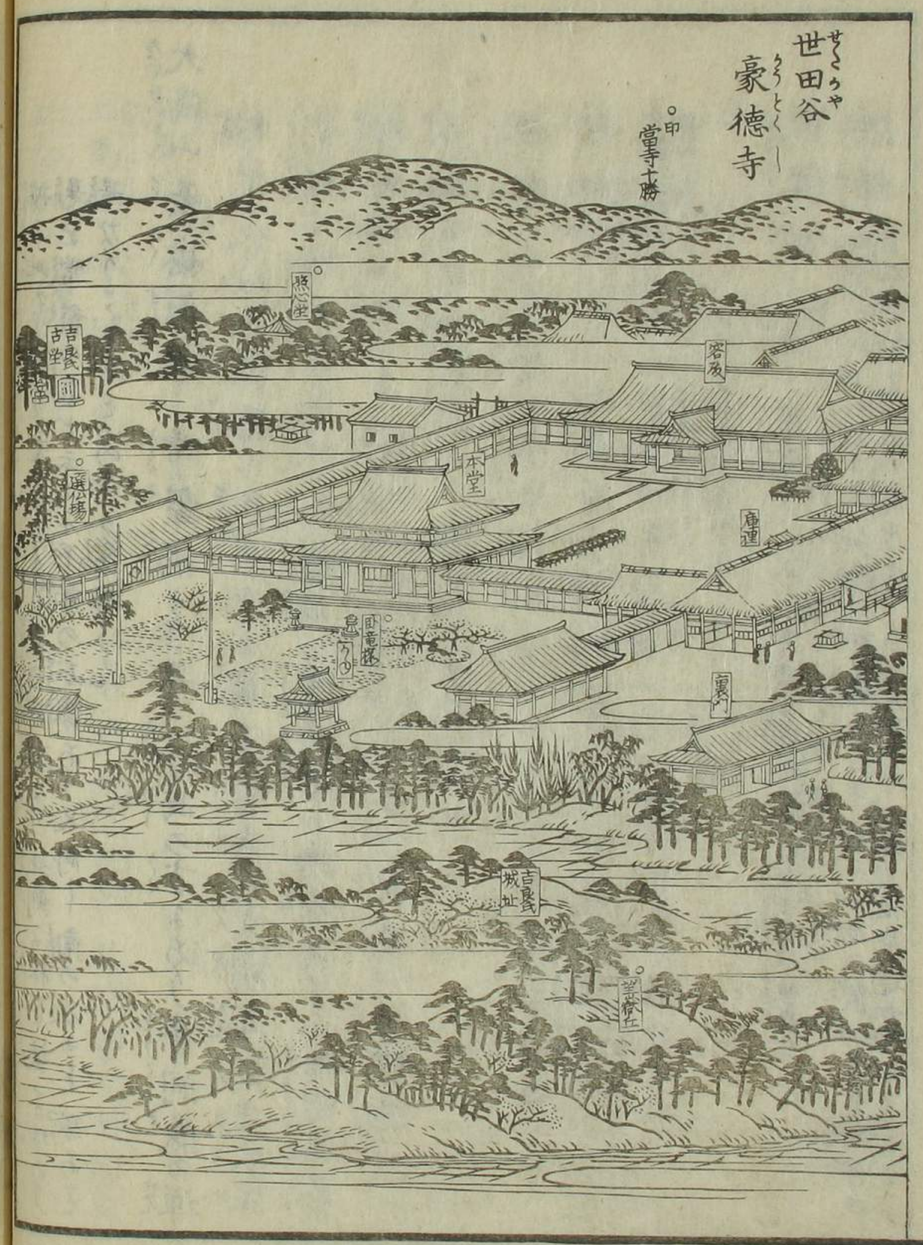
臥龍櫻（佛殿の前右の方ふあり當寺十勝の一ふして往古吉良政忠園中ふあり）

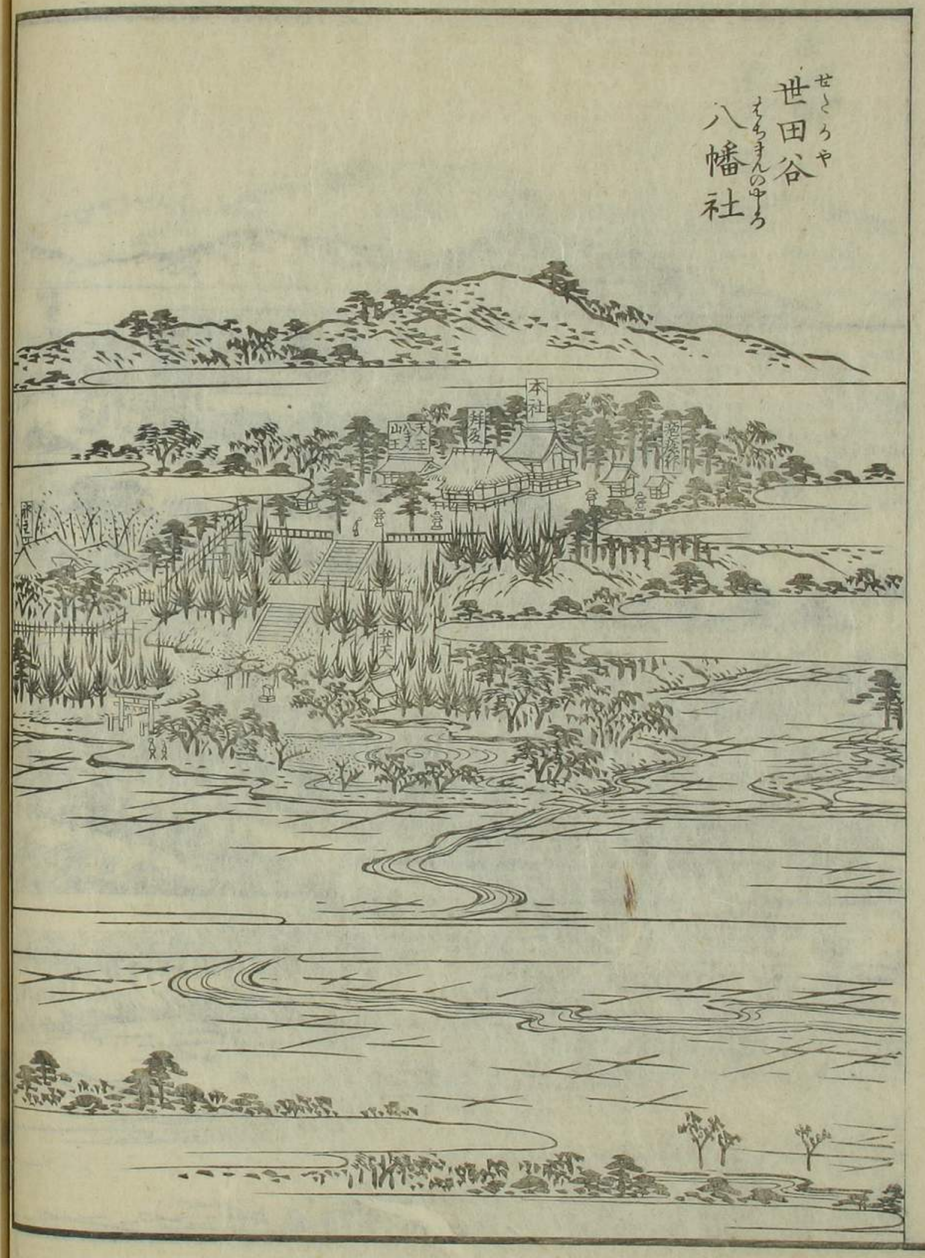
洪鐘（佛殿の前左の方ふあり其老樹ふして白花なり）

単瓣白花なり

自枝掛橋ふ云ふ曰鐘の銘ハ寛文十二年鐵牛和尚の製文ふして和尚北
存ふ和のものハ延宝七年中興天極秀道和尚銘ふあり


碧華堂
八幡
松伯壇
阿闍梨
黄鳥浦


世田谷
豪徳寺
印
當寺十勝
悠心堂
吉良
古堂
客殿
本堂
廣小路
東通
臥龍松
島つり
裏門
吉良
城址
碧華堂



世田谷八幡社

聚心堂客殿の左林叢の中にあり　吉良氏古塋聚心堂の前卵塔の中大なる松樹の下にあり古き五輪の石塔並に立碑一ハ世田谷郷所吉良右京大夫政忠朝臣の墓なり當寺過去帳に前の開基同春院殿聚岳道旭居士文亀二年壬戌六月十七日卒とあり又一ハ政忠の伯母弘德院殿久栄理椿大姉の墓なり　弘德院ハ當寺過去帳に文明十二年庚子十二月二日逝とあり

古石燈籠一基　同し墓の前にあり　政忠庭中のものありと云世に云地蔵形これなり

當寺開基碑　佛殿の西に立る寛政十一年の冬當寺十五世靈潭和尚の撰文わしく往古吉良家に因ある者力を戮せ靈潭和尚の志を補助しこれを立るとかく

碧雲関　惣門の名なりこれも當寺十勝の一左の叢林の中にあるなり其余黄鳥哺ハ同し門の楓樹林も同し奥にあるなり

晩秋の紅錦賞もく　惣門の前の小川に接する橋の名なり

清涼橋　惣門の前の小川も十勝の一なり

當寺ハ文明年間或十二年庚子開創世田谷御所吉良右京大夫政忠其先吉良治部大輔治家上野國飽間の地に基氏より伯母弘德院殿世田谷郷を賜ひ初てこゝに移住せ夫より後世田谷殿と称せり　過去帳に文明十二年庚子十二月二日とあり

久栄理椿大姉の為に創建せるなり　直に其法号を採て弘德庵と号け昌誉禪師を請して開山

祖とも（其始ハ清家の禪刹）天正年間ニ至て宗関禪師来て薫席し洞門ゐ[illegible]む万治年間江州彦根城主正四位上左中将井伊直孝侯此世田谷の地を賜ふ（或寛永十年癸酉ゐ[illegible]）万治二年己亥六月廿八日逝せ（法号久昌院殿豪徳天英大居士と号す）遺言ゐよりて令嗣直澄其遺骸を当寺ニ葬せ故ニ弘徳を豪徳ニ更む（弘豪同音）爾後直孝侯の賢娘掃雲院殿無染了心禪尼先考の冥福を吊ひむとなん許多の浄資を喜捨して堂宇を経営し三世佛の木像を安置して良田数十頃を寄らとなり

吉良氏古城跡　豪徳寺構の内右の方ニ續く地を云（今ハ井伊家の林と称ス）堤の形二重ゐ残せ空堀の跡とゑゆる所もあり其封内一町四方やゝ〳〵櫓を構へしと覚しき跡三ヶ所迫存せり又居館の跡と称せるもの築地或ハ林泉の形残せく水を湛へる地あり冨士見松とよくる老樹あり其地より斜ゐ芙蓉の峯を眺望せり

旧ハ同しゐふ所櫻と称せしものありしと後世枯ると云て今ハ此樹なし（世田谷の吉良家ハ清和天皇十世の苗裔足利左馬ノ義氏ゐ二子あり嫡男を義継と名け次男を長氏と名く長氏三州ニ居るこれを三州の吉良と称せ義継ハ奥州ニ居る故ニ奥州の吉良と称せ是則吉良姓の祖なり義継六傳を吉良治部大輔治家と号く治家始武州世田谷城ニ住す時の人世田谷御所と称せ又六傳を吉良政忠と称す法号を同春院と号し其後頼久の世ニ至て吉良家ハ三州東城西城の外称号宜く蒔田ニ改むべし台命ゐ[illegible]蒔田と号ハ則久良の郡の蒔田村ニ住せ在名をとゝ云小田原北条家関東を領せし頃ハ許多の地を領せしと其賈高ゝく今世田谷領と称せし村数五十七箇村あり其頃一圓所領ゐ[illegible]）

宮坂八幡宮　同し寺より西の方北岡續ニあり其間三町計を隔つ

鎌倉鶴岡八幡宮の摸やゝ〳〵勧請の年歴詳ならス天文十五年吉良頼貞當社を建立すと云或ハ義家朝臣勧請せしと云傳ふれとも義家勧請と云ふ疑ひなし

祭礼ハ八月十五日やゝ〳〵社司大場氏の奉祀ゝ

社内ニ存ゝる櫻ハ頼貞親植ゝると云傳ふ

（按ニ頼定ハ頼康の[illegible]押と等々力村大平某所蔵の頼康の古文書ニ印ゝる[illegible]の花押ハ同し然時ハ頼貞ハ頼康の始の名ゝ[illegible]）（当社建立の棟札ニ注ゝ[illegible]）

當社梁牌一枚

當社ノ蔵ヲ其文左のごとし

天文十五丙午八月廿日新立　同十二月十日上棟　同廿日卯刻御遷供養道師　鶴岡相兼院法印大和尚位快元
同松原藤六貞　同等覚院権律師□□
大工青木右馬助安重
當社八幡宮新建立大檀那源朝臣頼貞　鍛冶奉行鈴木藤十郎有宗　熊澤入道々弥
于時惣奉行江戸摂津守法名浄仙　奉行石渡戸新兵衛常久　惣大工番匠山井大蔵丞　番匠由木内匠助　鶴岡兼往　法橋丸圓　西村左近将監吉重　法橋丸喜

延命山勝光禅院　豪徳寺の前の道を隔て向ひあり洞家の禅刹やゝく八王子安下の心源院ヨリ属せり本尊ハ虚空蔵菩薩ゝく座像二尺計あり　作者知れず　建武二年乙亥世田谷御所吉良兵部大輔源頼氏開創の精舎やゝく往古ハ洞家の禅宗ゆえ龍鳳寺と号豪徳寺所蔵吉良系図ヨリ左京大夫と号し又當寺ヨリ相伴ヒ頼氏法号ハ興善寺殿月山清公と号し故ヨリ始當寺を興善山と号し又豪徳寺吉良系図の中ヨリ政忠の二男文貞と号し鎌倉建長寺の住持なりしを氏朝を治氏の法号　其後天文十五年丙午世田谷吉良家六世の孫左兵衛佐源頼康　豪徳寺吉良系図ヨリ正三位式部大輔左兵衛督と云ひ法号ハ勝光院殿

延命院殿清山浄森居士と云ひ　中興開基ゝ然ヨリ天正元年癸酉同吉良家七嗣の孫左兵衛佐従四位下源氏朝　豪徳寺所蔵吉良系図ヨリ左兵衛督と云ひ法号を實相院殿と号し　法号の實相院を建立とあり　當寺の号を勝光院とあるゝ又天永琳達和尚　琳達和尚ハ小机村梅林寺の住持なりしを氏朝請して當寺ヨリ今の如く曹洞の寺院とせり　當寺過去帳ヨリ延命院殿商山栄久居士と云ひ法名を載せり疑ハくハ又何人居らむ　當寺の山号此号ヨリ知るべし　按ヨリ世田谷私記とあり　延命院沒卒の年号忌日を記せり　延命院ハ吉良往家なりとあり

往家ハ奥州の吉良家ゆえ又太郎と号せし人カ　愛縁薬師如来丈二尺半木像運慶の作なりと云ひ往古北条氏康卿の息女崎君常ヨリ此霊像を崇信し天文六年の春此霊像の霊ヨリ蒔田の地三十石を寄せらるゝ　後ヨリ永禄元年世田谷御所頼康卿の室とせり　縁記ヨリ　中興の尤拙文なれ疑ハくハ少し故ヨリ其文略

記

按ヨリ崎君ハ氏綱の女ゆえ氏康ヨリ

廣戸備後又三郎正之碑　當寺佛殿の右にあり　正之ハ駿州の産にして
柳営社稷の臣なり　高祖五郎久行　二階堂山城三郎行村十三世孫　其先ハ京都
江州廣戸郡を管領せるゆ因氏とす　永承十二
年己巳召ふ應して　御當家に仕へまつり後仕を致して世田谷の地に退居し慶長十
七年壬子十月十二日行年八十八歳にして終る依て當寺に葬る延宝八年の
冬孝孫行隆正武正次等こゝに立まつる　銘せり
吉良氏古塋　堂前左の方にあり　頼康の古墳も當寺にありとつたへ定かなら
ず　蓮田の勝國寺にあるもの信なりとつたへ　真善寺の墓塔も並ひあり
鶴松山實相院　登戸通道世田谷元宿の左の裏通弦巻村にあり
曹洞派の禪林にして同所勝光院に属せ當寺ハ世田谷の吉良
家七世孫左兵衛佐氏朝閑居の旧跡にして其閑居の号を学
翁斎と称せしと云学翁斎卒去の後学翁斎ハ慶長八年癸卯九月六日卒とあり　息
頼久當寺を開創あり　法号実相院殿学翁玄誉大居士の
文字を採て寺号に用ひ天永琳達和尚開山　或ハ應天和尚とも
本る阿弥陀如来作詳なり又當山開闢鶴松院殿快窓壽渓
学翁斎の墓碑境内にあり
大姉と称る石塔並ひ立て鶴松院何人なるを未詳　猶

可尋　氏朝ハ吉良左兵衛佐頼康の養子にして今川の一族堀越治部少輔
貞基の次男にして駿州瀬名陸奥守一秀の弟なりとい
弦巻郷　世田谷にあり　此地ハ昔桑原右京進とつる人の所領
しに由永承二年小田原北条家の所領役帳にえたり
世田谷八幡宮　同所にあり　相傳ふ八幡太郎義家朝臣の勧請
なりと　則此地の産土神にして祭礼八月十五日なり
龍華山永安寺　長壽院と号ひ天台宗にして東叡山に属せり
本る子手観音ハ恵心僧都の作なりとつたへ閑山も清仙上人
俗姓ハ二階堂氏　閑基ハ鎌倉公方源氏満朝臣なり　中興閑山ハ乗海
法印　俗姓石井氏　同中興閑基ハ石井内匠兼雄法名を良賢居士と号ひ
龍華樹　堂前櫻樹を号く今ハ枯て　当寺の閑山清仙上人鎌倉大蔵谷永安
寺の旧跡ハ鎌倉大蔵谷瑞泉寺の門外
右の谷を云往古永安寺ハ源氏満朝臣の菩提所なりしと云
石井氏移塋碑　本堂北の側にあり
相傳鎌倉公方氏満朝臣　左馬頭基氏子なり　應永五年十一月四日逝去

あり永安寺殿壁山全公と号ス仍鎌倉の大蔵谷ヨ新ヨ一精舎を造リ直ヨ其法号を採て永安寺と号シ建長寺玖曇芳和尚を請シく寺主たらしむ（諱周應夢窓國師の法嗣なり建長寺瑞林菴の開祖なり）夫より後満兼朝臣持氏朝臣相継て重修あるヨ永享十一年二月十日持氏朝臣此寺ヨ於く自害せられしハの所為なり（管領上杉憲実）其男成氏公（永寿王殿と云）幼稚なるヨ依く暫く難を美濃國ヨ避るヨ然ヨ嘉吉元年京都将軍の命を奉シく再ひ鎌倉ヨ帰入シるヨとくも上杉の両執事良ヨもれハ上を蔑シ権柄を弄ひ剛諍遂ヨ止時なく享徳四年六月十六日今川上總介うるヨ鎌倉を追補せる当時ヨ於く足利六世の繁昌一時ヨ滅シ都會空シく草莽ヨ当地となるヨ爰ヨ二階堂信濃守なる者あり持氏朝臣ヨ仕へく不二股肱の臣なり永享の時公の後臣悉く永安寺ヨ死す信濃守一人公の遺命ヨるるヨあるを以く倶ヨ死るるヨを免さるして遁る其後裔孫名ハ某法名清仙と云者あり永安寺を鎌倉幕府世々の墳墓安鎮の地たらしムるヨ荒亡年久しく兵馬馳走の巷とあるヨを患へとし終ヨ再復の願を發シ延徳二年三月勝長寿院の門主（寺記ヨ持氏公の寺子とのの命を奉シて此武州中丸郷大蔵村ハ其名鎌倉の旧地ヨ同シくを曰拠として禅刹一宇を建立シ鎌倉幕府世々の神主を安置シ寺号を也又永安寺と称す門主某の功を挙く長寿院と云（當寺の開創なり）天正年間當寺第六世良深より以後台密の二教ヨ改く堂宇を修補も然とも柴椽草堂のなるしを明暦の頃石井兼忠と云人其父良賢居士の没後追福の為堂塔を重修シ佛殿を莊厳を是中興開基なり

不動明王画幅　（坂澤筆聖護院道興准后開眼せられしと云伝ふ　明治中ヨ華押を注シくあり）

奴澤和尚ハ嘉慶の頃の人ゆゑに足利三代義満公の時世に當り大草紙に奴澤ハ夢窓國師の法嗣ゆゑ不動明王の化身なり兒の時より好て不動明王の影を画き寄特をあらハせしを奉けり本朝画史云毎日一遍を画き意甚多し年を重る良驍甚多し時に十八年道與鶴石東興下向の時其門徒なりし松井坊に宿しあひこれを所服ありし即紙中に花押とおされし後石井氏の家に傳へしを兼重と云る人の略當寺に附与せしと云

岡本半助裁許状一通　武藏七黨系圖　古写本なり

永川明神社　大藏村にあり永安寺別當奉祀せり祭神五座太己貴尊素盞嗚尊奇稲田姫手摩乳脚摩乳等なり　祭礼ハ毎年九月廿一日なり　相伝ハ曆仁元年九月九日始祭祀を行ひ宮同廿一日當地の主江戸氏此江戸氏ハ桓武平氏の裔良文の流足立郡大宮の御神を勧請せしと云旧記畠山の一族ゆゑに北見氏の祖ゝ唯一宗源の社なるゆゑ其後二百有餘年を経て天文年間松井坊とゝる山伏奉祀の宮とゝなり両部習合とす（此松井坊ハ武州都筑郡の人ゆゑに依て道真公崇敬の観音の像を伯来し補せるの後永川明神の本地佛となる）（大田道真の臣）（当社の別當ハ松井坊奉祀たりしゆゑ再唯一とせしと云）（後田中三河守とゝる人神職となり）（或云永禄の頃迄ハ松井坊奉祀）當社昔ハ五所ハ並ひ建く宮居巍々しゆゑに唯此一社のみ残れりと云

扎ハ載く永川明神第四、然ハ明暦年間永安寺第九世辯栄法印宮とあるゆゑ別當ハ補せしゆゑ再ひ習合の社とゝなり　神躰及ひ本地佛等を新に安置せしもたりとゝる　昔の神躰ハ江戸氏の兜の立物ゆゑに黄金の瓶子ハ畠山重忠と銘しゆゑあるものとなりされとも

その頃ハ失ひしとゝ今ハなしとのこと

棟札一枚　當地石井氏の家に伝ハ神主田中松井坊敬白とあり扎ハ田中と松井坊別人にあらずして田中ハ松井坊の俗姓なり

面

哀愍衆生者　永禄八年乙丑正月十九日

武藏國　在原郡　石井土郷　大藏村永川大明神第四ノ宮

我等今敬禮　神主田中松井坊敬白云云

裏

再建副願主　長島源太郎　伊丹孫次郎

清水源兵衛　石井玄蕃　河野大學

大旦那　武運長久　石井内匠助平兼實敬白云云

庄屋

帶刀先生義賢之墓　大藏村石井土の内殿山と云ふ地の東南北見村の堺農家清水氏の宅地の傍にあり　清水氏は清水冠者義高の後裔なりと云先は舉げて永川宮祠堂の中にあり

清水源兵衛とあるハ則この清水氏の祖なり　土人ハ大將塚と呼へり

東鑑曰　治承四年庚子九月七日丙辰源氏木曾冠者義仲主帶刀先生義賢二男也義賢者久壽二年八月於武藏國大倉館爲鎌倉惡源太義平主被討亡于時義仲爲三歲嬰兒也乳母夫中三權守兼遠懷之遁于信濃國令養育之云云

相傳此地ハ義賢居館の田址なり　故に殿山の称ありと云ふ

天明年間此地の農民清水氏義賢の塚をあきて石壁の中より其後大永古刀及び砂金の類を存せしと崇あるあり而の埋藏しうるなり

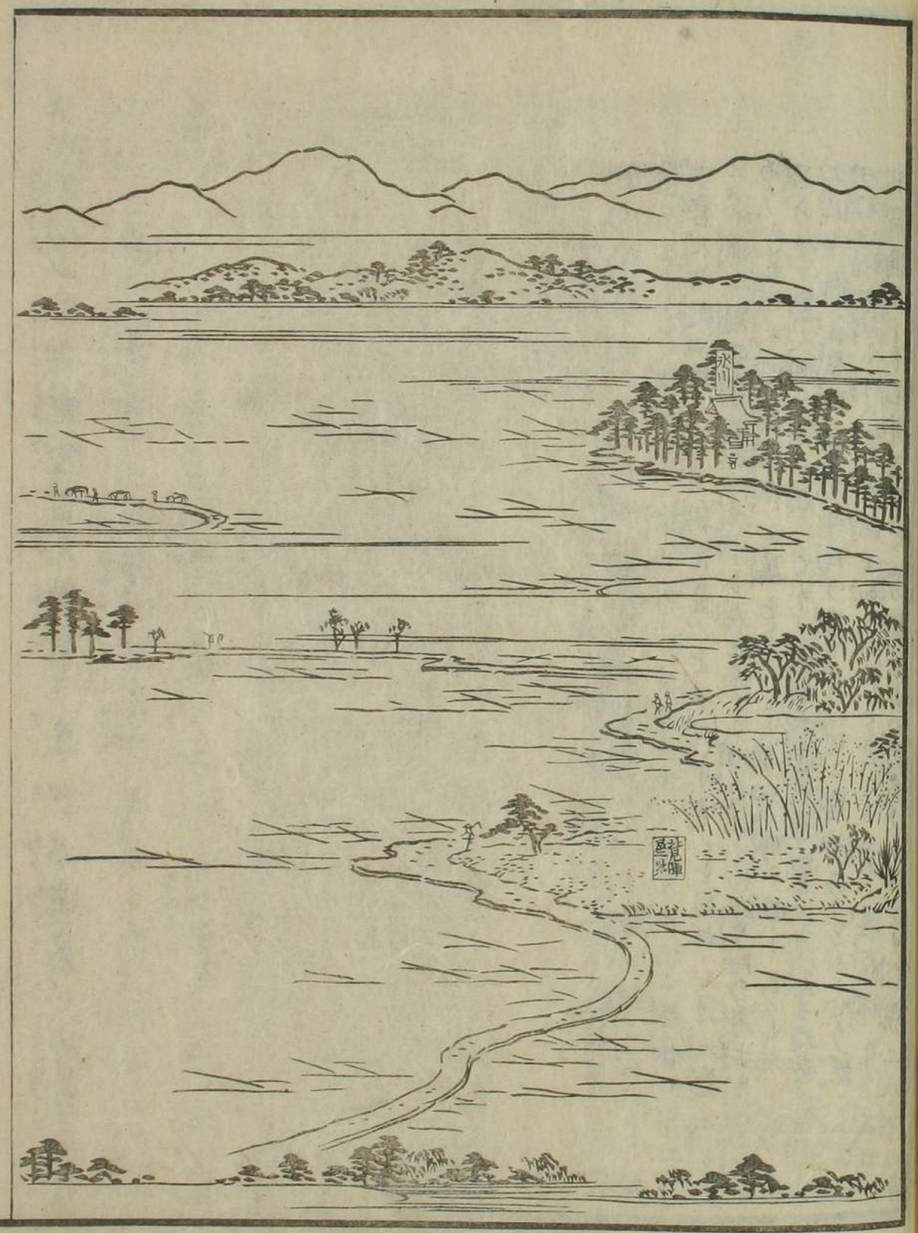
年間石井氏某法名良覺と云一人京都より此殿山の地に移り住せ土人云く同所新坂の上神明宮の脇に大六天の宮あり此良覺の靈を祭ると云　或伊田中勢大捕兼紀と云人の居跡なりしもいなむ

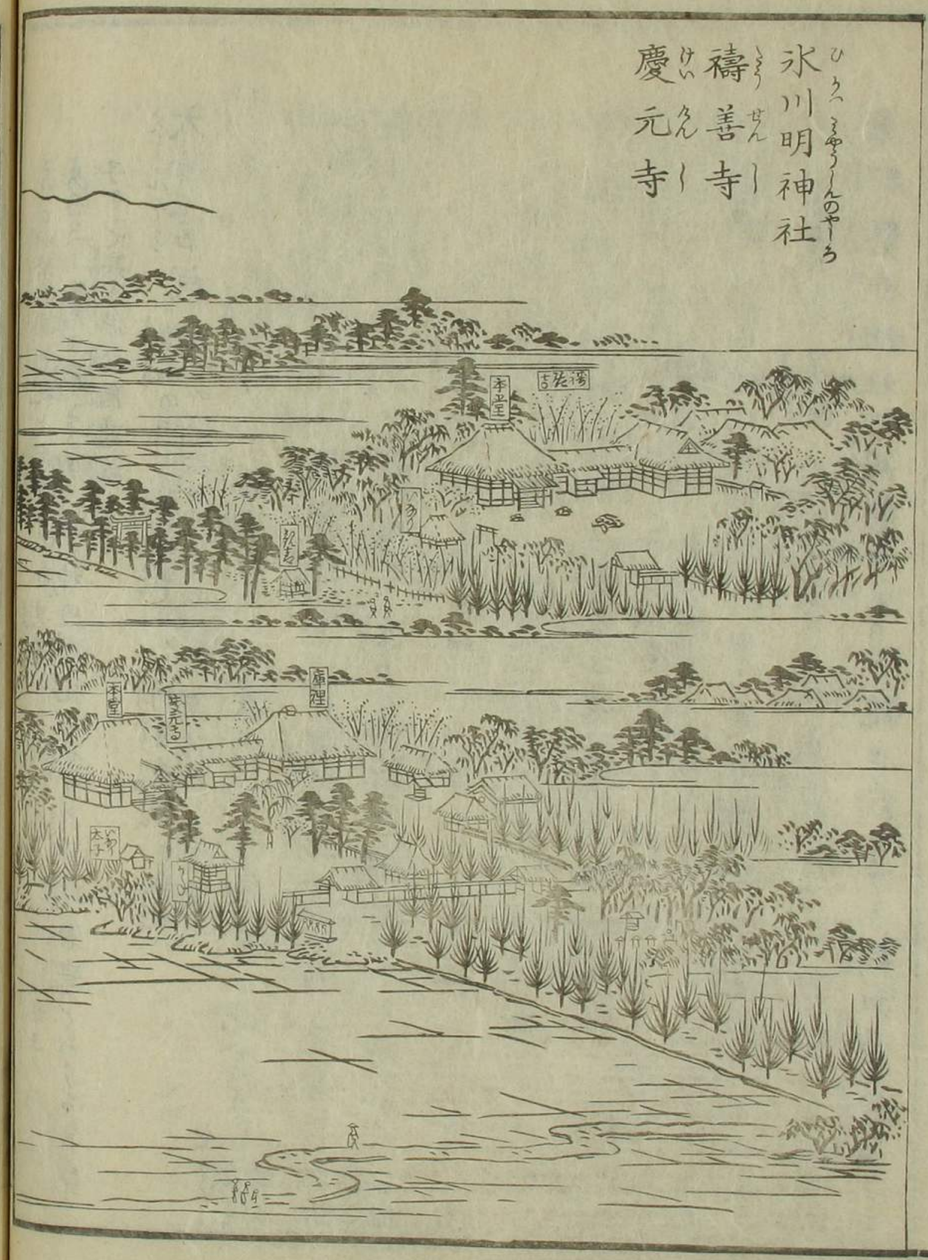
按に石井家の先祖良覺ハ武州久良岐郡釜利谷の伊丹氏なりと云ふ伊丹氏を誤りて伊丹氏を誤りて伊丹氏を田に誤りて傳へ云ふ小田原に屬せり然と後世丹を田に誤りて傳へ云ふ

されと中勢大捕兼紀と名乘ることあり　又先に舉げる永川明神の棟札に石井内匠助兼實とあるも良覺の子孫にして其子孫今猶連綿たり

大神宮祠　殿山の中にあり永安寺より別當兼帶せ神本ハ至ての老松なり　土人乳垂の松と号す

石井神社　弦巻村より西南の方大藏村石井氏某う地にあり　大藏邑古荏原郡に屬せ明暦より已降　祭神詳ならス　寛永年間石井氏兼忠社を多磨郡に入たり　舊地石井土谷と云より今の地へ移し　稲荷を相殿に合祭せり又近世故あり　同兼昌磐井と齋の假名ハ違へとも其訓の相似るを以て奇稲荷と称せりとなり　土人云當社ハ武藏國荏原郡二座の内延喜式神名帳に載らるる磐井神社是なりと　石の文字古事記日本紀等に伊斯或ハ伊波ともあり一字二訓なり　土人云磐の文字最筆畫多く厭ひて石の文字に改めしと其便あるを改めその例多し　舊地ハ今の社より七八町を隔て同邑石井土谷の原郡磐井神社の辺磐井ありと記されるも則此靈泉ありと




氷川明神社
禱善寺
慶元寺

云云相傳往古鎌倉右大將家の幕下安達藤九郎盛長の
孫同出羽守景盛の次男石井石見守兼周その子同左衛門尉
兼章仁治元年庚子執權武藏守經時の吹挙より始く
武州石井郷を賜ひ此地に移り住む
今は大花邑に屬し小名となり石井神社の旧地を石井土谷と
いひし古の称なり
登録に地古き寺図帳あり
登録に又等ヽ力満願寺古文書の中に弘治二年丙辰十二月十八日吉良左兵衛佐
頼康より大花村年貢四十貫皆納石井戸新開二貫満願寺へ一貫
分と云ふ故に石井を以て氏とし則當社をも崇ひまつり石井氏累世鎮
護の神とす
按に荏原郡不入斗村に鎮座
磐井神社と称し又石川中納言豊人卿武藏守に任し荏原郡に在せし頃
霊亦よりの経始せし宮社なりと云ふ豊人を兼武蔵守とし同年七月大花の郷
中宮太夫従四位上石川朝臣豊人
と云ふ然に國の守上古は府中に在せしも旧史に多摩郡に接し
あり大花村も荏原郡に屬せしもの多摩郡に接しもの府に遠く
恐らくは豊人卿此地に住せし
土記殘編荏原郡磐井神社の條下に社辺に磐井ありと
旧地石井土谷も今は多摩郡に加へられ
甘泉涌出しく石井と呼く
旁鑑に因ある似たる
青は荏原郡其旧地
第二巻の森

八幡宮の条下を
照合せ
東覺山吉祥院地藏寺と号し大藏邑の南鎌田村にあり天平
十二年庚辰行基大士開創を新義の真言宗ゆゑ小杉の西明
寺に属せり
本堂本尊地藏菩薩 立像丈長一尺七寸 行基大士の彫像なり
不動尊 同堂内に安置せり 刑部少輔源義光願所の作なり
印子歓喜天 弘法大師の作鎌倉副元帥 七観音画影 奥教大師の筆
平泰時祈禱の作なり 往古
當寺盛なりし頃は仁和寺に属せし初釈に至る迄當寺に宿せし頃に寄附
此地に下る日同年中夏の頃なり同大師の真筆
日輪弘法大師画影 嵯峨帝宗論の画影なり
縁起曰天平十二年庚辰行基大士勅をかうむり諸國に伽藍を
造立しのふり其頃當國に至りたまひ然に此地に叢六十
かり孔賀女住む幼子地藏を信じ弟せ称名ゆゑ
止時なくを供養しまつる彼貧女一日行基菩薩の所に

未来成佛の道を問まる同十三年辛巳正月廿四日行基菩薩此地に至るたまひ地蔵菩薩の像を彫刻ありくらまを貧女に与て曰く此地は則かゝる有縁の灵地なり汝直に精舍を営むべし吾其勝地を卜ぶべしとく杜杖を以て地上に畫〻く是を定め（今地花屋敷と云は其項世に地花尼と字せしなり旧跡ありそ）

金つるふ同郷の冨民秦氏某なる人糧財を喜捨し田園を附し

れは精舍僧坊悉く落成し称名散花梵唄の声絶るなかるべし然に建武二年の兵乱に堂宇悉く灰燼となりしより已降

年をへるの〻假に草堂を安置の後世田谷の吉良氏不

測の霊夢を蒙て大に崇敬ありく寺院再興ありしうと竟に

天正の頃小田原北条家没落の後は吉良氏の家も共に亡びくう

しわゝり其後は漸香花の備も絶ろそわなりて今は僅乃草堂

一宇を存するの〻（往古堂舎兵火のるふ灰燼せし頃も本堂は自ら火焔を逃れ焼て悉なし後此里に住る川辺氏某妻の安産を祈りく奇瑞ありしうは報恩のゐ永世當寺の檀那となり其項田園等を喜捨しまりしなり）

観音寺　吉祥院より八町ゝ西の方宇奈根村にあり當寺は

永正年間天台の沙門實海（河越喜多院第十四世なり天正五年八月十七日化寂せ）創建ゝ和の

寺院やゝく深大寺に属ゝ本尊十一面観音の木像は傳教大師

の作なり故に寺号とせりとの〻（昔は相州小田原にあり圓正寺と号し兵火に亡びるるふ炎上の時）

荒井對馬治義墓（當寺に相傳ふ治義天文中上野國新田郡荒井氏の子孫今に連綿として相續するのは此地に遁れく民間に交る天正元年癸酉二月十七日没る由碑面に見へ後此地に遁れく民間に交る小田原の北条家に仕へ此地に）

永劫山慶元寺　華林院と号観音寺より七町あり西の方喜多

見村にあり浄業の精舍やゝく木机の泉谷寺に属ゝ

本尊阿弥陀如来の座像は一尺計ありく恵心僧都の作ありと

云開山は真蓮社空誉上人と号せり當寺は江戸遠江守の後裔

江戸刑部少輔頼忠の子を江戸摂津守朝忠と号し此人も頼忠に同しく小田原に属せり頼忠の次男勝重（始勝忠と云）より江戸氏を改く其采邑喜多見の地名を以て氏

とし喜多見若狭守勝重となる小田原没落の後遊客御當家に属しなる
なり江戸ハ御當家に居城の地なるを以て氏を改め勝重の二男喜多見
五郎左衛門重恒其子若狭守重政より後其家滅す　喜多見氏建立の寺院なりとぞ

天神森　慶元寺の前小高き岡にあり　北見氏陣屋の跡なりと云　歌枕天神と号ス

奇杷の来由　天王を相殿とせり　相傳往古澤庵和尚堺南宗寺ゟ
勸請せられを兼應年間喜多見久太夫重勝大坂ゟ
頃神木の梅樹と共ゟこの地ゟ移し自の園中ゟ勸請せ天神
森其旧跡なりと云神影ハ画像やゝく古土佐の筆と云後故
あるゝ此地石井兼重の家ゟ傳へ梅樹も又自庭前ゟ迁したり
後兼重の子通兼と云人大蔵村の永安寺ゟ安置せ
なり故ゟ永安寺ゟ神木の若木あり

除蝗地神符　北見村の内宿と云る地ゟ伝る農家斉藤伊右衛門
某ゟ家ゟ傳ゟ毎歳四月八日ゟ此神符を渚人ゟ与ゟ蝗蛇に
数れゝ人此家ゟ至ゟ禁呪を乞へハ忽ゟ痛を去毒を消

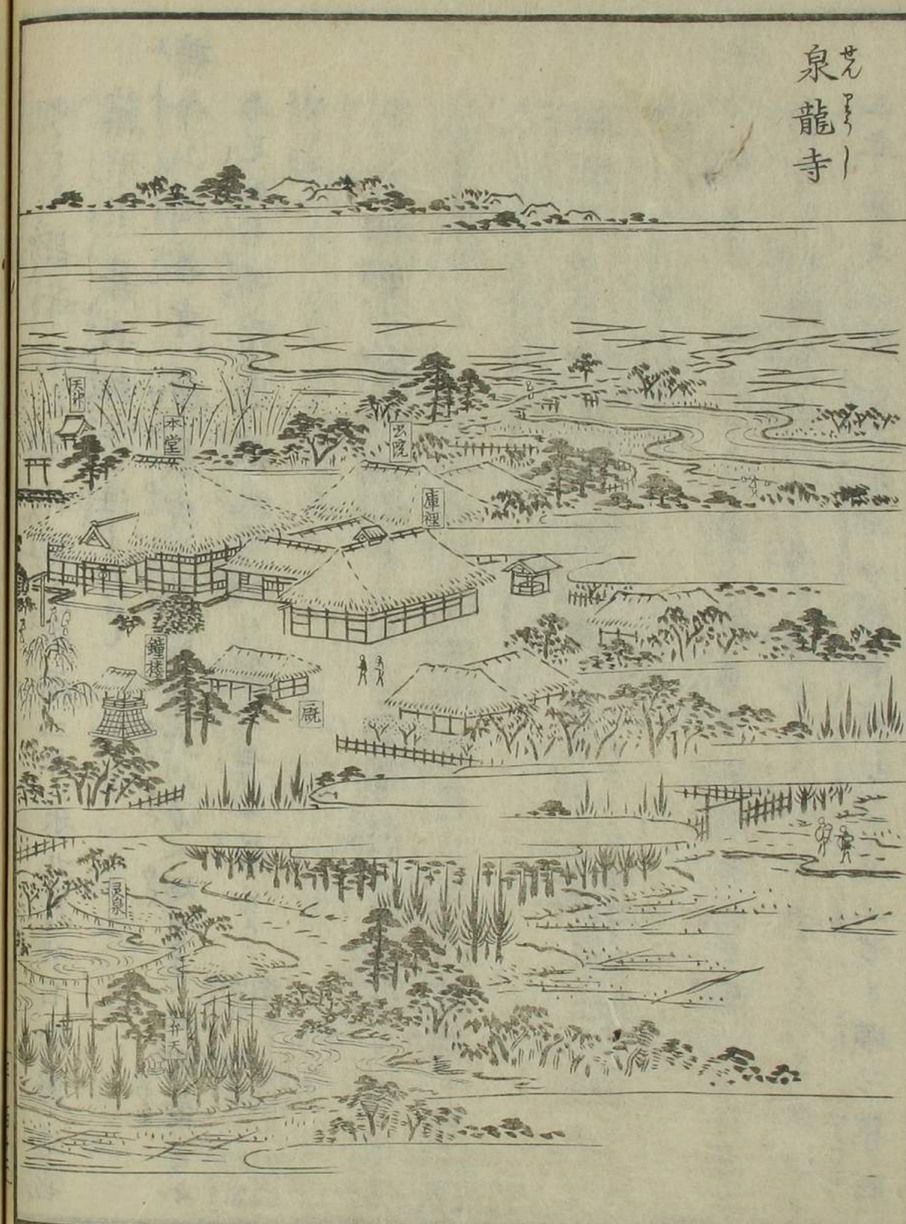
甚奇なり其神符ゟ永禄二年未九月廿日斉藤道善
藤原忠嘉再改之と注したり

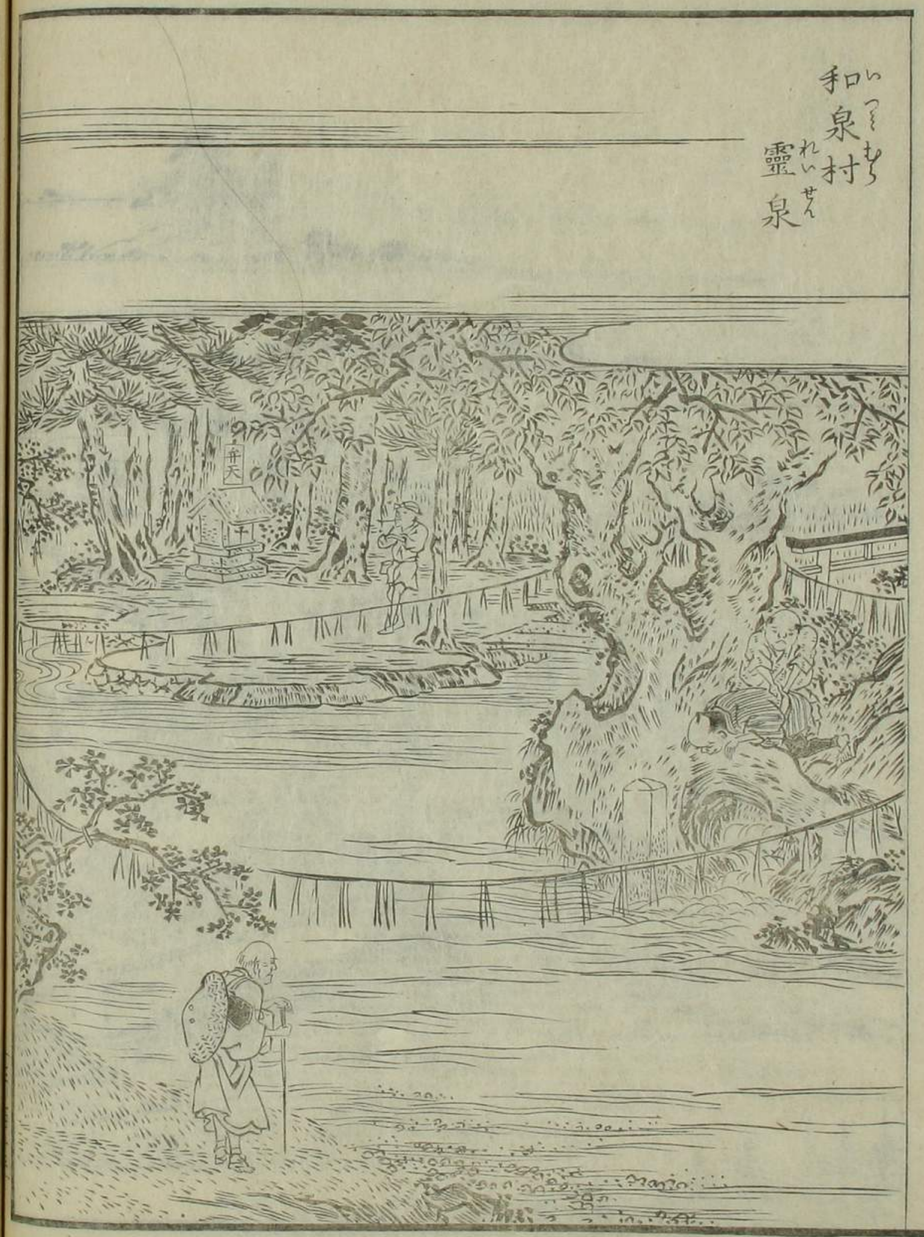
普命山禱善寺　華蔵院と号同所北の方へ廻ること三町餘ゟ
あるゝ天台宗やゝく深大寺村の深大寺ゟ属せり　永川明神の別當寺ゟ青木宮本坊と号ス

本尊ハ座像の薬師如来やゝく二尺五寸計あり脇士ゟ十二神将
の像を置ゝり往古江戸刑部少輔頼忠を以大檀那と
江戸太郎重長五代の孫江戸彦次郎常光の子小田原北条家ゟ属す　此頼忠
薬師堂　本堂の前左の方ゟ立像一尺八寸計の木像やゝく作者ゝる
故ゟ道俗宿願あるゝ家へ迁しまゝせ通宵法施供養なり
称し薬師ゟ来と

氷川明神社　同所の左ゟ並ゟ禱善寺別當奉祀を祭礼ハ九月十
八日なり　相傳勸請の年歴久遠ゟ詳なるとぞ永禄十
三年庚午四月　江戸刑部少輔頼忠社を建立せ頃の梁牌

經塚
鐘楼
東堂
白山


泉龍寺
本堂
玄院
庫裡
鐘楼
廐



一枚當社に存す　寛永二年九月五日江戸氏の遠裔喜多見勝重當社を重建せしとゝ

梁牌銘曰

別當宮本房　代官　香取新兵衛

聖主天中天　加陵頻伽聲

奉再造水川明神社頭一宇天道納受依

哀愍衆生者　我等今敬禮

大檀那江戸刑部少輔頼忠　大工石渡鍛冶正吉

同背面曰

于時永禄十三庚午歳卯月二十七日

武州下多東郡中丸江喜多見村

石華表　左右石柱ハ永應三年甲午九月喜多見氏久太夫重勝同五郎左衛門重恒等建立　鐫付

馬頭観音堂　華表の右の方にあり喜多見重勝の乘馬の斃れしを埋蔵　観音ハ崇むるとゝ

江戸遠江守曰舘地　水川明神の社地より一丁計巽の方小篠の猥雜たるを名づく今ハ除地とす　延文三年十月十日

竹澤右京亮と共に謀を矢口の渡へ〻新田左兵衛佐義興を
亡し奉り〻江戸遠江守是なり（其の子孫は第二巻矢口明神の
終下に詳）

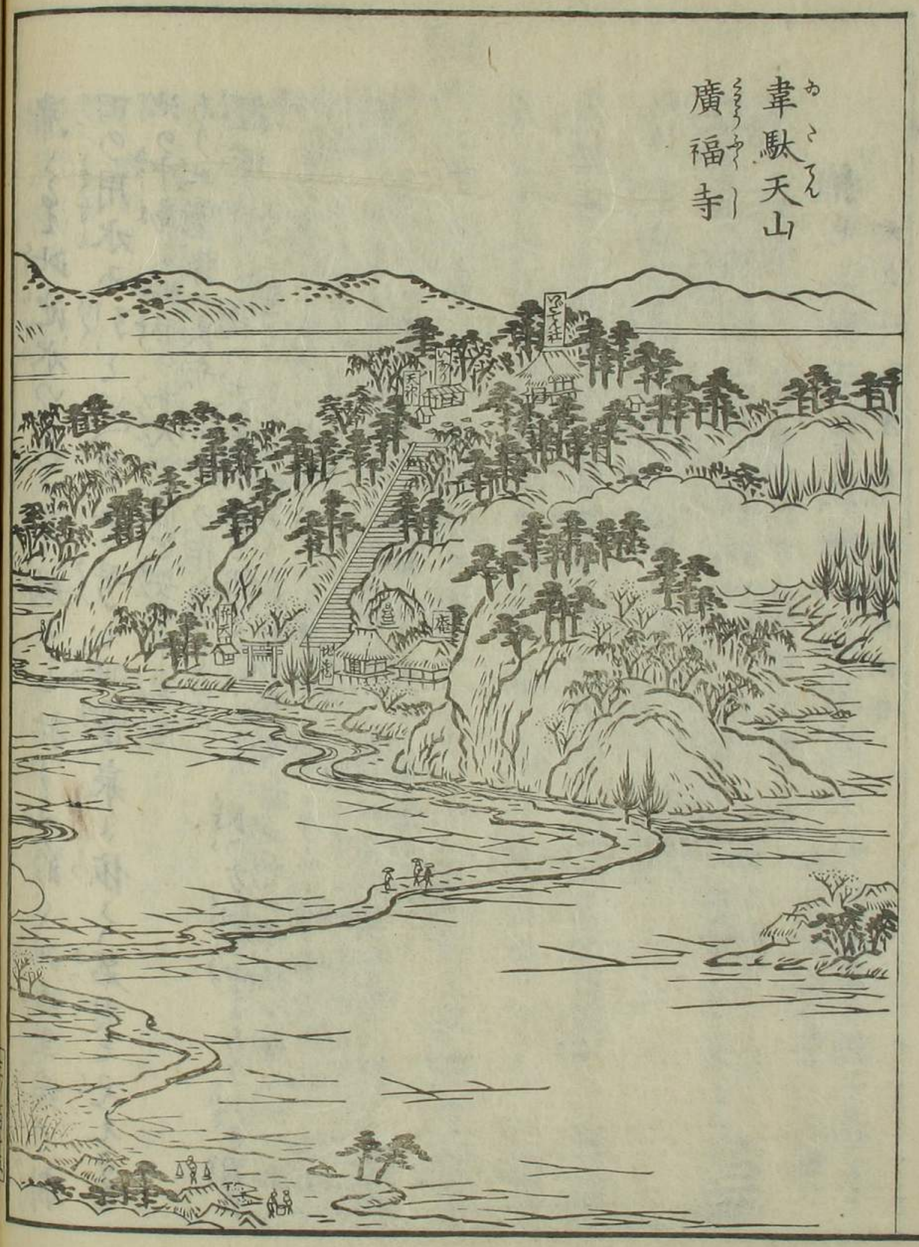
雲松山泉龍寺　氷川明神より八町ばかりを隔て〻西北の方和泉
村にあり曹洞派の禪刹にして相州高座の宝泉寺に属せり
本尊釋迦如来の坐像は八寸計り〻脇士には阿難迦葉の
像を置き〻文七寸脇檀に聖観音の像を安置す良辨僧都の
作なりと云當寺は良辨僧都の草創にして往古は法相華厳を
兼ね大伽藍なり〻とあり中興を鍼叟瑞牛和尚と号し相伝
孝謙天皇の御宇天下大に旱魃す依て良辨僧都請雨の
法を修せられしに奇特あり〻清泉湧出せり云即門外南の方に
有る霊泉是なり（此地を和泉邑と名よびしも此清泉より又小田原
北条家の分限帳に川村某の所領に江戸泉村七貫文と
ある地を加へ〻とも）

霊泉徳門に并びて右の方にあるを槻の樹九根より湧出し〻
沸き〻此池水いるる旱魃ゆへ枯るるに〻此近里悉く耕
田の用水に引とも〻寺号も此霊泉に依て名付と云へり〻
池の中島に蛇形の弁天の像を安せ〻宮居
あり此霊像は良弁僧都の作なり〻
経塚　寺より後の方用水堀を越て一丁あまり艮の方畑の中にあり少き岡の
上に三間ばかりの老樹あり往古良弁僧都此所に佛経を埋め松を植て
印とす此樹下に古碑六枚あり一は上に梵字を刻し下に六字名号を記し左右に
明應六年巳酉月十六日とあり又一は上に梵字を刻し下に阿舎梨良弁と記し京
明應三年壬申六月十日とあり又左に毎自作是念必何令衆生得入無上道速成
就佛身とあり其余の四枚は缺損し〻文字讀難し〻

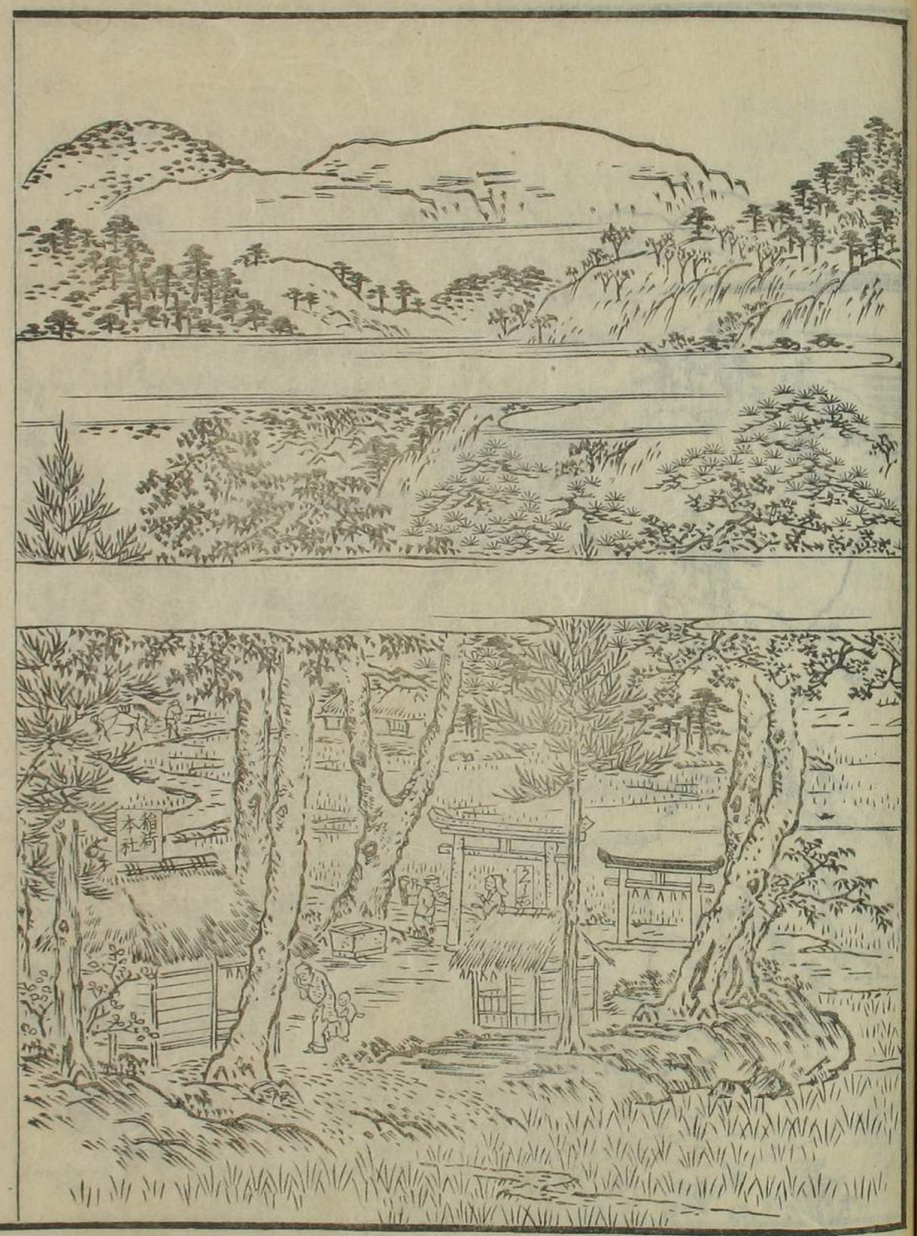
松本山廣福寺　昔は稲毛山と号し〻菅村の内府中往来の
道に〻右の方四町ばかりを隔て新義の真言宗にして三ツ濱の
高勝寺に属せり本尊五智如来は座像九尺計にして開山は慈覚
大師中興は長辨阿闍梨と号し安貞元年丁亥
観音堂　本堂より後の山の上にあり本尊は観世音の像五寸ばかりにして胎
中に稲毛三郎重成念持佛の観音の小像を収めるとの〻り此堂中
重成の肖像あり〻重成必下の位牌を置き〻

稲毛三郎平重成禪門法名道全（名の上に丸の中に上羽蝶の
下に一文字の紋を畫き〻
元久二乙丑年六月廿四日

韋駄天山
廣福寺



飯室山
長者穴
長森稲荷



其餘重成の父小山田別當平有重法名寂照同舍弟榛谷四郎平重朝法名諦悟
同甥の榛谷太郎平重秀法名蓮屆同小次郎平重秀法名如月一子小澤次郎
平重政法名真悟等以上五人の靈牌ありしかも元久二年乙丑六月二十三日とあり
又同じ形の靈牌ハ森五郎平行重法名玄理と注せしものも存もれとも没年の年
月忌日を注さす追て考へし
按ニ元久二年六月北条時政の室牧の方小山朝政を詐訴を請け重忠父子を
誅さんと計議あり〻同廿二日由比濱より畠山六郎を誅せ同日申刻二俣
河ハ相ハ重忠愛甲三郎季隆を誅せらる後小次郎重秀ハ
郎従等自害せ翌廿三日又鎌倉中騒動せ三浦平六兵衛尉謀く榛谷四郎
重朝同橘男太郎重季次郎秀重等を経師ヶ谷より誅せ稲毛入道ハ大河戸
三郎ハ誅せ子息小澤次郎重政ハ宇佐美与一より誅せらる田東鑑ハ
不ハ何も此時死せの人さゆして重成の一族なるハ當寺ハ靈牌を置
こと〻し又按ニ榛谷太郎當寺靈牌ハ重秀とあり大系図東鑑等ハ
重季とす同小次郎靈牌ハ重秀とし大系図ハ季重と作る孰れの考

一室圓如大禪定尼

建久六乙卯年七月上四日

注せし靈牌もあり寺僧も其人を考へしかとも東鑑より因て考へ即稲毛
三郎重成の室なるを明けし

東鑑曰 建久六年乙卯六月二十八日辛巳稲毛三郎重成妻北条殿息女於武藏國病悩太危急之由飛脚
到著下略

同書曰 同年七月四日丙戌稲毛三郎重成妻於武藏國他界日來病悩頗雖加鵲療終被侵風病畢重
成不耐別離之愁頗倦勇敢心忽遂出家云云

稲毛三郎重成墓　観音堂の後の方山の上よりあり（五輪の石塔なり半土中に埋れり）

當寺境内に櫻樹多く春時爛漫たり故に近邑の土人閑花の時を待渉く此地に到る宴を催し遅々たる春の日も猶暮惜く思ふなるべし

韋駄天宮　廣福寺の前の小路を隔て向の山の中腹にあり廣福寺奉祀なるゆゑに韋駄天の像は廣福寺の佛殿に安置せり祭礼は九月十五日に修行す

按ずるに此地の小名を稲の目と称ふ或人云延喜式神名帳に武蔵國男衾郡稲賣神と云云又神名帳頭註に稲乃賣神は稲田姫なりとあり疑らくは後世稲田姫と韋駄天とを混して誤れる歟

當社往古は稲乃賣社なりしを稲毛也又稲の目の誤あるべし歟

升形山　廣福寺より南の方の後の山を云稲毛入道重成居城址旧趾ゆゑに山頂は八町四方あり升の形状をなせるゆゑに号く

重成は小山田別當有重の子北条時政前腹の女の聟なり秩父大夫重弘ゑ朝重忠従弟ゆゑに頼朝公の幕下に属し稲毛の地を所領とせ然に重成は重忠と日頃不和なるより牧の方と共に時政に讒しまゐらせは元久二年乙丑六月廿二日重忠野心ありと企て時政勢を向けて畠山一族を誅伐せ重成親族の好を忘れ重忠を讒害せしは天道に背の罪遁がるべきなし終に和田義盛大河戸三郎宇佐美与一等をして武蔵國へ發向せしめ同廿四日稲毛入道父子を誅せらるるなり

東鑑北条九代記等の書に云稲毛入道父子を誅せらるる　稲毛と称せる地尤廣大なり登戸の渡より川崎の辺まその地なり稲毛須と称せる往古は四萬八千石の地なりと云大平記に信玄江戸を廻りて小田原へ下野守伯父勢の所領稲毛庄十二郷とあり又小田原記に信玄江戸を廻りて小田原へ押寄せんとせるとあり茶下は天口の渡と云地へ稲毛の平間と云地へ稲毛の十六郷を追補せもあり又永禄二年北条家の分限帳に竹内木月小倉長尾鈴木小田中分鹿島田瑞宿中田分鹿島田中村分矢向平間赤屋経久末長久本小田溝口平の村高田等にも稲毛の内とす證臣田島兵部左衛門之房横山式部弘成駒林図書定朝等皆此地に住せりと

飯室山　同所左の山續にて山頂は七面富士浅間を勧請す

長者穴　同し山の東の裾にあり入口は一間四方なれども窟中甚廣く同し程の巖室二ツ並ひそあり土人も名義を知らずとなり

長森稲荷社　同所四丁計を隔て菅生村府中往来の街より右の方蒼林の中にあり同所日蓮宗安立寺奉祀せり

祭神長森稲荷明神右星夜明神左海光曜明神以上三神

劣族の神長現金狐神渡一銀狐神阿通相狐神阿参玄狐神阿椎白狐神以上五神

相傳元禄十年伊豫國宇和島の浪人相馬左仲と云るもの花洛にあり一頃鳥羽繩手ゆきて一人の美女に逢み其美女の云く我ハ伏見藤森長森明神の臣渡一銀狐神と称せりと霊示あり翌る十一年の夏四月廿日又神告あるに任せ江戸に至り赤布日ゝ窪に住る中原与兵衛といふ者の家に勸請す大に奇瑞霊験あり然に正徳五年の夏の頃左仲没せるの後一子加藤次といふる者此御神を譲請くる信を終に元文五年十一月安立寺の主僧日現上人此地に迁しまゐらせ法華勸請の御神となせり

中原与兵衛の聟有隅次兵衛といふ人此神をまる信し稲穂銀封御羅等を感得せし奇瑞あり今ことゝ安立寺に收まる稲荷の

宝物

雪坂　飯室山の南の續より曲折して西へ下る坂路を云登戸の辺より平村辺への通道なり頗る美景の地なり

薬師堂　長尾村の内二子街道の右側山の上より本尊薬師如来の霊像ハ影向寺の本尊と同木にして慈覚大師の彫造なりと云秘仏にして常ふ拝まるるなし（天台宗同所妙楽寺別當）

大師巌室　土人大師穴と称ス薬師堂の山の後西向のわふあり入口ハ一間四方ばかり空中ハ二間四方にして高サも相同し享保の頃一人の山伏心願のすぢにて断食して此窟中ふ一七日の間籠もりたりと云伝へるなり大師と称する所謂ありがたし（今窟中ハ青き枝石の古碑四五枚あり）

五所権現社　薬師堂の南の山續より祭神詳ならず神躰ハ何も座像にして丈七八寸ばかりの烏帽子を冠りたるもの或ハ僧形のものもあり都て五躰なり（荒木彫尤古物なり毎年形数見分うけ）

四月二日　桃樹の枝を伐て弓と矢を作り田式の祭事あり

杉山明神祠　相州厚木街道溝ノ口の驛より左へ入て十六町ばかり南の方久本邑より上の宮と称するハ別當龍華寺（天台宗深大寺に属す）

毘沙門堂のハ宮の西の山續より其間一町ばかり隔つ下社宮も同し寺の堂の左の方石階の上にあり祭神詳ならず

慈覚大師の作なり

当社ハ延喜式内同國都筑郡星川邑鎮座の杉山神社の摸なり祭礼ハ九月廿九日なり（此社へ綱曳の者請れハ必ず土人甚恐怖せり）

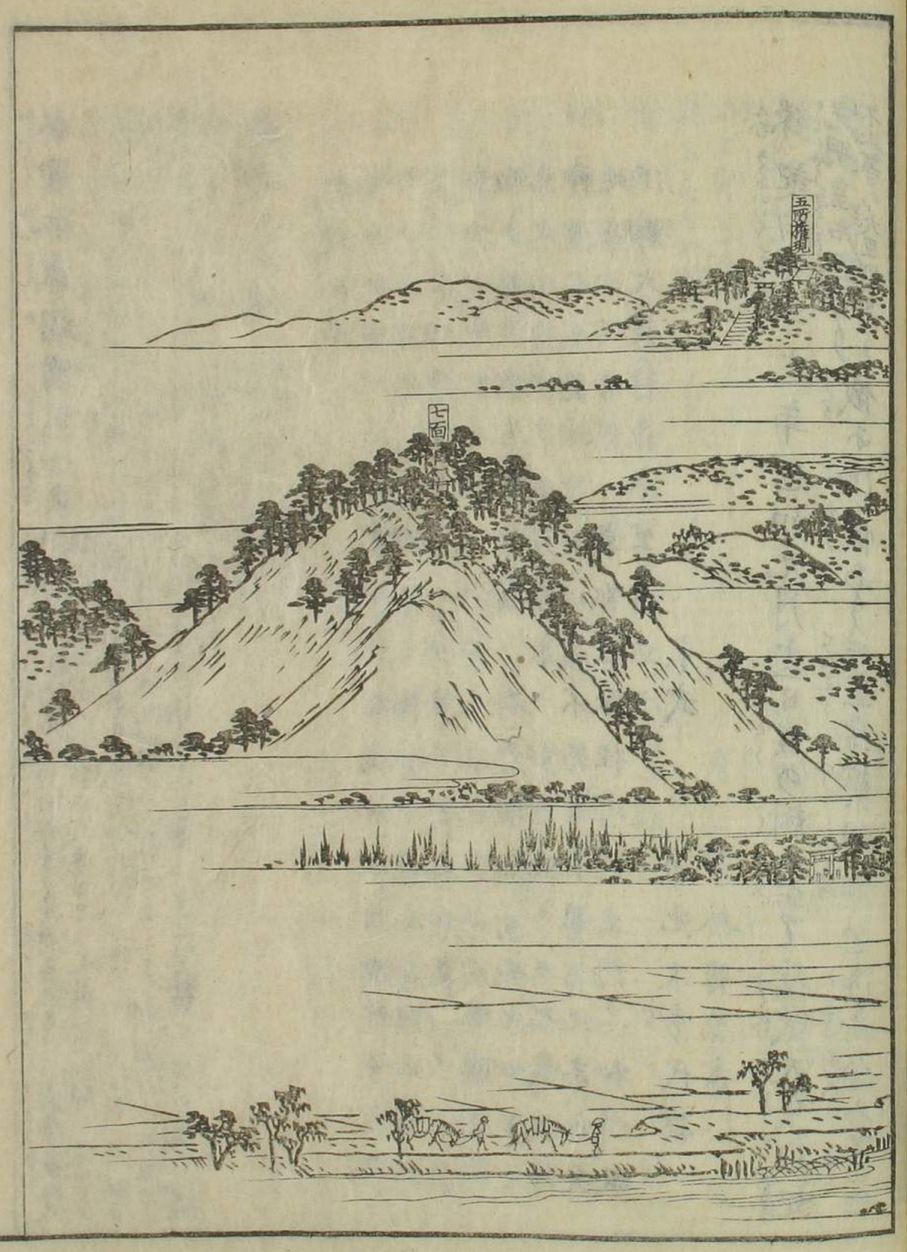
稲毛薬師堂　野川邑の内府中往来の道より三丁計西にあり

醫王山影向寺と号ス（天台宗多摩郡深大寺に属す）聖武天皇の御願にして

行基大士開基也其後文徳清和両帝御再興あり慈覚

大師修造せり三帝の勅願両大師構営の霊場にして利益

著し（此故ハ上古ハ僧坊百戸三箇寺九院ありしとも盛大の寺院なりしとも昼夜仕候）

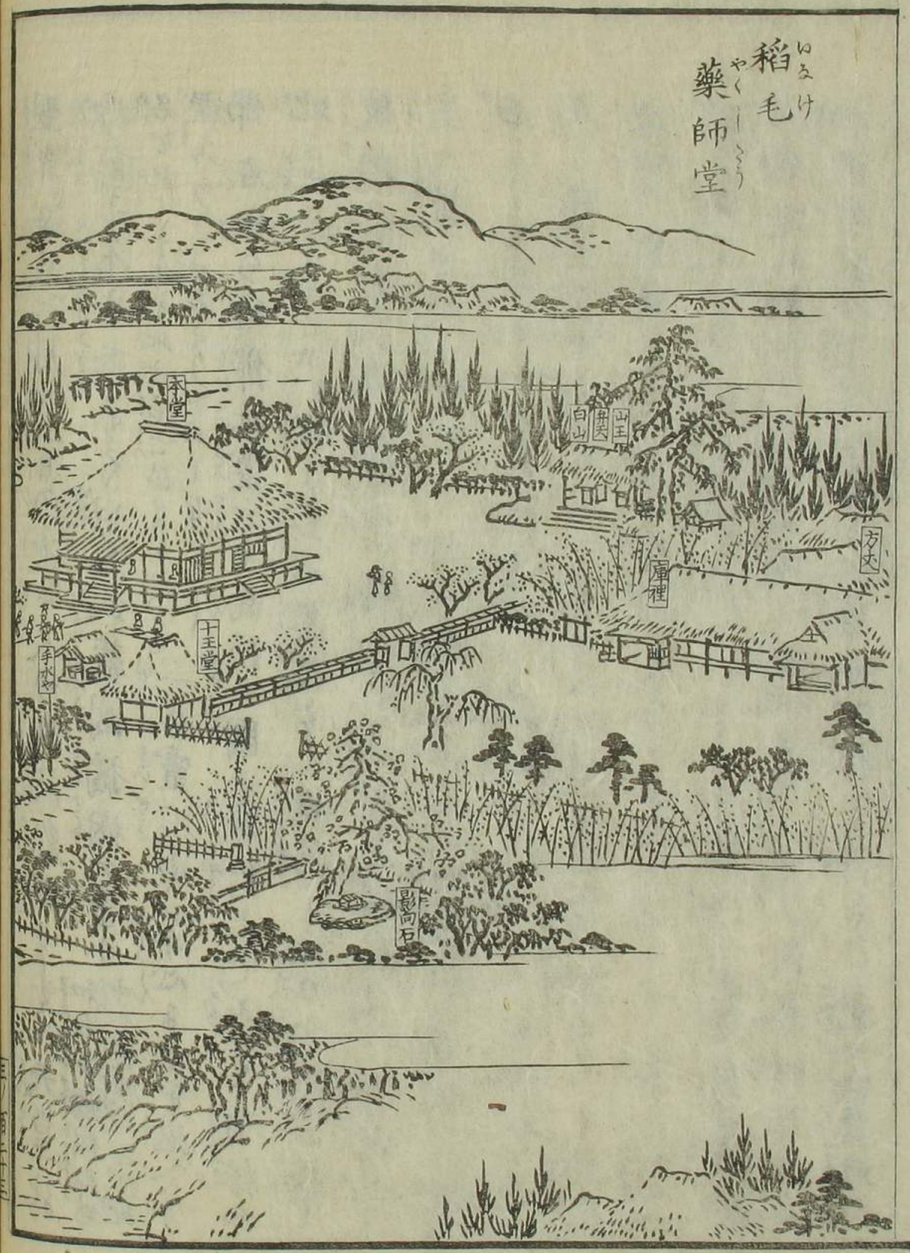

五百羅漢
七面

妙樂寺
七面山
本堂

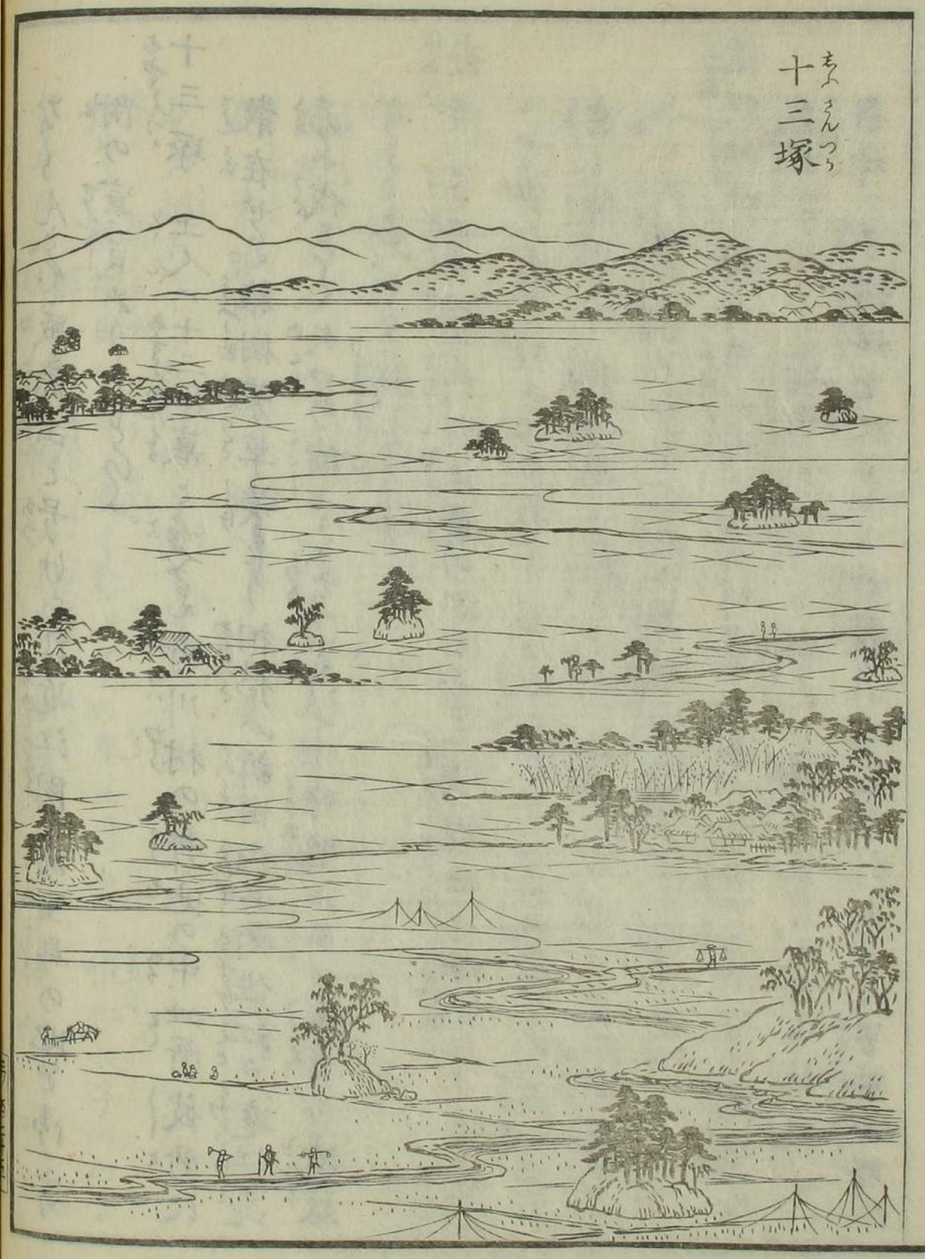
本堂本尊瑠璃光如来御頭は行基大師の作なり再興の本尊は座像長五尺
影向石　又佛足石とも称す堂前右の方にあり　垣をめぐらし入口に戸鎖あり　根本
日光月光天共に五尺五寸なり　慈覚大師の作なり
人をして入しむる事なし　石の大サ六尺四方　石面八平なり　中凹に一尺五寸
計の凹あり　常に水を湛へ　上に家根を覆ふことを醫王水と祈し病
あるものの服飲して霊験を得るとかや
影向石之碑　入口の左に建つ
其文左のごとし

影向石碑
嗚呼神道之妙聰明正直也哉此地堂構往昔天平
之年初基焉文徳帝之御宇中興焉悉因王造云
有石象凹清泉常満一飲其水則沈痾盡愈人々至
誠所以感於神也矣余曾恵眼也多年矣醫藥極術
而未得其驗偶至此禱之則雙明漸愈雖未如平人
焉大半獲快矣鳴嘑霊泉之妙河潤千里也哉敬拜
神霊之威徳而片石以識不朽且表尊信之志也矣
延享丙寅季秋　東都法眼桂川先生門人和州城
下郡大泉村森本亘直立之
東武　菊池政房代撰
平林博信書

縁起曰天平十一年己卯九月十二日寅の刻に至て聖武天皇の妃
光明皇后是なり　不比等の大臣の二女なり　俄に悩あり天皇自藥師佛を請祈念あるに
翌年辛巳二月十二日の夜一人の沙門忽然として天皇北
の前に来り告奉て曰く武蔵國橘樹の里に（和名抄橘樹郡の中に橘樹という地名を記しるす　今此地名亡ひうせたれども一の霊石あり中心に水を湛へ疑ふらくは此あらうかと云しなり）
佛在世の時佛此霊石に向ひ三國に飛行して永く有縁の
地に止まれと云く然に其石忽然として飛行し此日本の地に移て
彼地に止まり件の霊石は釋尊の浄足を捧けまし大蓮花の
其一葉を踏とめて末世に残し置る所實に奇特の霊
石にして彼地も又霊佛安座の勝刹なり早く一の伽藍を建
立し醫王尊を安置し奉り皇后の悩立所に平愈あるべし殊更
王城の鎮護として國土豊饒なるべしと坐を立ると見て其行
方を見失ひぬ天皇此奇特を感めされ行基菩薩に薬師
佛彫造の勅あて又武蔵國に勅使を下しぬ同年四月八日
勅使當國に下向して此霊地を探て得ぬ竟に伽藍造立


稲毛
薬師堂
本堂
白山
山王
厨裡
方丈
手水
影向石

あり又行基菩薩ハ良材を得て薬師佛の尊像を彫刻しまゝ
地を去て五十余町巽の方小倉と号る地に一の池あり此間佛堂造立落成の
夜毎に音燈をかゝゝく又后の悩も四月八日より
後橘樹郡の地を以て寄附しまゝ時に天平十二年庚辰十一月
なり其後 文徳天皇の御宇に當て惟喬惟仁御同胞の太子
御位定の時慈覚大師惟仁皇子の御為に種々の祈あり
天安元年丁丑の八月當山に勅使を立られ一堂塔法再営あり
翌年戊寅初秋悉く落慶して舊觀に復を同年八月本尊を京
師より移しまゝ本尊駿河國青島の里に至て夜自ら光つゝ當山辰巳
方の大盤石の上に立せまゝ人々奇異とす則影向石是なり
其時大師曰く我此山の躰を
是八葉胎蔵の德を備へ
尊き相ありとて勅使と共に帰洛の後奏聞あるに天皇再ひ
改めて橘樹郡を寺に充しむ此年の春三月竟に惟仁太子位に
つけまゝ清和帝是偏に此本尊の衛護のよりて
なりんと威德山と号けられ近江國蒲生郡の地を御寄
附の宣旨ありしとの
十三塚 土人ハ十三本墓と唱へ野川村の耕地の中此所彼所に
散在せる雑樹茅草茂り相伝ふ新田佐兵衛佐江戸遠江守
なる伐採く矢口の渡り亡ひ時随ふ所の家臣の墳墓
なりしと詳ならす
舟田 子母口村の内府中道の右にあり橘明神の神田にして長
二十歩に幅十四歩あり水田なり舟の形にして其田
悉く陸田なり舟河原と称する地ハ社より十町東に當り
今ハ民村の字となりて次の橘明神の条下と合せ
橘明神社 同所府中道より四町あり右の方山の上にあり別當
真言宗にして蓮来院と号し祭礼ハ陽年九月九日に修行す
祭神ハ弟橘媛を祀ると云神體ハ一尺三四寸計あり男躰女躰二



軀を安置せり（文酔ハ弟橘媛ノ男躰ハ日本武尊）勸請の始詳ならず此地の人他邦へ移るとある時も必先當社を請て然して後發足せらるゝハ路中過あり

そ大に恐怖せり

古文書一通（安芸村の里正伊藤氏の家に蔵む安芸前ハ渋口）此書によりて明けり

渋口郷目録

一町　大戸宮　神田

二段　立花宮　神田

須家方　能登出作

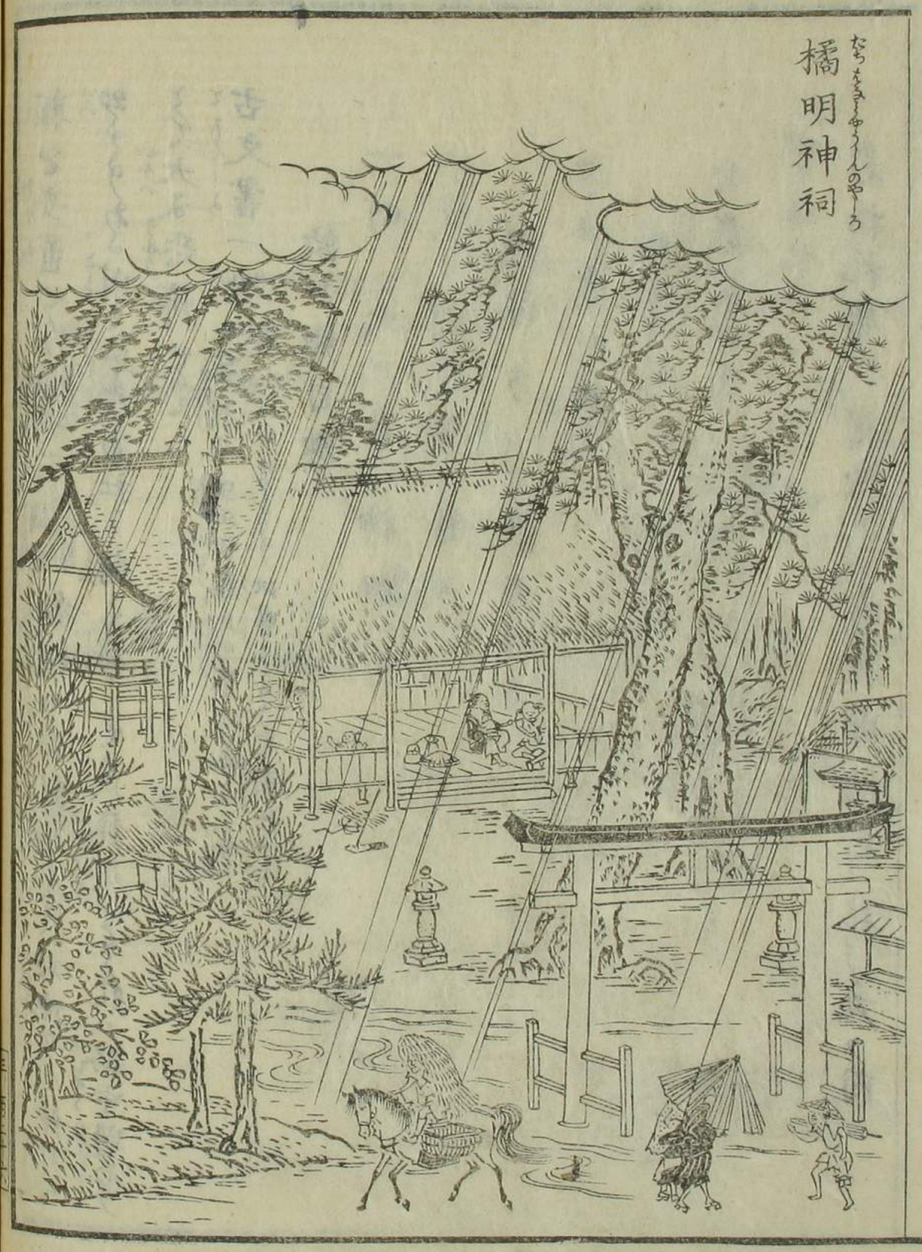
宇田壹町四反

田壹町　散在

合貳町四反　此内四段小せきめんゆるすり免のごとく以上一貫貳百三十七文　分銭

以下略之

岩松礼郡代國経ヤス武義國稲毛ノ新庄ノ内

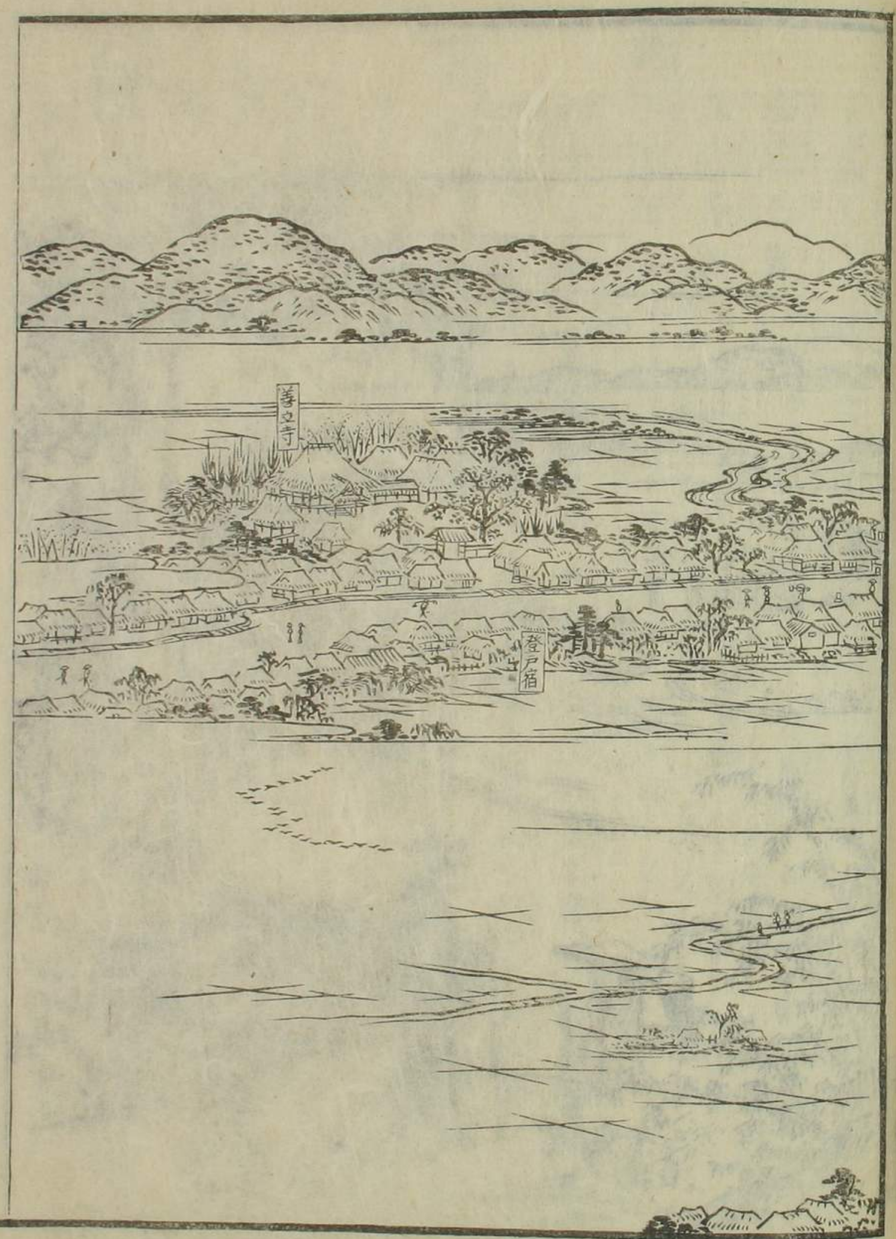


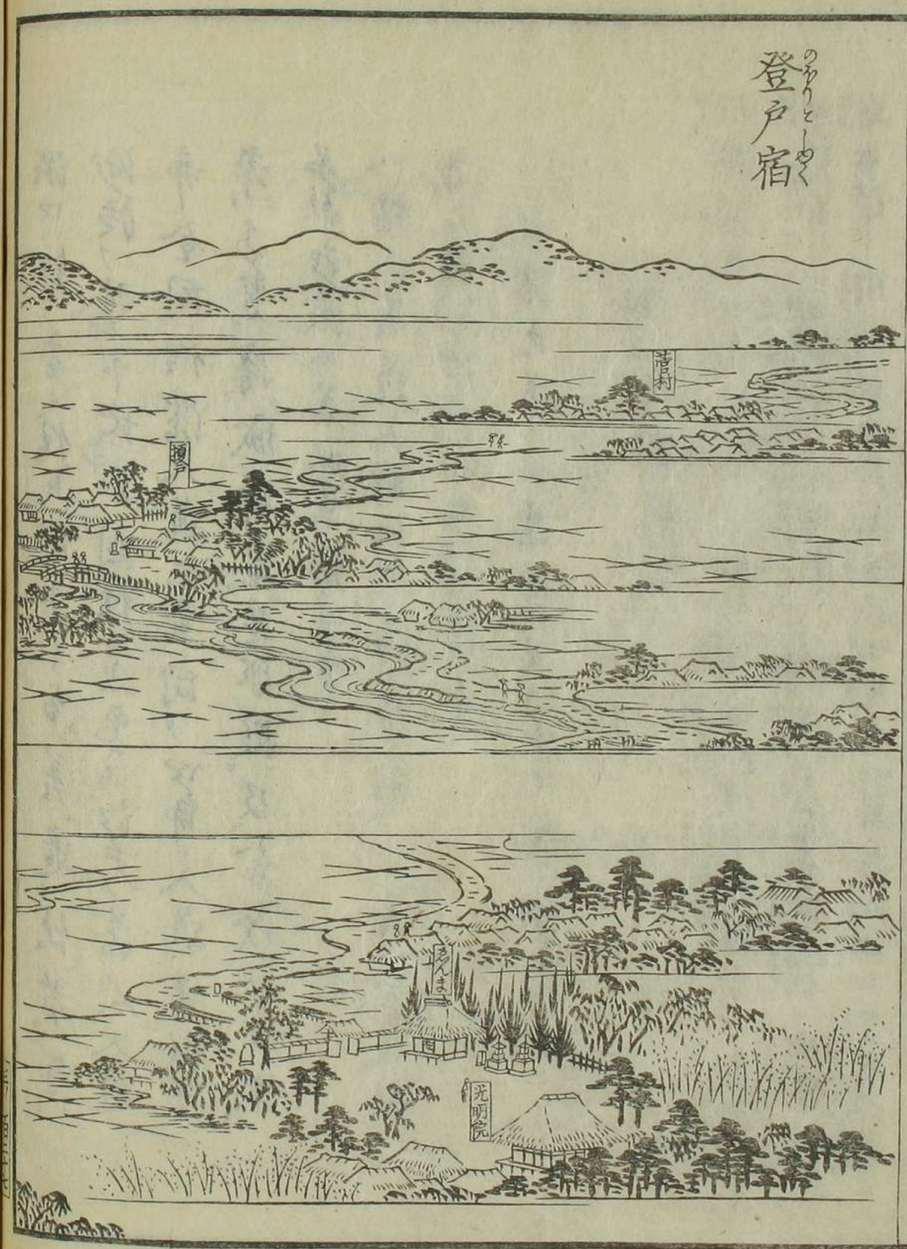
橘明神祠

淀川の郷の事任せられ仰下さるる旨美遣使者敬
沙汰を付し下地おの国往還地要と江戸の義人入道
希全同信濃入道三貞同り四郎入道道儀等
率て多勢を擬城廓を是非撥及合戦ける間
西舟を渡し若狭兵部少輔
八幡大菩薩六所大明神御罰この義影に沈此
旨この夢に御告げ出現遂て
元徳元年七月廿三日　沙弥至敬　在判

逸文　此奉祈石

桐傳往古日本武尊東征の時此地より發船なりと云
先よ挙て不の紀伊の国其四方なりと云上古ハ戎ハ武尊此海中風浪の難ふ
品川神奈川の地共ひとつの海なりしとの
逢ひ頃橘姫の御衣及ひ冠その具抔此山の下よ漂着せ


善光寺
登戸宿


のぶりと宿
清水村
瀬戸
善光寺
光明院

とも云てその説一なし

舟田も船の着て

右近屋敷　社地の右よりあり農民藤七とゝ人居住す右近古ハ當社で奉祀の藤七ハ末裔今猶連綿として子孫繁昌せり

左近屋敷　同社地の左よりあり左近屋敷の方ハ今畑となり人居ハあるす

橘姫神廟　社地より二丁ばかり東ハ當て山の中腹よりあり五六畝の地を封し茅篠の類繁茂せり

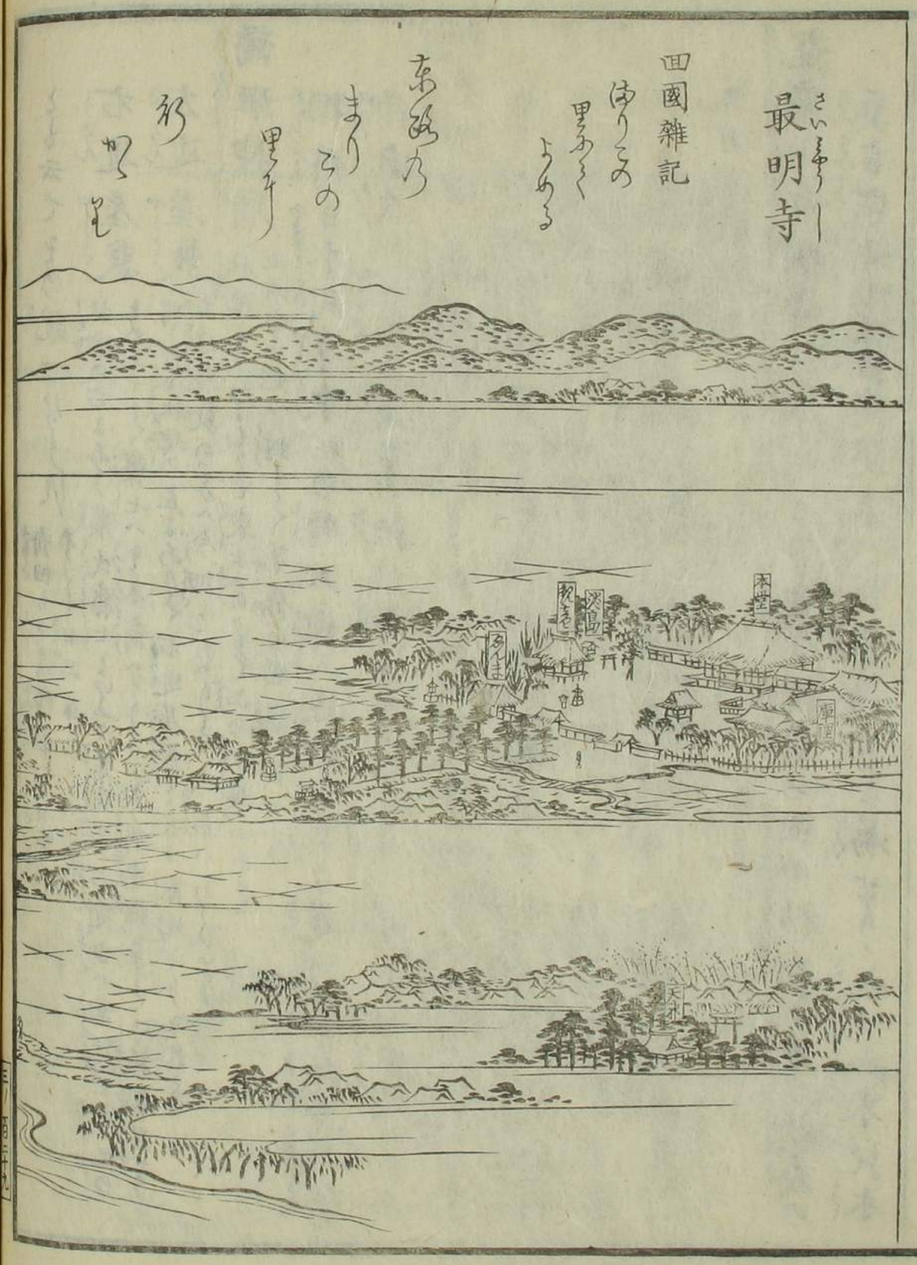
相傳日本武尊東征の時此海上逆浪の災ハ逢ひ頃弟橘姫の御衣及ひ櫛冠の具なと流れ寄たりしを土中へ収めし旧跡ありとの

大戸明神　橘明神の社より後へ二町あるを回りて西の方に山の上ハあり蓮乗院兼帯す祭神大ヰ乃辨神を祀ると云　神世七代の中二柱神

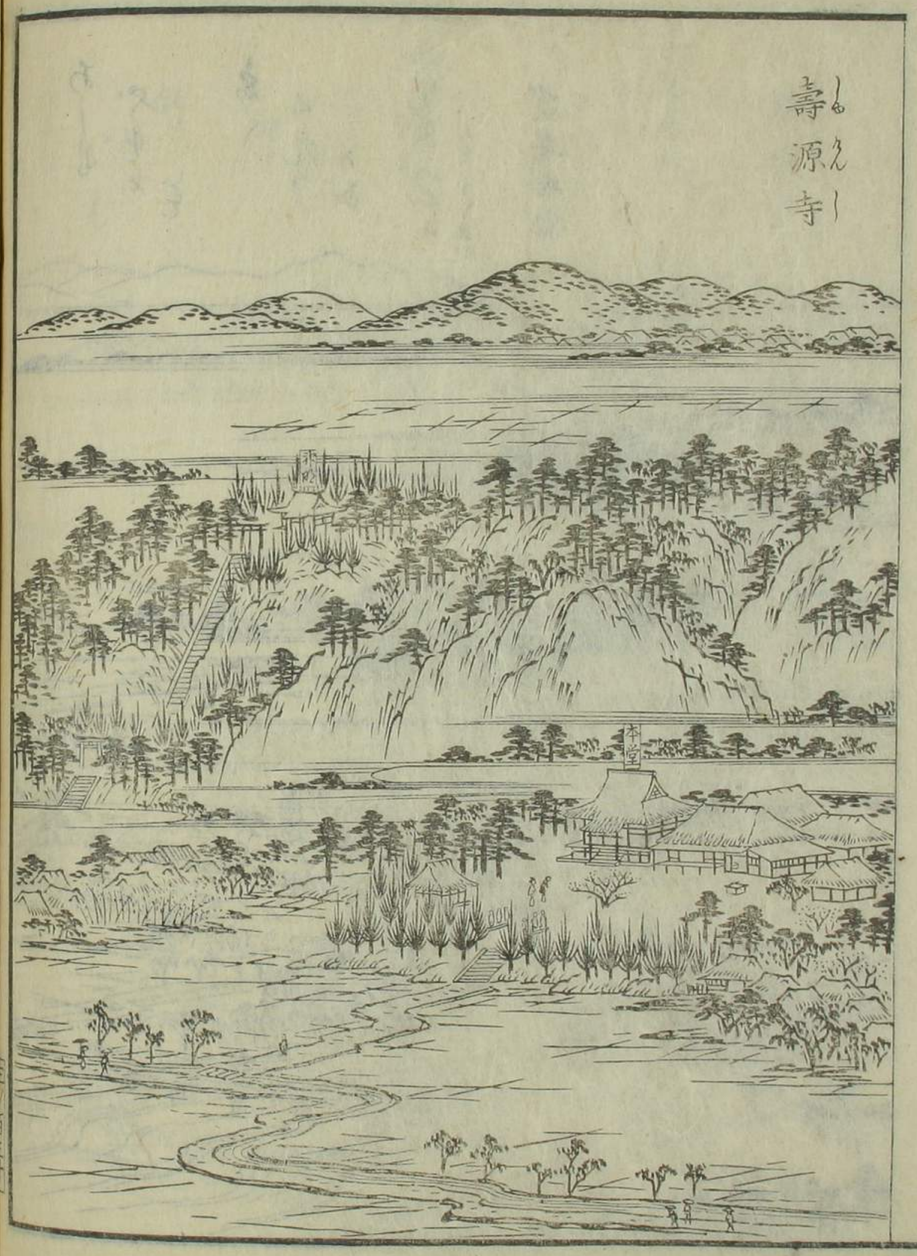
意冨斗能地神と中なり則女神ハ男神を神躰ハ一尺三四寸あり男女の容貌按ハ男神形ハ意冨斗能地神女神の形ハ大ヰ乃辨神の神影なり

やゝく二軀あるを祭礼ハ隔年九月九日ハ修行せり

龍宿山最明寺　金剛院と号丸子街道の西小杉邑よりあり新義の真言宗やゝく江戸愛宕下の真福寺ハ属せり大日如来ハ木


最明寺
四國雜記
ゆりこの
里ふく
よめる
京にて
まりこの
里より
彩
ゆり
本堂
鐘楼
観音堂
天王人

あしも
やもめ
も
ふく
れ
る
羽林ちかゝ
いくりふく云
道與准后
天王人
ナゴヤ宿
丸子
渡



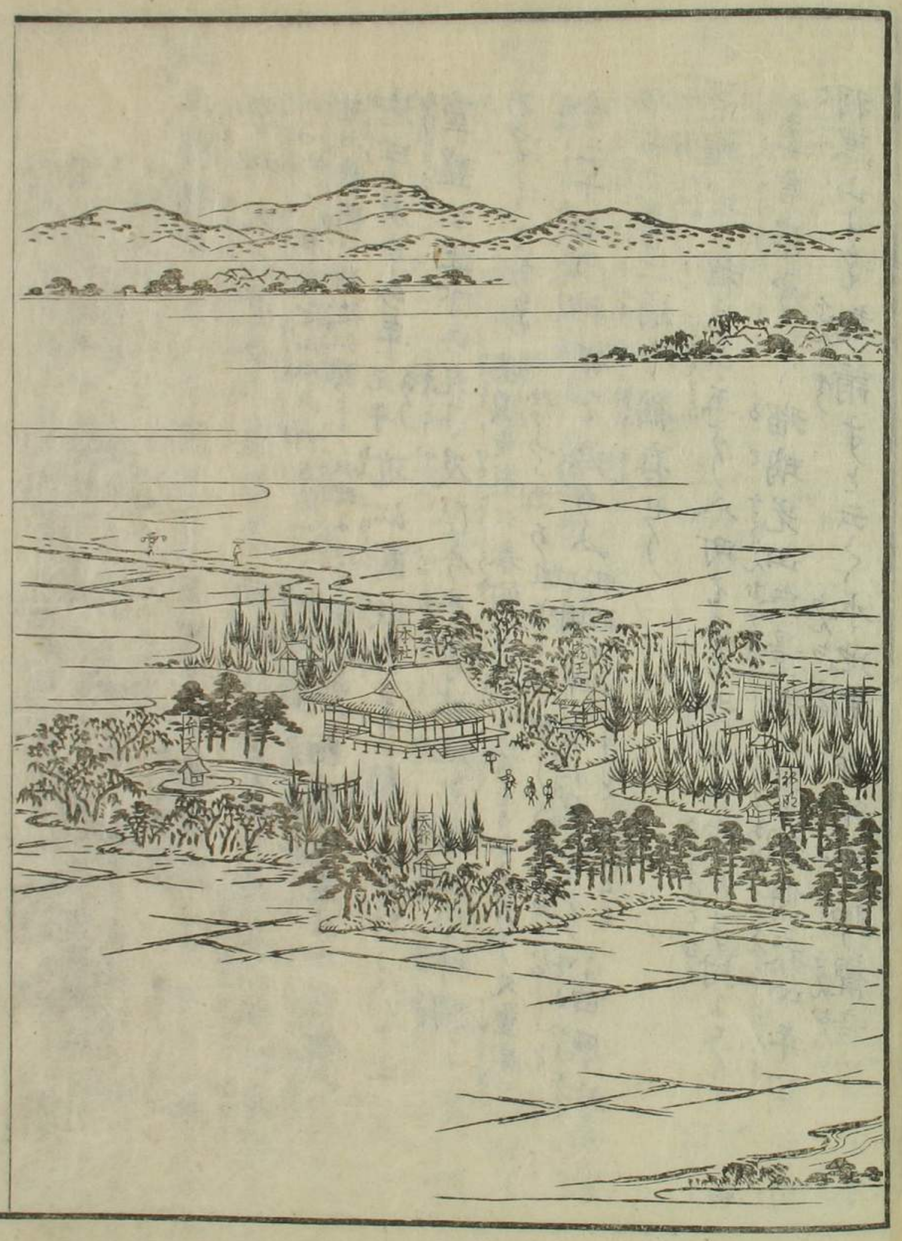
像を本尊とす北條時頼公の創建なりと云傳へく堂宇に三鱗の紋を附くる元禄の項洪水の災よりく旧記を失ふとなへくる

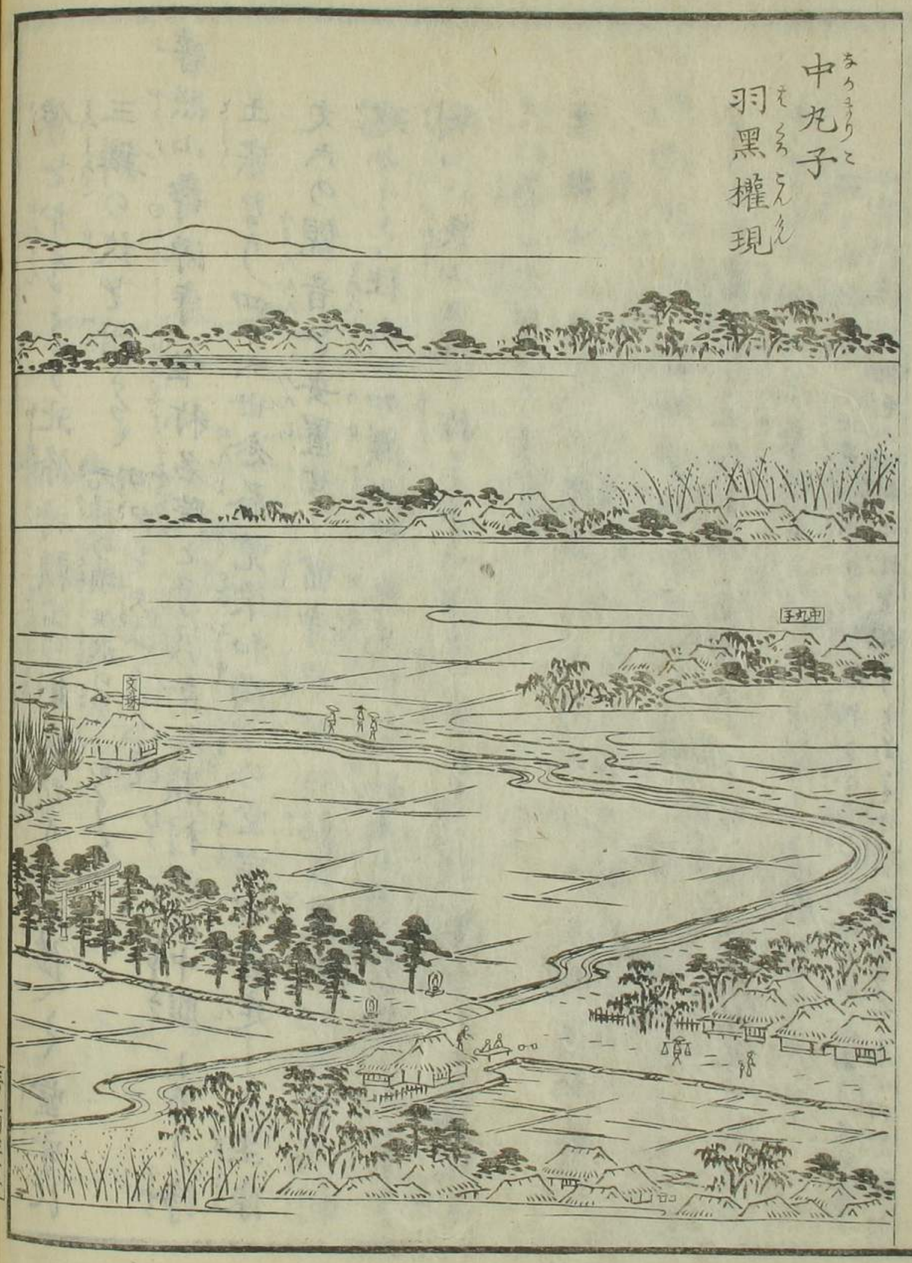
普照山壽源寺 唯称名院と号し南加瀬村岡の中腹よあり浄土宗なり四十六世念誉覚栄和尚今の堂宇を営建しく坐像丈六の観音を安置せり當寺梁牌の銘よ建武元年甲戌創建やく往古ハ加瀬山智恵光院新如来寺と号せしとなり開山ハ良山上人と称す十一世良察上人の項寛正元年庚辰兵火の為ふ亡ひうとなる

東鑑曰 弟久三年辛巳六月十四日宇治橋合戦手負人々中加世左近将監同弥次郎死了云云

小杉御殿地 最明寺の大門の傍農家の後園の地ハ旧跡なりと云慶長十三年よ御造営ありく其後万治三年よ御殿なりとなへくる云則此辺省耕のあふ微なひ御殿なりとなへく

按よ永禄二年小田原北条家の分限帳よ小菅大炊助と云名あり又同書ふ小菅摂津守稲毛小田村の地を領すとあるも小菅ハ字なへく小田原記に




なかまるとの
中丸子
もくろうえん
羽黒權現
中丸子

大永四年正月十三日上杉の家臣大田源六同源六郎謀反を起し小田原へ相図を定め氏綱伊豆相模を引率し江戸の城ハ上杉修理大夫朝興居住て敵をまもりとあるも此地の事なるべし武略なきゆへ品川小杉へ打向

山王権現社　上丸子渡口より五町ばかり西南道より左の小路より

祭神大巳貴命一座なり　祭礼ハ六月十四日　神主山本氏奉祀也

此山本氏祖先を山本平内左衛門と称し往古相傳人皇三十代欽明天皇の当社勧請の頃近江國より此地へ住せり

御宇庚申の年元年近江國坂本より移し勧請と云　後平重盛公上下の丸子及び今井等此地を当社の神領へ寄附

あるべしとあるも其項重盛公奉納の短刀と称するものあり又重盛公の印と云伝へ今秘蔵

今二十石の神領を添へ旧記を焼亡ありし小田原北条家明応八年当社焼亡ありしの古文書二通今猶存せり

羽黒権現　稲毛山王より八町ばかり南の方中丸子村にあり　別当

八真言宗　瑠璃光山無量寺と号　相傳天正年間羽州

羽黒山より勧請すと云　本地佛弥陀薬師観音等此木

像を安置す　行基大士の作なりと

追あり　江戸へ住し年久しく中風の病に侵され半身不遂小可三蔵と云る馬

なり此所彼所へ行其項当社を已に栖とせり　永享三年甲午六月

一日山伏一人来て告て曰く汝此社殿に其身甚穢り早く離れ去て名を

御海と改むべしとあり故に安堵の地なり　玉海と号く同四年乙未正月十日当社の

神の霊示を蒙り神恩を報ずべしと生涯此所に神に仕へ

華表の額に羽黒大権現と書せり　朝鮮國雪峯の筆と云

丸子渡口　相模街道なり　其邑上中下に分れ

西にあり　橘樹郡に属せり　永禄二年北条家の分限帳に上丸子の地千葉殿所領

又下丸子ハ荏原郡に属し　同書に

東鑑曰　治承四年庚子十月十日以武蔵國丸子庄賜葛西

三郎清重今夜御止宿彼宅清重令妻女備御膳但

不申其實為御給構自他所招青女之由言上云云

田國雑記　ゆりとの里あくよるの里より行かるる

ゆりとの里の里　道奥

弱林とゆるるあるあるて云く　准后

按ずるに四國雜記によりてこの里とあるふより東海道鞠子驛と混ずるあれども此記ずるに駿河の丸子のすをいふなり世俗にいふ芝の浦といふなり

[illegible]浦をるるとあるいとえるなりこの里駒林より宿をかり新羽を立て鎌倉よりいるるものを記せるをいふて世俗にあるものをもつて